



FRONTISPIECE. CAVE XIX, MAIN SEATED BUDDHA

YUN-KANG

VOLUMES XIII, XIV

雲岡石窟

第十三卷 第十四卷

PUBLICATION OF THE JIMBUNKAGAKU KENKYŪSHO

YUN-KANG

THE BUDDHIST CAVE-TEMPLES OF THE
FIFTH CENTURY A. D. IN NORTH CHINA

DETAILED REPORT OF THE ARCHAEOLOGICAL
SURVEY CARRIED OUT BY THE MISSION OF THE
TŌHŌBUNKA KENKYŪSHO 1938—45

PROFESSOR SEIICHI MIZUNO
AND
PROFESSOR TOSHIO NAGAHIRO

VOLUMES XIII AND XIV
CAVES NINETEEN AND TWENTY
TEXT

JIMBUNKAGAKU KENKYUSHO
KYOTO UNIVERSITY
MCMLIV

京都大學人文科學研究所研究報告

雲岡石窟

西曆五世紀における中國北部
佛教窟院の考古學的調査報告

東方文化研究所調査

昭和十三年—昭和二十年

水野清一

長廣敏雄

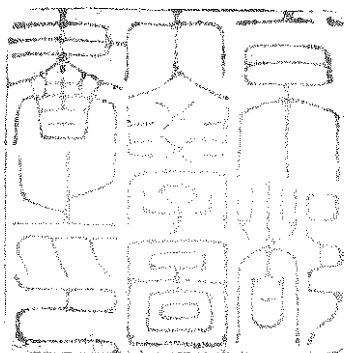
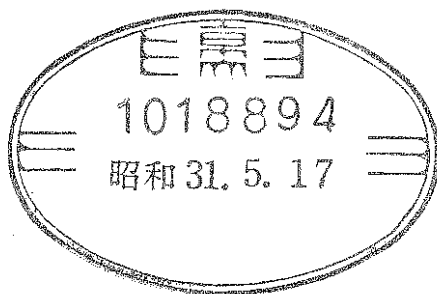
第十三卷・第十四卷

第十九洞および第二十洞

本文

京都大學人文科學研究所

1954



PRINTED IN JAPAN
BY THE "NISSHA" PRINTING CO., LTD.
日本寫眞印刷株式會社

例 言

本書は『雲岡石窟』全十五巻のうち第十三巻、第十四巻にあたり、第十九洞と第二十洞の調査と研究をまとめたものである。本文は第十三巻、第十四巻を合本にしたけれども、圖版は第十三巻第十九洞、第十四巻第二十洞と通常どほり洞別にわけた。

第十九洞と第二十洞とは、主として昭和十五年(1940)、もと所員羽館易氏が、もと所員戌亥一郎氏を助手として撮影した。第十九洞の測量は、北野正男氏が昭和十六年(1941)おこなひ、第十九A洞は昭和十八年(1943)水野が測量し、第十九B洞は同年岡崎卯一氏が測量し一部は八木正治氏の助力をえた。第二十洞の測量は、昭和十六年と十七年(1941, 1942)にわたって、長廣がおこなった。たゞ、第十九洞、第十九B洞の測量圖その他が、敗戦にあたって亡失したことは遺憾である。拓本は、双方とも、昭和十五年(1940)徐立信氏によって作製された。

本書の記述は著者二人の共同執筆であり、英文翻譯はオックスフォード大學東洋美術館 P. C. Swann 氏の手になる。

本書の刊行は、本所の出版費をもとし、文部省當局および京都大學の特別の配慮のもとに達成されたものである。

以上の諸氏ならびに諸機關に對し、心から感謝の辭をさしげるとともに、過去十數年間の調査と研究に有形、無形さまざまの援助をあたへられた數多くの人々に對し、さらに本巻の編輯に獻身的努力をはらはれた齋藤菊太郎、陳顯明、助手岡崎敬の諸氏、および一切のタイプライタの勞を擔當された川合スミ子嬢に對し、深甚の謝意を表したい。

1954年12月

著 者

目 次

例 言	ix
序 章 曇曜と雲岡石窟	1
第 一 章 第十九洞	13
1. 外壁	13
2. 南壁と東西壁	15
3. 北壁と天井	21
第 二 章 第十九A洞第十九B洞	22
1. 第十九A洞	22
2. 第十九B洞	25
第 三 章 第二十洞	31
1. 外壁と前庭	31
2. 北壁	32
3. 東西壁	36
終 章 第十九洞第二十洞の特徴	39
圖版解説(1)第十九洞	45
第十九A洞	57
第十九B洞	66

圖版解說(2)第二十洞 75

出土斷石 84

實 測 圖 目 次

I.	曇曜五窟 横斷面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖)	13, 22, 26, 31
II.	第十九洞 横斷面圖 (北野正男測並製圖)	15
III.	第十九洞 縦斷面圖 (北野正男測並製圖)	15
IV.	第十九洞 天井 平面圖 (北野正男測並製圖)	21
V.	第十九A洞 後壁, 左右壁立面圖および天井 平面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖)	24, 25
VI.	第二十洞 横斷面圖 (長廣敏雄測, 高柳重雄製圖)	32
VII.	第二十洞 北壁立面圖および縦斷面圖 (長廣敏雄測, 高柳重雄製圖)	32, 36
VIII.	A) 第二十洞 右脇菩薩 立面圖 (長廣敏雄測, 高柳重雄製圖)	34
	B) 第二十洞 左脇佛 縦斷面圖 (長廣敏雄測, 高柳重雄製圖)	36

拓 本 目 次

	参照頁
RUB. I A. 諸佛龕(第十九洞 本尊坐佛像 右手支柱 西面)	56
B. 諸佛龕(第十九洞 本尊坐佛像 右手支柱 南面)	56
C. 唐草文飾(第十九洞 本尊佛坐像 胸部襟飾)	56
RUB. II A. 諸佛龕(第十九 A 洞 門口 左側)	57
B. 諸佛龕(第十九 A 洞 門口 右側)	58
RUB. III A. 楣拱龕(第十九 A 洞 前壁 左下部 交脚菩薩龕 15)	60
B. 尖拱龕(第十九 A 洞 前壁 左中部 二佛並坐龕 7)	59
RUB. IV A. 尖拱龕(第十九 A 洞 前壁 右中部 二佛並坐龕 12)	61
B. 寶冠(第十九 A 洞 左壁 左脇侍菩薩)	62
C. 光背(第十九 A 洞 本尊佛倚像)	65
RUB. V A. 光背(第十九 B 洞 本尊佛倚像)	71
B. 光背(第十九 B 洞 左脇菩薩)	70
C. 楣拱龕(第十九 B 洞 左壁上部 交脚菩薩龕 16)	69
RUB. VI A. 光背一部(第二十洞 本尊佛坐像)	76
B. 光背(第二十洞 左脇佛立像)	77
C. 菩薩胸飾(第二十洞 左脇菩薩立像)	77
D. 唐草文衣襟(第二十洞 本尊佛坐像)	77
E. 眼(第二十洞 本尊佛坐像)	76
F. 口(第二十洞 本尊佛坐像)	76

插 圖 目 次

卷頭圖版	第十九洞 北壁本尊佛坐像 頭部 (高柳重雄畫)	iii
第一圖	第十九洞 第二十洞 平面圖 (水野清一測高柳重雄圖)	12
第二圖	第十九洞 縱斷面圖 (北野正男測並圖)	14
第三圖	第十九洞 門口 東西側 龕配置圖 (北野正男圖)	15
第四圖	第十九洞 南壁 測圖 (北野正男測並圖)	16
第五圖	第十九洞 南壁 西部上層 釋迦ラァフラ像 (北野正男測並圖)	17
第六圖	第十九洞 東壁 測圖 (北野正男測並圖)	18
第七圖	第十九洞 西壁 測圖 (北野正男測並圖)	19
第八圖	第十九洞 北壁 測圖 (北野正男測並圖)	20
第九圖	第十九A洞 門口 左右側 龕配置圖 (高柳重雄圖)	23
第十圖	第十九A洞 前壁および左右壁 龕配置圖 (高柳重雄圖)	24
第十一圖	第十九A洞 左脇侍菩薩 頭部側面 實測圖 (京都藤井有隣館藏) (北野正男測並圖)	25
第十二圖	第十九B洞 後壁 左壁および前壁 龕配置圖 (高柳重雄圖)	27
第十三圖	第十九B洞 臺座 供養者列像 (八木正治測, 高柳重雄圖)	29
第十四圖	第二十洞 および洞前 發掘圖 (小野勝年測, 高柳重雄圖)	33
第十五圖	第二十洞 縱斷面圖 (長廣敏雄測, 高柳重雄圖)	35
第十六圖	第二十洞 前出土 北魏蓮瓣瓦當拓本	38
第十七圖	第十九洞 千佛着衣圖 (北野正男圖)	40
第十八圖	第十九洞 千佛龕 圖版索引圖 (Pl. 10a, 10b)	47
第十九圖	第十九洞 千佛龕 圖版索引圖 (Pl. 15-23)	48
第二十圖	第十九洞 千佛龕 圖版索引圖 (Pl. 28, 34-37, 47b)	52
第二十一圖	第十九洞 千佛龕 圖版索引圖 (Pl. 42-46, 47a)	55
第二十二圖	第二十洞 光背 圖版索引圖 (Pl. 22-27)	78
第二十三圖	第二十洞 光背 圖版索引圖 (Pl. 29-34)	80

序 章

曇曜と雲岡石窟

I

『漢書』卷九四上の匈奴傳に、武帝の元光二年(133 B.C.), 匈奴の單于が十萬騎をひきゐて武州塞に入寇したと書いてある。これは武州塞の名が史書にみえるはじめである。漢代における武州塞は、もとより邊郡の防備線上にあった。それが、北魏になると、國都平城にちかい要所であった。『魏書』卷一〇八の禮儀志によると、太宗明元帝の永興三年(A.D. 411)三月に、帝は武周山の山頂で天地の神祇にいのり、のち年ごとにこゝで親祭してゐる。武周山は、いふまでもなく武州山であり、『魏書』卷七上の高祖紀には、武州山に雨をいのつたと明記してある。これが今日いふ大同西郊の雲岡である。

いまこゝに石窟がいとなまれるやうになった、その由來は、『魏書』卷一一四の釋老志に、つぎのやうにするされてゐる。

曇曜 帝にまうす、「京城の西、武州塞において、山を鑿りたる石壁に、窟五所をひらき、佛像おのおの一を鑄健せん」と。たかきもの七十尺、つぎのもの六十尺。彫飾は奇偉にして一世に冠たり。

發議が沙門統曇曜にあり、經營が帝室によることはあきらかである。また、ひらいた石窟が五所あり、おのおの魏尺で六、七十尺の尊像一體をおさめたことも明白である。魏尺の六、七十尺は、ほゞ14.10 メートル、あるひは16.45 メートルにあたる。¹⁾尊像を一體づゝおさめた石窟五所とは、第十六洞から第二十洞にいたる五大石窟であることは、まうすまでもない。この五窟は、その所在といひ、様式といひ、規模といひ、最初の五大窟に比定されるのに、もつともふさはしい。それで、これを曇曜五窟といふ。これほどに草創の事情はあきらかであるが、その開始の年は記載がない。

たゞ、曇曜奏請の、この記事は和平初年(A.D. 460)に曇曜が師賢について沙門統になったことについて書かれてゐる。和平以後であることはあきらかである。ところが、この二つの記事のあひだに、曇曜が中山から國都平城におもむいたことを記してゐる。いはく、

はじめ曇曜は、復佛の明年(A.D. 453)をもつて、中山より命をかうむり京におもむく。帝の出づるにあひ、路にまみゆるに、御馬すゝんで曜の衣をふくむ。時のひとおもへらく、馬は善人

を識ると。帝のち奉ずるに師禮をもつてす。

と。これは新沙門統曇曜を説明する一挿話である。こゝにいふ復佛の翌年と曇曜の開鑿とは、なにも関係がない。だから、石窟の開鑿を和平元年(A.D. 460)といふわけにいかぬが、とにかく曇曜が和平元年に沙門統となつてから、最初に着手した大事業であつたことだけは確實である。それで和平元年でないにしても、その後一兩年のうちであつたことは、うたがひをいれない。

雲岡の五大窟に關して、もうひとつ重要なことは、これにさきだつ五級大寺²⁾の五體釋迦像の記事である。その條にいはく、

興光元年(A.D. 454)秋、有司に勅して五級大寺内において、太祖以下五帝のために、釋迦立像を鑄る。おのおの一丈六尺。すべて赤金をもちふること二萬五千斤なり³⁾。

と。これは銅の佛立像であつたらしいが、太祖以下五帝のための追善であつたことが明白である。したがって、これについてつくられた雲岡の五大窟も、また太祖以下の五帝のためにつくられたものと推定してよからう。して、その五帝とは、

- (1)太祖道武帝(A.D. 386-408) — (2)太宗明元帝(409-423) — (3)世祖太武帝(424-452) —
(4)恭宗景穆帝 — (5)高宗文成帝(452-465)

である⁴⁾。このうち三帝はなくなった天子であり、つぎの一帝は位につかなかつた天子であり、最後は現存在位中の天子である。生存中の天子のために福をいのることは、當時の造像記にもみられる一般的風潮である。けつして異例なものではない。現に「釋老志」の記事にも、すぐこのまへに現存在位中の天子のために、佛像をつくつたらしいことがうかゞはれる。それによると、

この年(A.D. 452)、有司に詔あり、石像をつくり、帝身のごとくならしむ。すでになりて顔上足下におのおの黒石あり、帝體上下の黒子と冥同す。論者もつて純誠のいたすところとなす。といふ。これは石の佛像をつくり、帝身の大きさにしたのである。これには「釋老志」のいふ帝は「當今の如來なり」といふ觀念がはたらいてゐることは當然であるが、また、同時にその帝の福をいのつてゐることも、うたがひがたい。

2

さて、ひるがへつて曇曜その人をみよう⁵⁾。

1 關野雄「古代中國の尺度について」(東洋學報, 第35卷3・4號), 東京1953年刊, p. 234. 北魏はほど後漢尺によつたものとおもはれる。

2 いまの『魏書』釋老志には五級大寺とあるが、『廣弘明集』(大正大藏經, 第五二卷, p. 103) 卷二ひくところの『魏書』釋老志には五級大寺となつてゐる。たぶん五級の塔をもつた大寺であつたらう。

3 劉復「新嘉量之校量及推算」(考古學論叢, 第二), 東京1930年刊, p. 21によれば、ほど5,566キログラムと推算される。

4 塚本善隆「雲岡三則」(支那佛教史學, 第3卷第4號, のち支那佛教史研究所收), 京都1942年刊, p. 219-225.

5 塚本善隆「沙門統曇曜とその時代」(支那佛教史研究所收), p. 131-164.

曇曜の生れた年も、なくなった年もわかってゐない。けれども、北涼の沮渠牧健(A.D. 433-439 在位)のとき、禪業をもって稱せられ、また、その太傅張潭から師の禮をもって遇せられたといふ。¹⁾ 北涼(A.D. 396-439)は鮮卑族沮渠氏のたてた國で、張掖に都があつた。その太傅張潭は武威姑臧の人、和寧の令となり徳化をしき、百姓から父母のごとくにしたはれ、「慈君」とよばれたといふ。²⁾ つまり曇曜は、實踐的な習禪の業で時人に稱され、また縣民から「慈君」としたはれた徳行家の太傅張潭から、師禮をもって尊敬されてゐたのである。だから、どうわかくかんがへてみても、もはや二十才以上、三十才にちかい年であつたらう。

してみると、かれは太武帝の北涼平定(A.D. 439)に際し、玄高や前沙門統師賢などゝともに、北魏の都平城にうつりすんだのであらう。かの「釋老志」にいふ、北涼をひらぎ、その國人を平城にうつす、「沙門や佛寺みなともに東す」と。まさに、その一例をしめすものである。涼州人の移住、涼州文化の移植によって、國都平城はますます隆昌におもむいたが、それもつかのま、まもなく太武帝の廢佛がはじまつた。それは太平眞君七年(A.D. 446)のことであるが、それまでに曇曜はすでに操尙をもって知られ、ある程度、篤信の皇太子晃の信任をえてゐたやうである。「釋老志」には、つぎのやうにいふ、

これよりさき、沙門統曇曜は操尙あり、また恭宗の知つて禮するところとなる。佛法の滅せられるや、沙門おほく餘能をもってみづからいたし、還俗して見をもとむ。曜はちかつて守死せんと欲す。恭宗したしく勸諭をくはえ、再三にいたる。やむをえずしてやみ、ひそかに法服器物を持し、しばしも身をはなさず。きくものこれを歎じおもんず。

と。還俗をがえんぜず、死をもつてまもらうとしたことは、さすがに操尙をもつてきこえたかれに、ふさはしいといへようか。廢佛中のおこなひも、これで、ほゞ察せられるであらう。しばらく彈壓の急な國都をはなれ、地方の中山(河北省定縣)に身をひそめることになった。ときに曇曜は四十歳前後であつたらう。

やがて恭宗歿し(A.D. 451)、太武帝崩じ(A.D. 452)、同年文成帝によって佛教復興の詔がくだされた。ついで、その翌年(453)、曇曜はめされて中山を發し、國都平城におもむいた。こゝで、さきに引用した御馬の一件があつて、恭宗の子たる文成帝に知られるにいたつたのである。文成帝は十三歳で即位したから、このときは十四歳である。文成帝が廢佛以前に父恭宗のもとで、曇曜を知つてゐたかどうか、中山の避難中に連絡があつたかどうか、それはわからない。文成帝は幼少であつたとしても、側近に知人がゐることは充分にかんがへられるし、ときの道人統師賢も涼州からうつ

1 慧皎(A.D. 497-554)『高僧傳』(大正大藏經、第五〇卷、p. 398)、卷11にいふ。「ときに河西國は沮渠茂虔あり。ときに沙門曇曜あり。また禪業をもって稱せらる。僞太傅張潭ふして師禮をうく。」

2 崔鴻『十六國春秋』(太平御覽、卷二六八所引) 北涼錄「張潭あきなは元度、武威姑臧の人なり。和寧の令となる。政は徳化をもって本となし、威刑につとめず、民あやまちあるものは孝經と忠臣孝子傳をよましめ、これを訓導す。百姓これを愛すること父母のごとく、號して慈君といふ。」

りすんだ僧侶であった。まもなく和平初年(A.D. 460)になって、道人統師賢がなくなり、曇曜はその後繼にえられた。道人統の名も沙門統にあらためられた。沙門統とは、後秦の僧主、南朝の僧正などにあたり、宗教行政の長官である。その役所は僧曹とよばれた。

曇曜は、さきに涼州において太傅張潭に、いまはまた文成帝に、師禮をもって遇せられたといふ。師禮をもって遇するといふのは、抽象的に師として尊敬されたといふのでなく、師僧として經典の講誦をうけるとか、持戒や供養や造寺造像等の、宗教的實踐をしたしく指導されるとか、さういふ具體的な事實をさす。さうして、このばあひ曇曜のやうに禪業を稱せられた僧侶であってみれば、佛典の講誦より、やはり、なにか功德を修する善業に、みちびかれるといふことであつたらう。そのころ造像、造寺には、かならず師僧とか、導師とかよばれるものがあつて、その善行を主宰し、篤信の衆庶をみちびいたのである。つまり、沙門統曇曜は、帝の師僧として武州塞の五石窟を開鑿し、五帝の現世また來世の福業を修することになったのであらう。ときに曇曜は、もはや四、五十歳に達してゐたであらう。

3

さて帝室の力で雲岡に五大石窟をつくることになったが、曇曜は沙門統であつたから國都の平城に居住したやうにもおもはれる。しかし、唐の道宣(A.D. 596-667)の『續高僧傳』(大正大藏經, 第五〇卷, p. 427, 428) 卷一、曇曜傳では、石窟通樂寺にあつて、諸僧をあつめ譯經に従事したとつたへてゐる。¹⁾ おそらく、雲岡に居住してゐたものとおもふ。これだけ大規模の石窟をつくることは、けつして生やさしい事業ではないからである。

曇曜が譯經に従事したことは、「釋老志」にもかんたんに書かれてゐる。すなはち、

曇曜また天竺沙門常那邪舍等と新經十四部を譯出する。
Ch'ang-na-hsieh-shé

といふ。この新經十四部のうち、現存するものについていふと、『付法藏因緣傳』(大正大藏經, 第五〇卷) 六卷と『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷) 十三卷は吉迦夜との共譯である。また僧佑(A.D. 445-518)の『出三藏記集』(大正大藏經, 第五五卷, p. 13) 卷二には、この二部のほかに龍樹の『方便心論』二卷があり、ともに吉迦夜との共譯になつてゐる。道宣の『續高僧傳』卷一には、『付法藏傳』のほかに『淨度經』²⁾があるが、『方便心論』も、『淨度經』も、ともにいまつたはつてゐない。譯經に關して興味あるのは、あの有名な『世說新語』の註者劉孝標こと、劉峻(462-521)が、こゝにゐて、曇曜等のために筆受の役をうけもつてゐることである。³⁾

1 「釋曇曜は……恒安石窟通樂寺に住す、……ゆゑに北臺石窟において諸德僧をあつめ、天竺沙門に對し、『付法藏傳』ならびに『淨度經』を譯す、」とある。

2 『淨度經』の名は、しばしば『淨土經』とも記されるが、『淨度經』が正しいであらう。

3 僧佑『出三藏記集』(大正大藏經, 第五五卷, p. 13) 卷2.

『付法藏因緣傳』は、釋迦の滅度後、法統の連綿としてつたへられてゆく、一種の佛教史である。いま、こゝに譯出されるにあたっては、あの生々しい廢佛の記憶があり、法を末代までもつたへようとする意欲がつよく感ぜられる。現行本は秩序がなく、のちの輯本にすぎないといはれてゐる。¹⁾しかし、だいたいの性質はうかゞへるものとおもふ。『雜寶藏經』は、本生談や因緣談をあつめたものである。そのなかのはなしが第九、第十洞に多いことは、本書第六卷(p. 44)にといたごとくである。ことに、その主室の南壁は、これらの説話の造形化につとめたあとが明瞭であつて、とくに天女華蓋因緣、兄弟二人出家因緣、尼乾子投火因緣、八天問法因緣のごとく、他書にみない因緣談の數多くみられることは、譯經と造窟とのふかい關連がかんがへられ、兩者がともに曇曜の手でつくられたことが、おもひあはされるのである。曇曜はこゝにゐて石窟の開鑿を主宰するとともに、こゝを譯經の道場とした。そしてかくのごとく因緣比喻談を、しばしばくりかへしとくことによって、大衆教化の目的を達しようとしたのであつた。

『淨度經』は『淨度三昧經』ともいはれ、²⁾おそらく曇曜のもとでできたとおもはれる『提謂波利經』³⁾と同類の偽經で、卑近な實踐的經典であつたらう。『淨度經』の一二の文は、たとへば唐の法琳(A. D. 572-640)の『辯正論』(大正大藏經, 第五二卷, p. 495)のうちにも、みいだされる。

淨度經にいはく、まさに九齋を持すべし、いはゆる歳に三、月に六なり、九齋は九神に應ず、九惱をのぞき、九惡を滅し、九病を愈す、三齋は三界をいて、三道をもとめ、三流を判じ、三苦を斷じ、三毒を治し、三途をふさぎ、三尊に應ず、六齋は六情を制し、六賊を禁じ、六衰をとゞめ、六和をおこし、六徳をなすと。

また、

淨度經にいふ、八王とは八節日をいふなり、天王の奉ずるところの文書が、一歳に入出するをいふ、ゆゑに八王と稱す、この日もつとも急、歳をはり事をはり、考課が結定するをいふ、うへにいふ天帝、三十二臣、四鎮、司命、司録、閻羅、つかさどるところの神明が聽察し、罪福を疎記し、尊卑をいとはず、一月に六奏す、六たびの齋日これなり、一歳に三覆す、すなはち三たびの長齋月なりと。

といふ。在家の卑近な實踐をとくもので、『提謂經』がひじやうないきほひで江南にいたり、隋唐におよんで強固な信仰をもつたあとをみると、この曇曜の卑近な大衆的指導は、當時にふかく浸透したかとおもはれる。³⁾さきの『雜寶藏經』にもトラプシアとバリカのはなしはあり、同書がかうした卑近な信仰説話にとむことも、曇曜の人となりをよく反映してゐるとおもふ。雲岡の造像にも、しばしばトラプシアとバリカの因緣談(本書, 第五卷, Pl. 63, 第九卷, Pl. 56, 第十一卷, Pl. 45)があらは

1 H. Maspero, *Sur la date et l'authenticité du Fou-fa-tsang-yin-guan-tehouan* (Mélanges d'Indianisme offerts par ses élèves à M. Sylvain Lévi), Paris 1911.

2 智昇『開元釋教錄』(大正大藏經, 第五五卷), p. 539.

3 塚本善隆「支那の在家佛教特に庶民佛教の一經典」(東方學報, 京都第12卷3冊, のち支那佛教史研究所收), p. 293-353.

されてゐる。

曇曜は、ほかに密教的な『大吉義神呪經』(大正大藏經, 第二一卷) 四卷を譯してゐる。これも單に密教的な經典といふより、曇曜にとっては雨をよび、寶珠をもとめる呪法として、重點があつたのかとおもふ。おそらく、大衆にはたらきかけるうへには、その方がよかつたのであらう。『魏書』には、曇曜の譯業に常那邪舍の協力がかたられてゐるが、他の文献にはまったくみられない。むしろ吉迦夜の名がしばしばみえてゐる。同一人であらうか。

唐の智昇の『開元釋教錄』(大正大藏經, 第五五卷, p. 539, 540) 卷六には、曇曜の譯業として、つぎの諸經があげられる。

大吉義神呪經	二卷	或四卷
--------	----	-----

淨度三昧經	一卷	
-------	----	--

付法藏傳	四卷	
------	----	--

三部七卷があげられ、吉迦夜が沙門統曇曜のために譯したとして、

大方廣菩薩十地經	一卷	
----------	----	--

稱揚諸佛功德經	三卷	
---------	----	--

方便心論	一卷	或二卷
------	----	-----

付法藏因緣傳	六卷	或四卷, 或云二卷
--------	----	-----------

雜寶藏經	八卷	錄云十三卷
------	----	-------

五部十五卷があげられ、前者は和平三年(A.D. 462)のことゝし、後者は延興二年壬子(A.D. 472)のことゝし、後者には劉孝標が參加して筆受したといつてゐる。これは曇曜の譯業を總括したものであるが、嚴密には、なほ検討すべき余地があるとおもふ。

曇曜は、もとより一世の信賴をえたであらう。また、石窟の造營には、畢生の努力を傾倒したことゝおもふ。けれども、この大事業は、さうたうに困難をきはめたにちがひない。一時に多數の工人を使役して、工事をすゝめたことは、第十九洞の千佛龕造成(p. 49)においても推定されたごとくである。ところが、この大事業の第一の缺陷は、石窟の構造的な脆弱さにあつた。まだ經驗したこともない大きな大佛をつくるものとしては、雲岡の岩塊は、あまりにももろかつた。水成岩のところどころに脆弱な層がみいだされた。それは第二十洞から第十六洞にいたるまで、いたるところにみとめられる。さうして、それは切石を嵌入することによって一部はおぎなはれたのである。これにくらべると、第七、第八洞、第九、第十洞の中央群は、はるかによい岩壁を提供した。けれど

も、大龜裂はいたるところにおこったやうである。崖のはしに、大きな空洞を急速につくることは、自然にこの岩山のバランスをやぶることになり、大龜裂がしばしばおこったのはやむをえないことといへよう。その大龜裂のぶきみな音響を、つねに石窟寺にすまっていた曇曜は、たびたび経験したことであらう。さいわひに、崩落してしまったといふやうなことは、なかったかも知れないが、どの石窟も東西にわたる大龜裂をもっている。それらは、たぶんその当初からのものであったとおもはれる。

かういふ技術上の困難もさることながら、さらに経営上の困難をしめすものがある。それは、この第十六洞から第二十洞にいたる、いはゆる曇曜五窟が、いまだに完全に終了してゐないことである。たとへば第十七洞本尊の足部、また第十九東脇洞下部のごとく、下部ではいたるところに未完成の部分がある。追刻の佛龕は、もとよりべつであるが、基本大像の計畫變更も第十六洞をはじめとして、第十九西脇洞でもみられる。さうして、べつに推定したごとく、第十六洞の本尊や、第十九西脇洞の現存する二尊が、様式上第五、第六洞とおなじころにできたとしなければならぬとすると、たぶん、太和の初年(A.D. 477)まで、これらの工事がまだをはってゐなかったことを證するわけである。だから、北魏最盛期の帝室の力をかたむけても、これだけの石窟をつくることは、實に大なる難事業であつたことを知るのである。したがって、それにつけても曇曜の信望と不屈の精神とが、あらためてしのばれるであらう。

「釋老志」によると、のちに龍門の石窟をつくるにあたり、二十四個年、602,366人の動員をものがたるが、それが未完二洞をふくむ賓陽三洞の工事であつた。¹⁾したがって、曇曜五窟、第七、第八洞、第九、第十洞だけとってみても、その動員の大きさがしのばれるではないか。かれは、この困難を克服するために、あるひはかういふ困難をもふくめた寺院經濟の充足のために、ひとつの重要な施策を奏請した。それが僧祇戸と佛圖戸の創設である。「釋老志」にはかうかいてゐる。

曇曜奏す、平齊戸および諸民にして、よく歳に穀六十斛を僧曹に輸するものは、すなはち僧祇戸となし、粟は僧祇粟となし、儉歳において饑民に賑給せんと。また奏す、民の重罪をおかせるもの、および官奴をもつて佛圖戸となし、もつて諸寺の掃洒に供し、歳ごとに田をいとなみ、粟を輸せしめんと。高宗ならびにこれをゆるす。こゝにおいて僧祇粟および寺戸は州鎮にあらまねし。

高宗ゆるすは、高祖ゆるすであつて、承明元年(A.D. 476)ごろにあるべきは、塚本善隆博士が考證されたごとくである。²⁾文面のとおりであれば、佛圖戸は寺院に屬する奴隸で、寺院の役務にしたがひ、田地の耕作までおこなつたのである。僧祇戸は僧曹、つまり宗教行政の機關に歳六十斛(1,203

1 水野清一、長廣敏雄『龍門石窟の研究』、東京1941年刊、p. 126, 127.

2 劉復『新嘉量之校量及推算』、p. 21 によれば、1,203.8 リットルと推算される。

3 塚本善隆『北魏の僧祇戸・佛圖戸』(東洋史研究、第2巻3號、のち支那佛教史研究所收)、p. 165-313.

リットル)をおさめ、それが僧祇粟として凶年の救済物資になるのみで、なんら寺院に利益をもたらさなかったごとくにみえる。しかし、實は僧祇粟とよばれるごとく、まづ山林僧尼の支給にあて、また夏安居の給與にあて、寺院各種の給與にあてたあとが、凶歳用にのこされるのである。そのうへ、ときにはこれを民間に貸與して利子の収入さへはかったやうである。¹⁾

もともと平齊戸は皇興三年(A.D. 469)山東平定ののち、その民望をうつして朔縣の西にたてた平齊郡の戸である。この郡には懷寧、歸安の二縣が屬し、縣令も降人よりえらんだが、郡守も降將崔道固を任命した。かれらは、もともと降服者であるとともに、北方の水土にならず、あまっさへ凶年がつづいたので、民情すこぶる騒擾をきはめた。それで、これを佛教的教化のもとにおき、宗教的奉仕をもとめ、これを自分が統監する僧曹の管理下においたのである。これがもともとの僧祇戸の意味であって、一種の宗教的な救済であつた。で承明元年における僧祇戸の創設は、直接には延興三、四年(A.D. 473, 474)における凶歳といふことに原因があるが、その不平分子をともかくも統轄してゐた太守崔道固の死、またその子で太守をおそうた崔景淵の相ついだ死が、その實現をはやめたこともたしかである。けれども、これは特定の寺院に屬するものでなく、國家の僧曹に屬するものであり、その長官たる沙門統曇曜の統轄下にはいったものである。

このとき、曇曜は六十歳前後であつたとおもはれる。

5

この承明元年(A.D. 476)といふ年には、太上皇帝であつた顯祖獻文帝が暴崩してゐる。孝文帝は位にあつたけれども、わづかに十歳、實權は文成帝の皇后で、孝文帝の義理の祖母たる文明太后馮氏の手にあり、これをたすけるものに馮氏の兄、馮熙があり、最高政治顧問に高齢の高允があつた。沙門統曇曜は、もとより朝野の信頼をえてゐたものとおもふ。この年「釋老志」にはいふ、

承明元年八月、高祖は永寧寺において、大法供をまうけ、良家の男女を度して僧尼となすもの百有餘人なり。帝はために剃髮し、ほどこすに僧服をもつてし、道戒を修せしめ、福を顯祖に資す。

顯祖獻文帝の冥福をいのつたと明記してゐる。ところが、この年からつぎの太和元年にかけては、實にひんばんに佛事がいとなまれた。『魏書』をみると、

¹⁾「釋老志」にはつぎのごとくいふ。「僧祇の粟は、もと清施を期す。儉年に出貸し、豊かなれば收入し、山林の僧尼は口にしたがひ給施す。民の窘弊するあれば、また、すなはち賑給す。主司は利をおかし、はかつて贏息をとり、その徵責におよんでは水旱をはからず、あるひはつぐなへる利が本をすぎ、あるひは券契を翻改して貧下を侵蝕し、紀極を知るなし。細民嗟毒し、歲月とともにいよいよふかし。これ窮乏をあはれみ、慈拯を宗尙するのゆゑんの本意にあらざるなり。いゝゝ」『廣弘明集』(大正大藏經、第五二卷, p. 272)卷二四に、高祖の詔をひいて「諸州に勅し、この夏安居の清衆をして、大州三百人、中州二百人、小州一百人、その數處に任じて講説し、みな僧祇粟を供備せしむべし。もし粟すくなく、徒すくなく、この數にみたざるは、昭玄をして減をはかり、還聞せしむべし」といふ。

この月(八月),また詔して建明寺をたつ。釋老志

(十月)辛未,輿駕 建明佛寺に幸し,大いに罪人をゆるす。高祖紀

太和元年,二月,永寧寺に幸し,齋をまうけ,死罪の囚をゆるす。釋老志

三月,また永寧寺に幸し,會をまうけ行道せしめ,聽講して,中秘二省に命じ,僧徒と佛義を討論せしめ,僧に衣服寶器をほどこすこと差あり。釋老志

また,方山の太祖が壘をいとなみしところに,思遠寺をたつ。釋老志

等とあらはれてゐる。この一連の行事は,みな獻文帝の冥福をいのったものとおもはれる。『魏書』卷八七,節義傳をみると,恒農郡北陝縣の人,王玄威は獻文帝が崩ずると,城門外に草廬をたて,厳格な喪に服し,百日にいたると,家財をつくして四百人齋會をまうけ,百僧供をおこなった。それに對し,朝廷はかれを旌表してゐるのである。さきにあげた十月辛未の建明寺への行幸は,獻文帝の崩御とおなじ干支の日であるから,百二十日たつてゐるわけである。王玄威が,百日の喪に服してのち齋會をまうけてゐるのをみると,この百二十日後の行幸も,やはり獻文帝の冥福をいのったことはあきらかであらう。

かういふやうに獻文帝に對して朝野の追善が手あつのは,帝が佛教のふかい理解者であり,またはやく讓位して謙讓の德にあつかったうへに,しかも皇太后の手にかゝり非業の最後をとげたといふ點が,ひろく一般の同情をあつめたためとおもふ。この篤信,謙讓の,不幸な天子に對し朝野の同情が糾然とあつまったとすると,加害者がはの恐怖,あるひは悔悟もおのづからつよく,自然に手あつた追善にむかったであらう。したがって,また雲岡石窟においても,これに對し,なにかの事業がいとなまれることも,きはめてありうべきことといへよう。

それにつけてかんがへあはされるのは,第五,第六洞の造營である。この二洞は,まったくあたらしい様式のもとに一氣にしあげられてゐる。帝室の造營であることはうたがひをいれぬ。そのうへ,造營の迫力が他の追従をゆるさない。この一對の大石窟が,すみずみにいたるまで,一貫した設計と様式のもとに,中斷することなく遂行され,完成をみたことは,なみなみならぬ經營者の經驗と熱意とがかんがへられる。曇曜五窟の設計變更とか,一部の未完成とかにおもひをいたすならば,このことはとくにふかく感ぜられる。文成帝までの五帝に五大石窟ができたとなると,この不幸な獻文帝のために,この一雙洞がつくられたことは,きはめてふさはしいことだとおもふ。

『魏書』卷七上,高祖紀の太和初年における三回にわたる石窟寺行幸は,この工事の進行,乃至完成などに關連したものであらう。すなはち,

(太和四年八月)戊申,武州山石窟寺に幸す。

(太和六年三月)辛巳,武州山石窟寺に幸す。

(太和七年)五月戊寅朔,武州山石窟寺に幸す。

と。太和七年が最後である。もし,このとき開眼供養がおこなはれたとすると,超スピードで,こ

の七年間に完成をみたものと解せられる。

このころも、なほ沙門統曇曜が、まだ嚴然たる存在であつたらしいことは、つぎの資料で察せられる。それは『廣弘明集』(p. 272) 卷二四にあげた高祖孝文帝の詔で、題して「帝 僧顯をもつて沙門都統となす詔」といふ。それは沙門統曇曜の死後、思遠寺主法師僧顯を沙門統とし、皇舅寺法師僧義を都維那とするの詔である。文中に「ちかごろ曜統(すなはち曇曜沙門統)が獨濟で」、副次の官たる都維那をおかなかつたと述べてゐる。さうしてみると、いまなほ七十歳前後の曇曜がかくしゃくとして、次官をもおかず、大いに「獨濟」ぶりを發揮して造寺、造像、譯經に活動してみたさまが彷彿とするではないか。曇曜が健在であり、雲岡の造營が活潑であるならば、これに曇曜が參與してゐないとはかんがへられない。こゝでも、かれの「獨濟」ぶりをみせてゐたことゝおもふ。方山の思遠寺は、太和元年に詔があり、三年にいちおう完成をみたものらしい。この寺の寺主が曇曜の後任となるためには、この寺が存在してゐなければならず、自然それはすくなくとも太和三年(A.D. 479)以後でなくてはならない。したがって曇曜の死も、けつして太和三年をさかのぼらぬことになる。

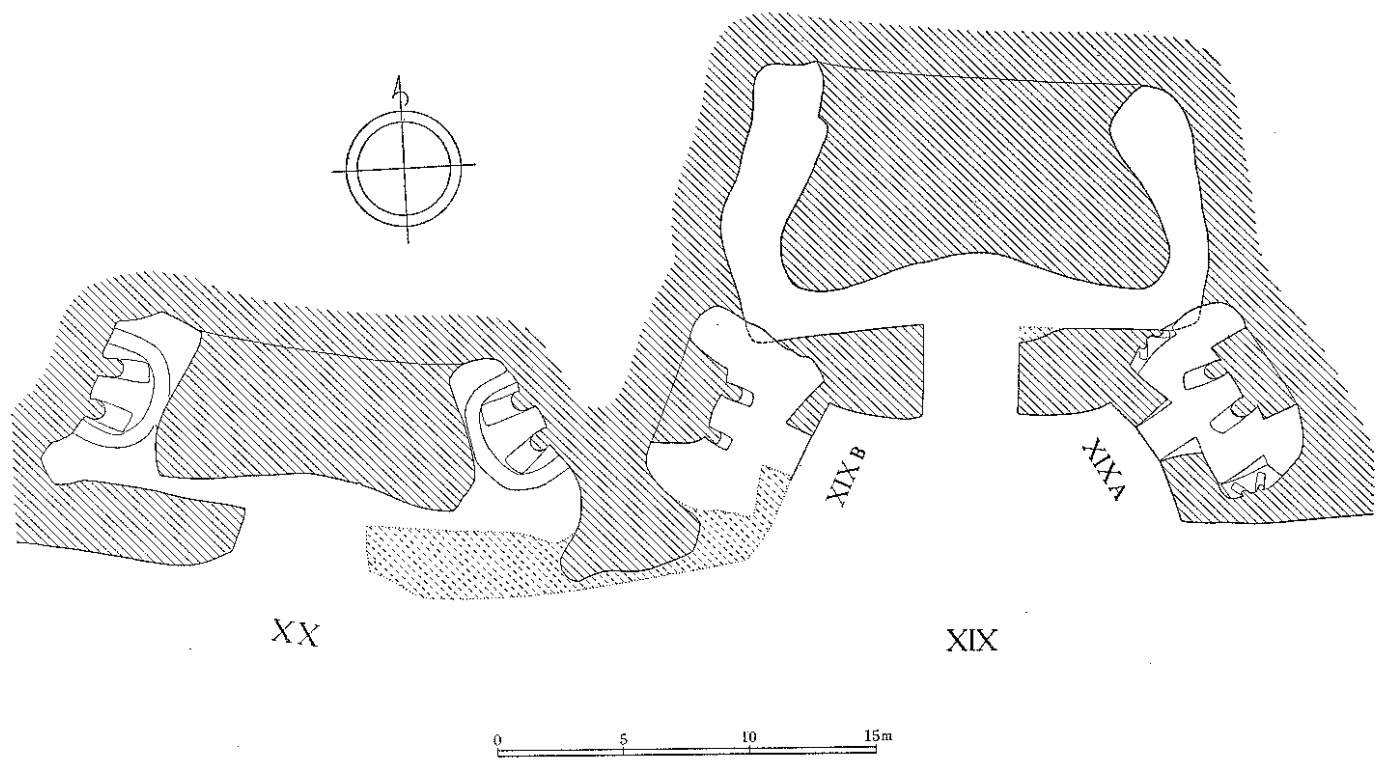
しからば、太和三年(A.D. 479)以後の、いつであるかといふことになる、まったくなんの手がかりもない。

たゞこゝに、その年を暗示するひとつの事件がある。それは梁の永明四年(A.D. 486)二月における劉孝標の南京への亡命である¹⁾。梁の永明四年は北魏の太和十年である。劉孝標は、もともと南朝に有力な同族があるといふので、とくに警戒されて平齊郡にうつされたほどであるから、南朝への亡命は唐突ではない。かれは、もと山東の降將袁州刺史劉休賓の從弟で、孤貧で母と兄とともに平齊戸に編入されたが、よるべもなく貧窮して出家し、のちまもなく還俗したといはれてゐる。だから、承明元年(A.D. 476)、平齊戸から僧祇戸へのきりかへのころ、沙門統曇曜にみいだされ庇護され、譯業に参加するやうになったものとおもはれる。かれは太和十年の南京亡命が二十五歳であつたから、曇曜の譯場参加はどうしても太和の初年をさかのぼりえない²⁾。といふより、むしろ亡命の直前數年がもっともふさはしいといへよう。してみると、曇曜も太和三年以後かなりながく生存し、太和十年ちかくまでゐたとみる方がふさはしいではないか。『魏書』卷四三における、かれの附傳には、かれの出奔を孝文帝の名族の選からもれたからだといつてゐる。けれども、それだけでなく、かれの参加した譯場の主であり、またなにかと生活の庇護者であつた曇曜の死が、かれの出奔を決定的にしたのではなからうか。さうすれば、曇曜は太和七年(A.D. 483)の第五、第

1 『文選』卷四三、劉孝標重答秣陵詔書の注。

2 『開元釋教錄』(p. 539, 540)は、劉孝標の譯場参加を延興二年(A.D. 472)としてゐるが、このときかれは十一歳である。したがって、『雜寶藏經』以下五部の譯出をこの一年にかけず、これより太和の初年(A.D. 477)にわたる、十年間ぐらゐの譯出とした方がよいとおもふ。

六洞の落成もみ、太和十年(A.D. 486)にちかいころまで健在であつたとみられる。かれの北魏治下における年数は約四十七年、涼州にゐた年を加算すると、かれの齢はどうみても七十才以上で、あるひは八十才以上の長命をたもったのではないかとおもはれる。いづれにしても、太和十年以後の生存をかんがへることは無理である。



第一圖 第十九洞 第二十洞 平面圖 1 : 300

Fig. 1. Plan of Caves XIX and XX.

第十九洞

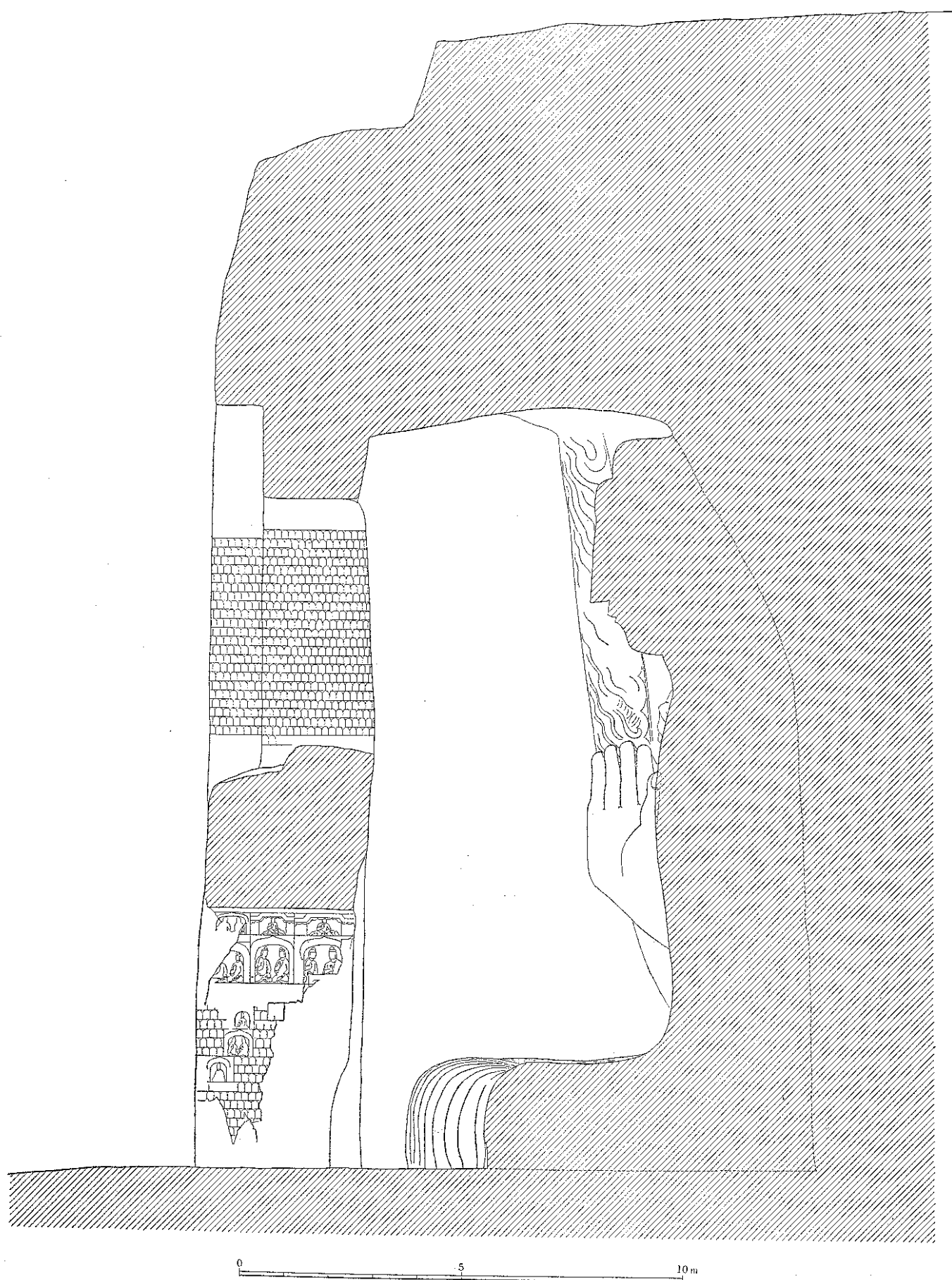
第一章 第十九洞

1. 外 壁

〔外壁〕 曇曜五窟中最大の第十九洞は、その群中、西から二つ目にある。となりの第十八洞、第二十洞よりすこしおくまってるので、左右の脇洞はなゝめにむいてゐる (Fig. 1, Plan I)。したがって、その前庭が梯形をなす點で、他の諸石窟とちがひ、外觀は實に莊嚴な印象をあたへる。明窓のうへたかく合掌形に溝がはしり、東西脇洞 A, B のうへにおよんでゐる。ちやうど、その合掌の頂上に方孔があるが、それは、かつて棟木をさしこんだ孔かとおもはれる。したがって、この洞前に、かつて木造建築のそびえてゐたことが明瞭である。ちやうど明窓のうへに、また水平の溝が東西にはしつてゐる。これも、もちろん木造建築のためのものである。ちどりにくんだ千佛小龕が外壁の各所にのこつてゐる。明窓も門口もアアチ形であり、前者は後者よりはるかに大きい。明窓のまはりは框のやうになって一段とひっこんでゐて、こゝにも千佛の小龕がある。これら千佛龕はもとより雲岡後期の様式である。岩壁の上端にはたかい石づみがあつて、雨水の流下をふせいでゐる。(Pl. 1)

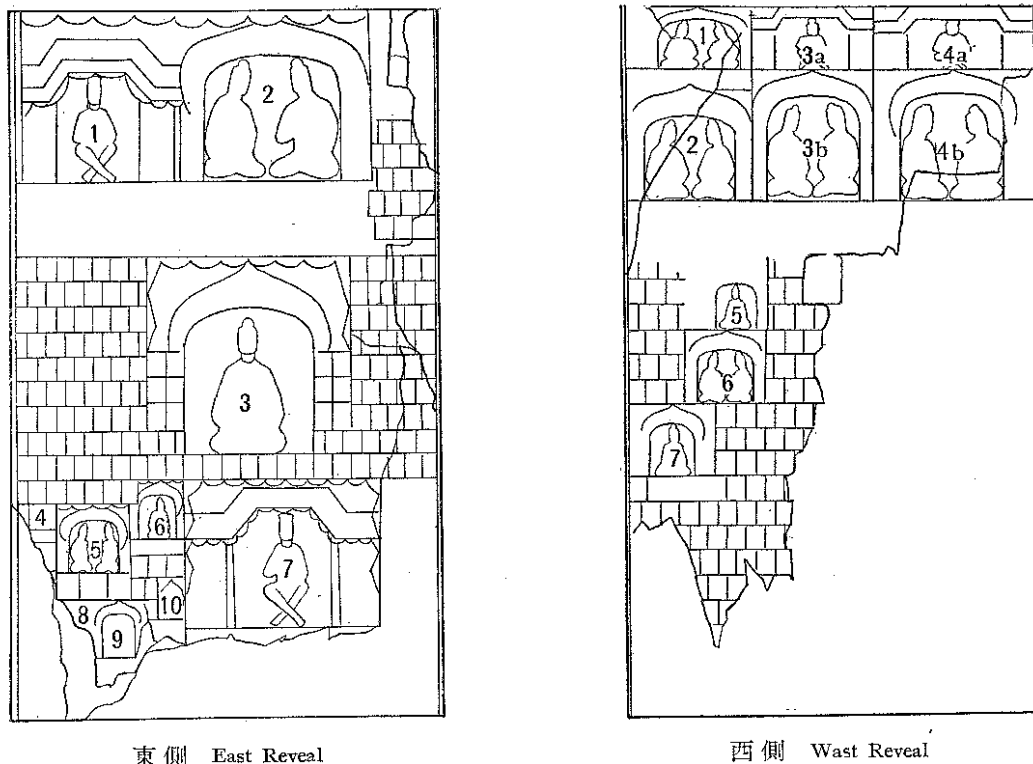
〔門口〕 門口左右には佛龕が不規則に彫られてゐる (Fig. 3)。東側は三層になってゐる。上層の二佛龕 (1, 2) は初期の様式である。佛龕 (1) は楣拱龕で、交脚菩薩の三尊、佛龕 (2) は尖拱龕で、二佛の並坐をおさめてゐる。中層の中央にある佛龕 (3) は千佛小龕を左右にひかへた坐佛龕である。これらはすべて雲岡後期の式である。下層うちがはの佛龕 (4) は坐佛をもつた尖拱龕、佛龕 (5) は二佛の並坐をおさめた尖拱龕、さうして佛龕 (6, 8, 9, 10) はみな佛の坐像をもつ。たゞ、そとがはの佛龕 (7) はやゝ大きく、交脚菩薩を本尊としてゐる。この三層は、それぞれ、あひついだ三つの時期につくられたものらしい。そとがはは、うへからしたまで破損し、うちがはは、うへとしたとがこはれてゐる。

もっと破損のひどいのは西側である。上層は六龕 (1—4) が規則たゞしく二段に配置されてゐる。上層の二佛龕 (3a, 4a) は交脚菩薩をもつた楣拱龕で、下層の二佛並坐をおさめた尖拱龕 (3b, 4b) と、それぞれ一對になってゐる。そとの佛龕 (1, 2) も二佛並坐の尖拱龕である。この六龕はみな雲岡初期の様式に屬してゐる。このしたに彫刻のない空地があり、さらに中層、下層になるが、こゝにはきまつた配置はない。三佛龕 (5—7) は不規則に上下になり、まはりに千佛小龕がある。どれも



第二圖 第十九洞 縱斷面圖 Fig. 2. Vertical Section of Cave XIX.

1 : 120



第三圖 第十九洞門口佛龕配置圖 Fig. 3. Distribution of Niches on Reveals of Gateway, Cave XIX.

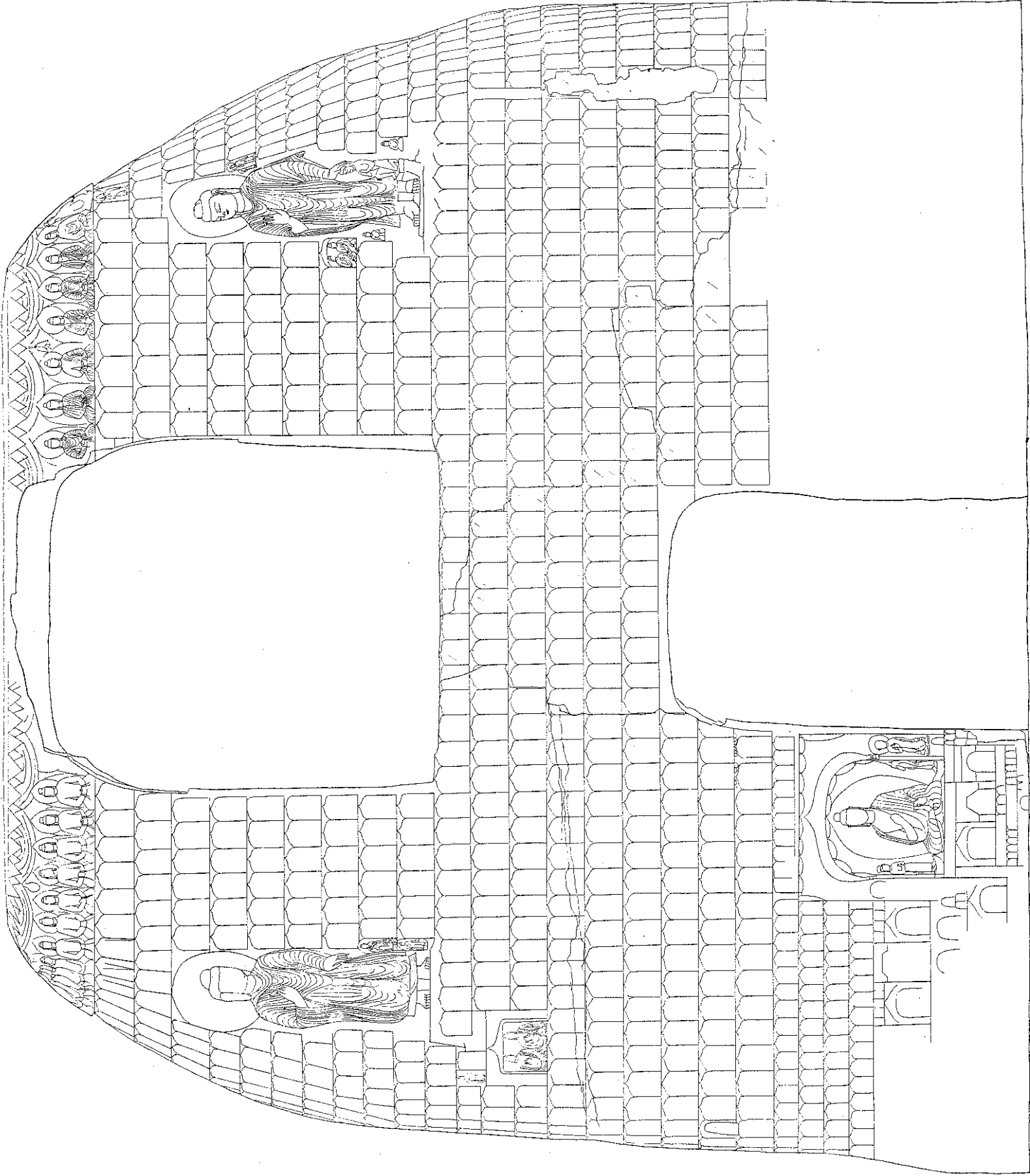
尖拱龕である。上龕(5)と下龕(7)はどちらも坐佛であり、中龕(6)は二佛並坐をおさめてゐる。すべて中國式服裝で、みな後期の式である。一般に門口の上層は初期の式で、中下層は後期の式である。うへからしたへ彫られていったことは明白である。天井にはなにも彫れてゐない。(Pl. 2-7)

〔明窓〕 明窓の兩側は千佛小龕でうめられる。上下二十三、四段、左右十六龕、整然とちどりにくんでゐる。そとがはと上部は、かなりいたんでゐる。明窓のそとまはりには框のやうに一段とひくいほりこみがあり、こゝにも千佛小龕がみとめられる。これらは外壁千佛小龕とともに、後期の式である。天井はいたんでゐるが、最初からなにも彫られてゐなかつたらしい。(Pl. 8-10)

2. 南壁と東西壁

〔石窟構造〕 石窟の平面はほぼ橢圓形であるが、南がははやゝ直線にちかい (Plan II)。各壁はうへほどまへにのめり、半ドーム状になるが、天井になるとかへって平らである (Plan III)。したの方では南壁の兩端はやゝあきらかであるが、うへの方になるとはつきりしない。ことに、北壁と東西壁は完全に一體になり、そのまへに大きな本尊佛がすわり、各壁にせまつてゐる (Fig. 2)。めづらしいことには左右の脇侍佛がない。たゞ南壁左右の隅に立つた佛像があり、これが東壁、あるひは西壁とのさかひになつてゐる。(Pl. 11)

〔南壁〕 千佛龕が南壁をうめ、さらに東西壁におよんでゐる (Fig. 4)。千佛龕は、三十層ぐらゐあるとおもふが、下部はひどい破損である。明窓の左右、それぞれ六列までは基盤目に配列され、



その他はちどりにくまれてゐる。明窓と門口のあひだ、および門口の西わきに大きな破損があるが、こゝにも千佛龕があつたわけである。天井に接するところには、つねのごとく三角垂飾があり、弧状の帷幕があり、坐佛の列像がある。さうして、それは西壁へも、東壁へもつゞいてゐるのである。これらの坐佛は千佛よりはいくらか大きい。

東の隅にたつた佛像は、千佛龕のたかさでいふと六段分ある。面貌は風化してゐるが、脚をひらいて、よく均衡のとれた、威厳のある像である。僧衣は兩肩をおほひ、身體に密着してゐる。右手は胸にあげ、左手はたれて衣端をにぎつてゐる。臺座ははっきりしないが、かんたんな半圓板のやうにみえる。この反對の西隅にある佛像はもっと保存がよい (Fig. 5)。右手は東隅の佛像のごとく胸にあげるが、左手はさげて、かたはらの童子の頭上においてゐる。曇曜譯の『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p. 497) にある佛傳で、釋迦牟尼佛が、その實子ラフラ(羅睺羅)に初對面の光景とみとめられる。おなじはなしは『佛本行集經』にも、『普曜經』にもあり、小異がある。そのすばらしいできばえと、保存のよさによって、この像は雲岡彫刻中の優品とみとめられる。とくに、中インドのグプタ様式をつよく反映してゐる點でもめづらしい。

門口の東がはに三尊坐佛をおさめた尖拱龕がある。この坐佛は、顔がほそく、なで肩で、中國式の服裝をつけてゐる。その左がはにうつくしい彫像の僧がたつてゐる。これらは、もとより後期の様式である。この佛龕のしたにも、いくたの小佛龕があり、いずれも後期の作である。(Pl. 12-37)

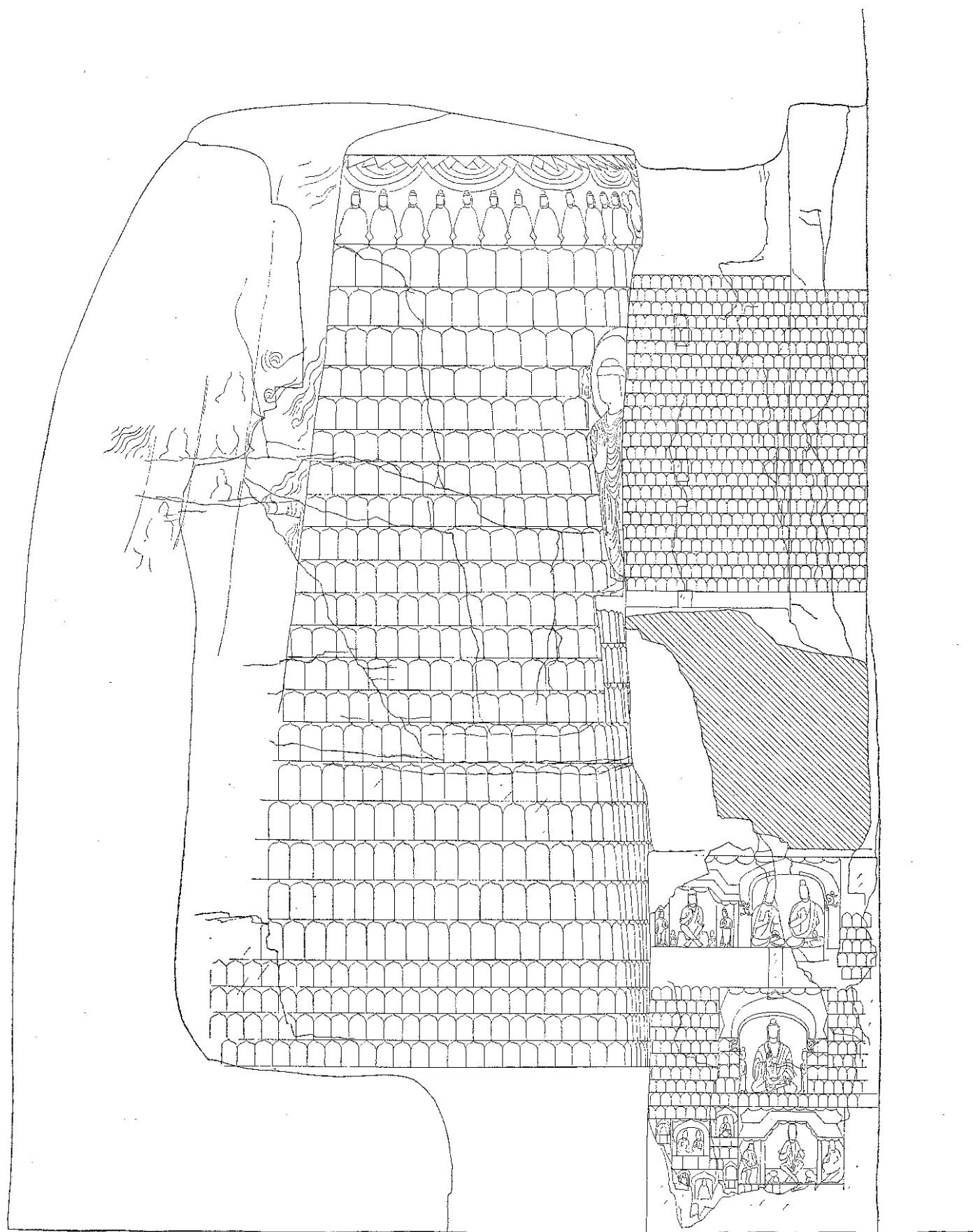
〔東西壁〕 南壁の千佛龕は東壁、西壁にまでつゞいて、すっかりそれをみたし、すこしなゝめにのぼる本尊の大光背に接してゐる (Fig. 6, 7)。東壁佛龕の數は二十四段であるが、したの方はすっかりいたんでゐてみきはめがたい。天井に接した三角垂飾、弧状の帷幕はほとんできえ、わづかにそのしたの坐佛列像が、すこしのこつてゐるだけである。

これにくらべると、西壁ははるかによく保存されてゐる。だゞ中層に岩質のわるい層がはしつてゐるため、それをおぎなふのに良質の石材を嵌入し、それに彫刻をほどこしてゐる。しかし、この補強の彫刻は、まぎれもなく初期の様式である。さらにくだつて腰壁には、三つの塔形を浮彫にしてゐる。いずれも方臺のうへにたち、三本の刹柱をもち、各層には小佛龕をならべてゐる。たゞ、これに應ずる東壁の塔形があつたかどうかはわからない。どうも、なかつたらしくおもはれる。塔形のあひだには、なほ千佛龕があるが、うへの佛龕よりは小さい。(Pl. 40-48)

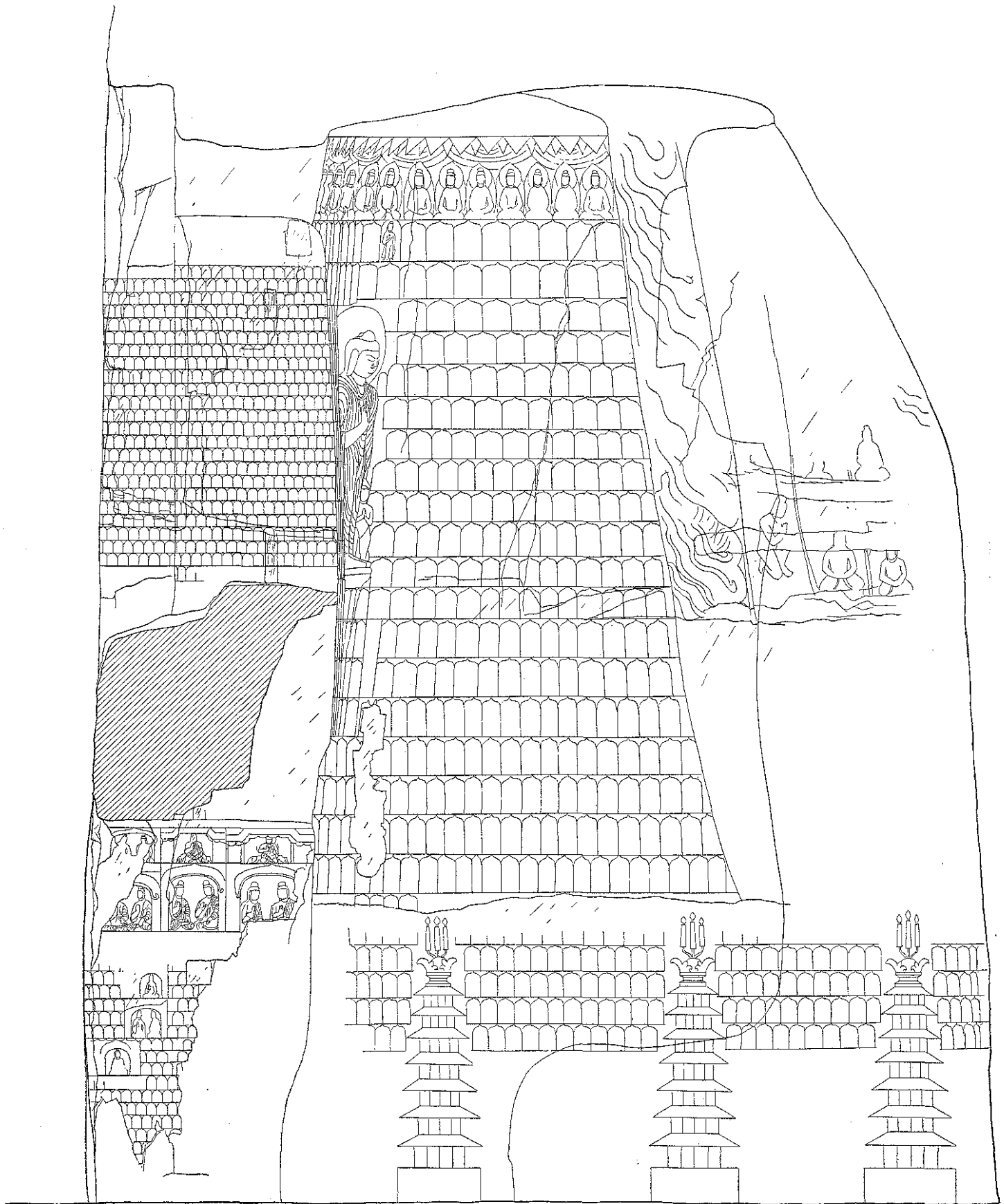


第五圖 第十九洞
南壁 西部 上層
釋迦 ラフ ラ 像

Fig. 5. Cave XIX, South Wall,
Śākyamuni Buddha and Rāhula.



第六圖 第十九洞 東壁 測圖 Fig. 6. East Wall of Caves XIX. 1 : 80



第七圖 第十九洞 西壁 測圖 Fig. 7. West Wall of Cave XIX. 1 : 80



3. 北壁と天井

〔北壁〕 本尊坐佛は北壁の全面 (Fig. 8) を占めてゐる。像があまりに大きいので、周壁との間隔はいたってせまい。ともかく、この像は雲岡最大の、もっとも力づよい表現をもった像である。總高約 16.48m。右手は胸にあげてゐるが、手さきは破損して、泥の補修である。左手は膝におき、掌のうへに衣端をよこたへてゐる。まるい顔は頤をうしなつてゐるが、實にまるまるとしあげられてゐる。さうして、その壯重と威嚴とは、おかすべからざる偉力となつて、せまってくる。うすい着衣は左肩をおほひ、それからそのはして右肩をおほふてゐる。左肩からさがる衣のゑりは、なゝめに右わきにさがるが、これにそうて內衣のはしが胸のうへをはしり、ふちにはうつくしい唐草文帶がつくられてゐる。ひだは力づよく表現され、平行線になつて、ひろくはった膝のうへをおほふ。一般によく保存されてゐるが、左の股を壓する右足のさきは、いくらか風化してゐる。この偉大な大像によつてうけるふかい宗教的感銘は雲岡第一であり、また中國の石窟中第一であるといつてよい。着衣のうへに散在する小さい孔は、後代の修復をしめすものである。

本尊の大光背は東壁におよび、西壁におよび、さうして天井のなかにまでくひこんでゐる。ひどくいたんでゐるけれども、火焰の外縁、跪坐供養天の内帶、坐佛の内帶、さらにもういちど跪坐供養天の内帶がみとめられる。これらの帶圈は、その配列において、第二十洞のそれとちがふのみならず、その各像の大きさにおいてもちがひ、この方がやゝ大きい。つぎに頭光の火焰があらはされる。火焰帶は内外とも第二十洞のそれによく似てゐる。そとの火焰はかなり複雑で、傳統的な流雲文のいきほひをしめし、うちの火焰は流暢で、なめらかな曲線をゑがいてゐる。第二十洞のとのちがひは跪坐供養像が坐佛像より大きい點である。風化によつて頭光はすっかりこはれてゐるが、中心に蓮華文のあつたことはあきらかである。光背西部の上方に坐佛の痕迹がみえるのが注意される。(Pl. 49-62)

〔天井〕 上述のごとく、北、東西の三壁はうへにゆくほどせまくなり、半ドーム状になつて天井となる。が、天井自身はほとんど扁平である。天井の平面はほゞ橢圓形で、南がはは直線にちかい。大光背は天井の中心までのびてゐるが、その先端は破損し、またその他の彫刻もすっかりいたんでゐるのはおしいことである。(Pl. 63, Plan IV)

第二章 第十九A洞 第十九B洞

1. 第十九A洞

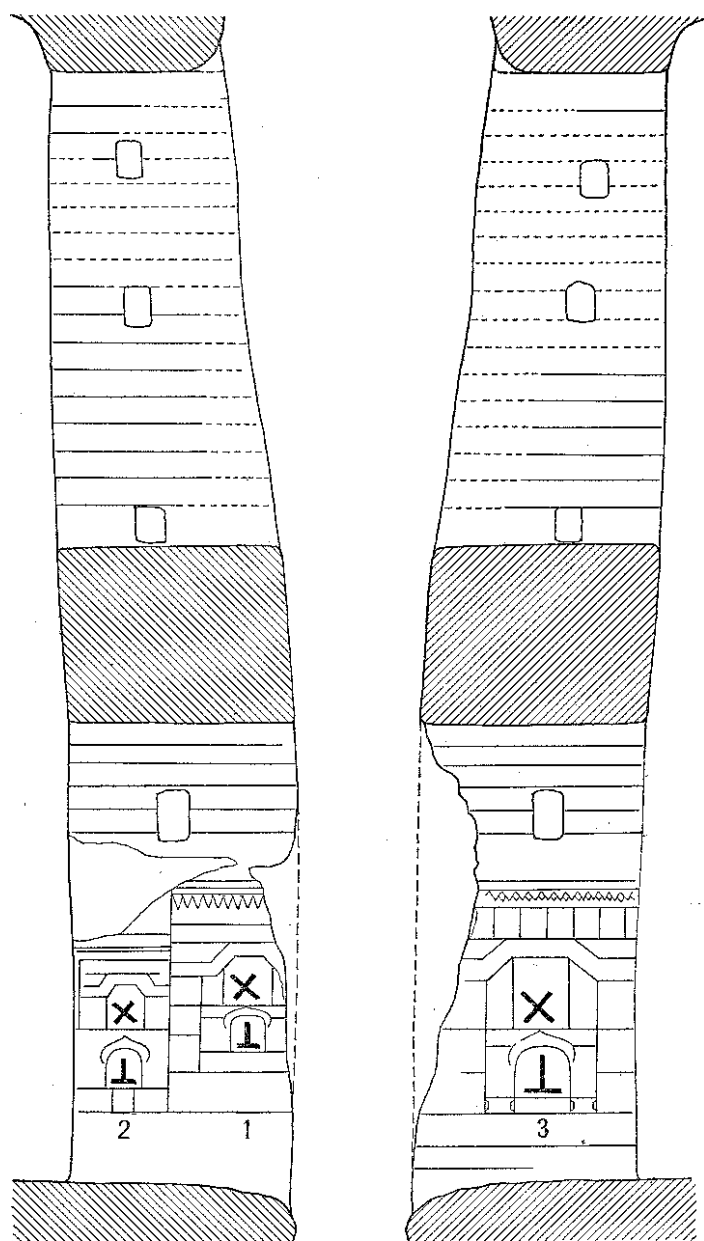
〔外壁〕 第十九A洞は第十九洞の東脇洞である。第十九B洞と相對して、第十九洞の左右にあり、なにもうちに口をひらいてゐる。だから、この外壁はほぼ西南にむかつてゐるわけである。第十八洞に對し、第十九洞はうしろにひいてゐるが、A洞は、その中間の岩塊にある。さうして、すこし第十八洞にくひこむやうに接近してゐる(Plan 1)。いま、第十八洞のがはに大崩落があり、大きな穴があき、左脇侍がすこしみえてゐる。外壁に一面千佛小龕のあつたことはいふまでもない。しかし、いまは大部分がうしなはれて、明窓のまはりと、門口の右がはにすこしのこつてゐる程度である。

注意すべきことは、第十九洞の床面より 4.60m たかいことである。(Pl. 64)

〔門口と明窓〕 門口も明窓もアチ形である。明窓の方が門口より大きなこと、第十九洞におなじである。明窓の方は、まはりにそうて一段とほりこみがあること、第十六洞、第十七洞におなじである。さうして、この部分にも一律に千佛小龕をほつてゐるのである。側壁も、もとより千佛小龕の連続で、ちどりづみになつてゐる。この部分は比較的保存がよく、みな簡略な通肩式であることはわかるが、間々右肩から右腕を大きくつゝんだ式もまじつてゐる。天井は、あきらかなにも彫らなかつたらしい。また、左右の側壁に、それぞれ上下一直線に數個の方孔がうがつてゐる。これは中古に明障子をはめたためのものである。(Pl. 68)

門口の側壁には、複雑な佛龕が一二彫つてあるほか、やはり同様な千佛小龕がうめてある(Fig 9)。天井には、なにも彫つてゐない。その複雑な佛龕といふのは、右側に一つ(3)、左側に二つ(1, 2)あつて、ほぼその構成を一にし、様式も相ちかい。基本は、うへに交脚菩薩の楣拱龕、したに坐佛の尖拱龕をかさねたもので、雲岡におけるもっとも普遍的な形式であるが、こゝはそれだけでなく、うへに天蓋かざりと七佛列龕、したに供養者列像のある寶壇をくはへ、さらに左右に區劃をまうけて倚像、坐像、立像の三種の佛をおさめてゐる。倚像、坐像の佛については、なんの佛か知りたいが、立像の佛は一方がアショカ王Asokaの因縁、他方が定光佛Dipamkara Buddhaの儒童因縁像であるらしい。しかも、これがみな後期の纖細な様式である點が特色で、B洞門口左側の佛龕(1) (Pl. 107)、第十八洞門口左側の佛龕(4) (本書、第十二卷, Pl. 77)と完全に一致する。また第十四洞西壁底部の諸龕(第十一卷, Pl. 6)、第十六洞南壁底部の諸龕(64, 65) (第十一卷, Pl. 62)のごときは、この變種であり、第十七洞門口左側の佛龕(7) (第十二卷, Pl. 7)のごときは、より大規模なものである。(Pl. 65-67)

〔洞内〕 洞内にはいと、ひじやうにせまい。不規則の扁橢圓形のなかに、倚坐の大佛が大き



左側 Left Reveal

右側 Right Reveal

第九圖 第十九洞 門口 佛龕配置圖

Fig. 9. Distribution of Niches on Reveals of Entrance Gateway, Cave XIXA.

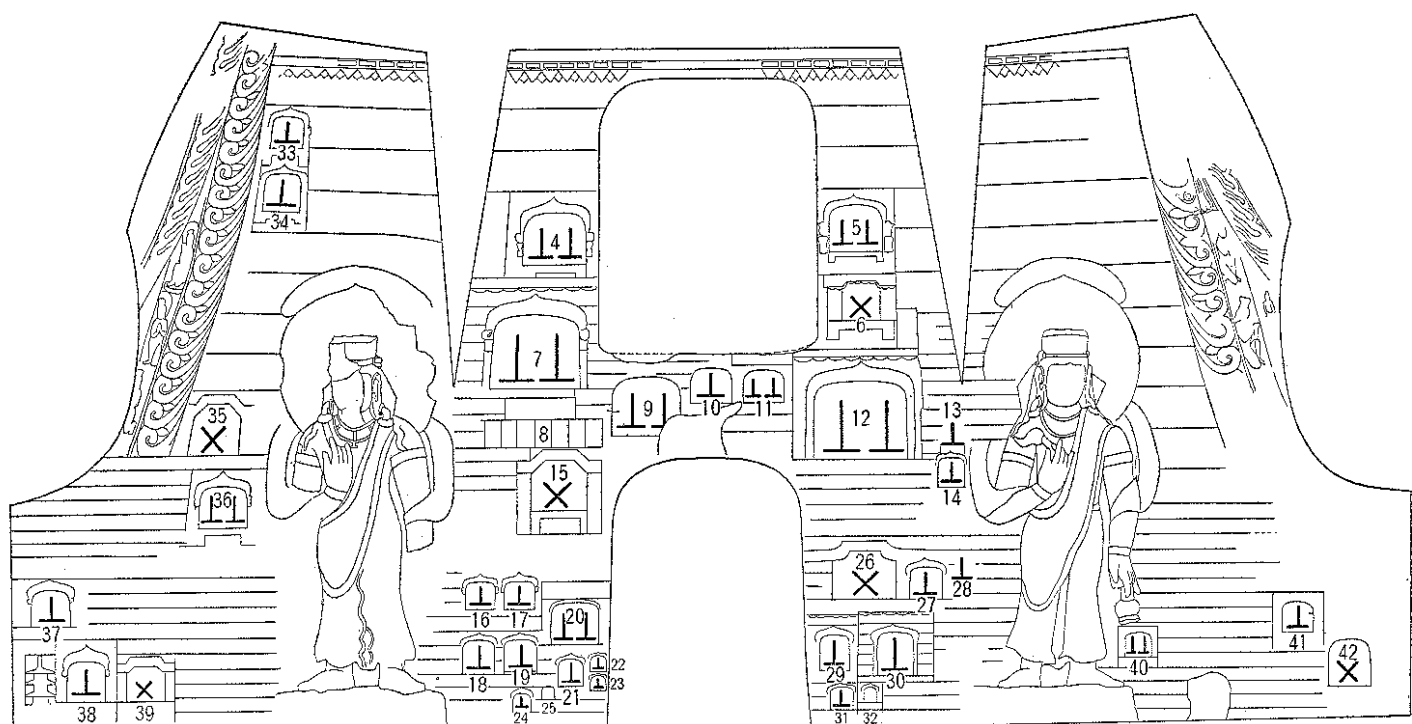
諸佛龕は、佛像の表現がたくましいうへに、寶壇はきまって四脚の牀座式である。最下に第六洞式になった小龕が二つ(24, 32)ほられてゐるが、これらはもちろん最後にできたものである。ところが、これら諸佛龕のあひだをうめた千佛小龕は、この最後の小龕よりもあとにつくられたらしい。(Pl. 69-82)

〔左壁〕 左壁と後壁のさかひはない。自然に彎曲して移行してゐるので、便宜的に本尊の光背をもって後壁とのさかひとする(Fig. 10)。こゝも最上層は三角垂飾と帷幕で、つぎに坐佛の列像がなんだんにもならぶ。そのしたに大きな脇侍菩薩がたつてゐる。台座は未完成で、たゞ岩塊がほりのこされてゐるばかりであるが、その他は完成してゐる。右手を胸にあげ、左をたれたすがた

く座を占めてゐるのである。それに未完成といふのか、本尊の足のまはりにはふかい溝(Pl. 70)が彫つてあるだけで、蓮瓣の座はつくつてゐない。左右壁の脇侍菩薩の立像は、わりにあさい彫りである。蓮座をつくらうとして、ほりのこした岩塊(Pl. 84, 93)はみとめられるが、これもできあがつてゐない。未完成といふべきであらう。

〔前壁〕 前壁の大部分は不規則に佛龕でおほはれてゐる。石窟自體の造作としては、天井に接した三角垂飾と弧狀にしぼった帷幕、それにつゞくなん層かの坐佛列像だけである。垂飾と帷幕は雄大であり、坐佛も素樸であるが、たくましい表現である。(Fig. 10)

佛龕は、まったく不規則であるが、最上の二佛並坐龕(4, 5)は左右相應してゐるし、中部の二佛並坐龕(7, 12)と交脚菩薩龕(15, 26)も、位置こそ多少づれてゐるが、相對應してゐるやうにみえる。これらは、いづれも本尊におとらぬたくましい表現で、第一次の追刻であることはいふまでもない。これにやゝおくれて門口上部の諸龕、底部の諸龕がひらかれていったとおもはれるが、その間に大した時間的へだまりはない。たゞ、どういうわけか、門口上部、また左右に未完成の佛龕のあるのが注意される。こゝにある



第十圖 第十九A洞 前壁および左右壁 佛龕配置圖

Fig. 10. Distribution of Niches on Front, Right and Left Walls, Cave XIXA.

であるが、左の手さきは未完成であり、顔面は剝落してゐる (Fig. 11)。しかし、本尊にふさはしい、たくましい體格で、肩はゞは大きく、手足もふとい。身體全體は、わりあひに扁平で、ゆるやかなひだをもった大衣が、これをつゝんでゐる。天衣は大きく肩をめぐり、光背と、そのおほひには彫文がない。たゞ後世の彩畫とおもはれる靈芝雲と火焰とが、黒々とゑがゝれてゐる。それはあきらかに遼ごろのものと推定される。(Plan V)

右わきに一二の追刻佛龕 (35, 36) があり、さらに後壁本尊光背の下部にかけて、二三の佛龕 (37-39) があり、その他はみな千佛小龕でうめられる。そのうち右わきの二龕は、だいたい前壁の諸龕につぐものであるが、うへの交脚菩薩龕 (35) は未完成である。後壁下部の三龕 (37-39) は、もうひとつ時代のさがったもの、それでも門口左右の諸龕よりはふるいものであらう。(Pl. 83-91)

〔右壁〕 右壁も、左壁におなじであるが、全面の風化はこの方がはなはだしい。とくに上部の千佛列像がさうである。しかし、脇侍の菩薩像は、ほゞ完存してゐるのがうれしい。頭部はひじょうにふかい彫りである。目鼻だちが鮮鋭につくられ、寶冠もうつくしい。寶冠の正面には禪定の坐佛と新月形とがある。右手は胸にあげて拂子をもち、左手はたれて水瓶をもつてゐる。衣はゆるやかなカァヴのひだをたれ、すそは波状になみうってゐる。足は大きくひらき、足下には未成の座がある。天衣が大きく肩にまはり、大きな頭光と圓拱形のおほひをもつことは、左脇侍像におなじである。頭光と、そのおほひの彩文も、すこしのこつてゐる。(Plan V)

脇侍の左手から後壁下部にかけて、二三の佛龕があるが、その他は千佛小龕をもつてうめてゐる。

る (Fig. 10)。そのうちおくの二龕 (41, 42) は左壁底部の諸龕 (37-39) におなじであるが、脇侍のしたの一龕 (40) は門口左右の佛龕にひとしく、あたらしい。しかし、こゝでも千佛小龕は、それよりものちにつくられてゐる。

この壁には、二三の穴があいてゐて、第十九洞本洞に通じてゐる。いかに洞窟間の壁がうすいかといふ一例になるであらう。
(Pl. 92-99)

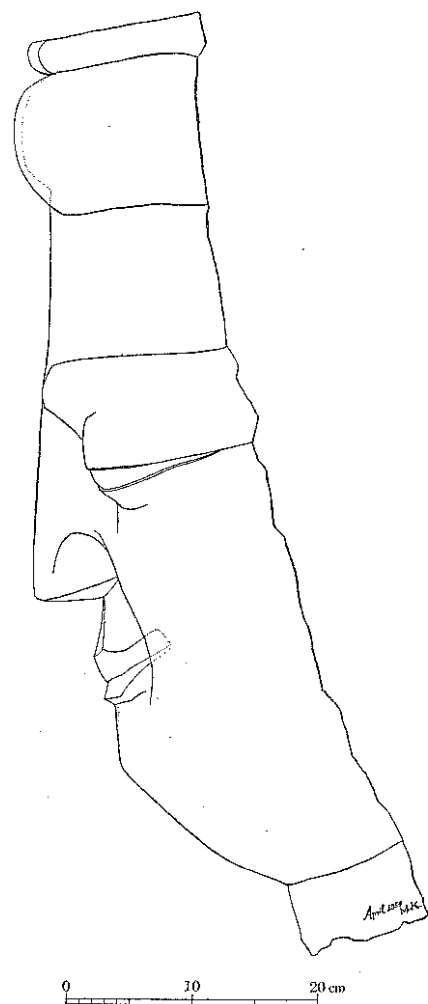
〔後壁〕 後壁は、たゞ本尊の光背が全面をおほふてゐる。したがって、光背のカヴァが石窟のカヴァになってゐる。かなりいたんでゐるけれども、大きな唐草縁 (Pl. 83, 87) の舉身光、火焰縁の頭光がみごとである。外縁につぐ内區は、どちらも合掌跪坐の供養者帯になり、禪定坐佛帯になる。それに頭のまはり蓮華文である。

本尊の佛は倚坐して石窟内部を大きく占據してゐる。倚子は方形で、籐製らしい意匠がみられる。顔はまるく、耳がながい。眉、鼻はすどく、唇もうつくしい。目はながく、そこに中古にはめられた玉眼のあとがある。肩はゞもしっかりし、階段状のひだが密接してからだをおほふてゐる。胸にちよつとみえてゐる內衣のゑりは、唐草文帯のかざりがあること、第十八、第十九洞の本尊におなじである。右手はうへにあげ、左手は衣端をにぎって膝においてゐる。その手が力づよく、また足もたくましい。一直線になった二重のすそも特色がある。(Pl. 100-102, Plan V)

〔天井〕 天井は橢圓形といふほかないが、前方はほゞ一直線になってゐる。後壁から大きく光背がのびて、その先端はほゞ天井の中心に達してゐる。さうして、その大部分は剝落してゐるが、その尖頂にあるとおもはれる童子形の顔だけは、かなりよくのこつてゐる。その他、つまり前方部には飛天がほられてゐる。いまのこつてゐるものは、左半のみであるが、ほゞ三體の飛天がみえる。いずれも、たくましい體軀を弓狀にまげて、中央にむかつてとんでゐる。下裳、天衣のひだは、たゞの刻線であらはしてゐる。(Pl. 103, 104, Plan V)

2. 第十九B洞

〔外壁と内部〕 外壁は大きく崩落して、右壁と前壁の右半は、まったくない。たゞ右壁底部が



第十一圖

第十九A洞 左脇侍菩薩
頭部 側面 實測圖

Fig. 11. Cave XIXA, Left Attendant
Bodhisattva, Head, Profile.

すこしのこつてゐるが、岩質はいたってわるい。本洞の床より一段とたかく、東南にむかつて口をひらいてゐること、第十九A洞に相應じてゐる。

内部はせまく、倚坐の本尊が大きく占據してゐる。平面形は圓形にちかいが、前壁だけはやゝ一直線である。(Pl. 105, Plan I)

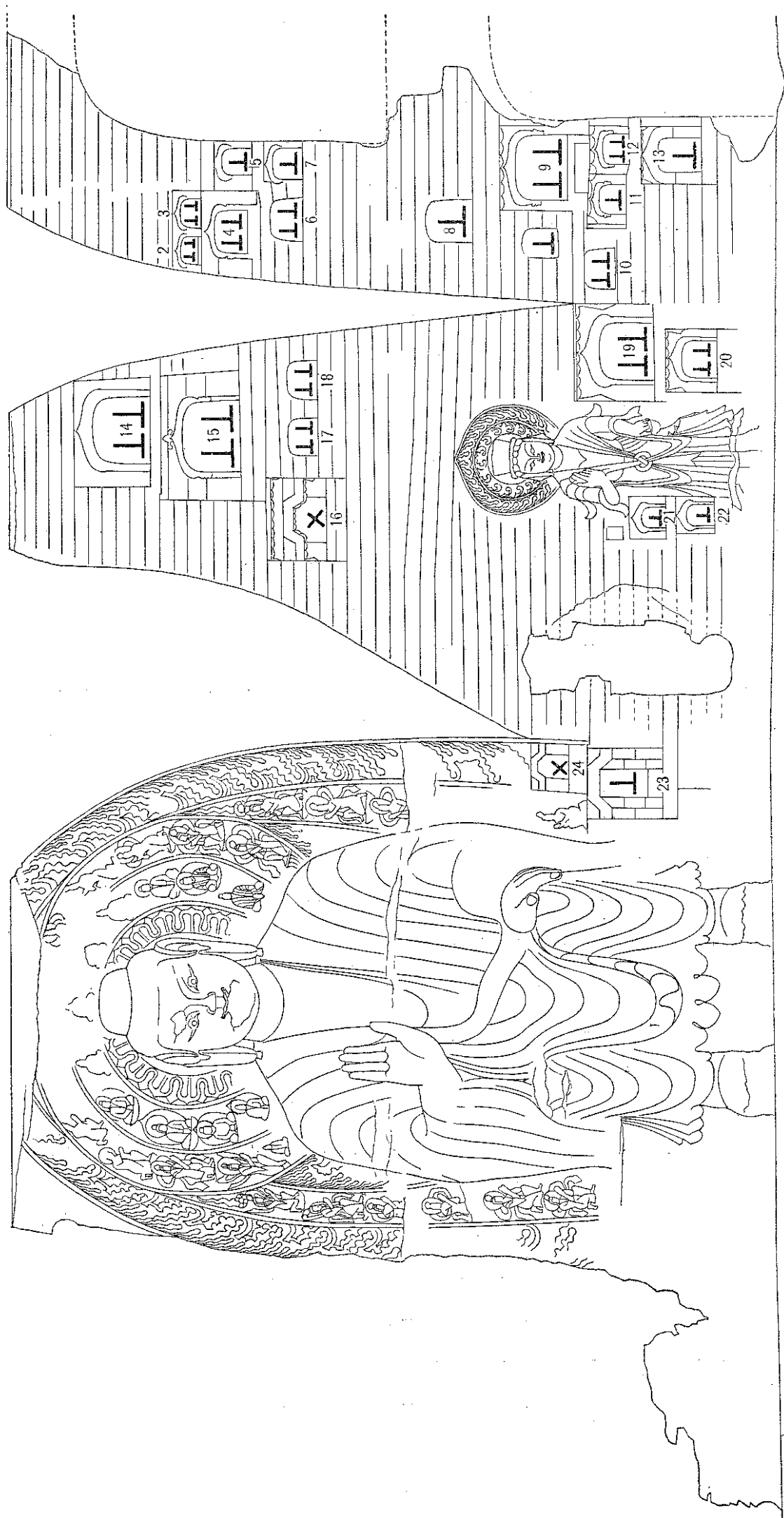
〔明窓と門口〕 明窓も門口も、左がはしかのこつてゐない。明窓は、あきらかにアァチ形(Pl. 108)である。門口の方も、たぶんアァチ形であつたとおもふ。門口には、東脇A洞門口にあるやうな複雑な佛龕(1)がひとつある。その上下、また明窓は、すべて千佛小龕の地文様である。明窓には、側壁のほゞ中央に上下にわたって方孔があり、明障子をいれたことがわかる。門口には、うちがはの上方に方孔があつて、これはたぶん門口の扉をつけた楣の孔であるとおもふ。(Pl. 106, 107)

〔前壁〕 前壁は、いま左方だけしかのこつてゐない。わりにたけのたかい壁面を、ぎっしりと千佛小龕の地文様がおほひ、あら彫りのまゝの天井に接してゐる(Fig. 12)。千佛小龕のところどころに、小さい佛龕がある。佛龕のかずは十二だが、わりに小さい。そのうち、上層のもの(2-7)と下層のもの(9-12)がふるく、東脇A洞前壁の下層諸龕(9-19, 26-30)に匹敵する。しかし、その着手がA洞より若干おくれてゐることはうたがひない。しかも、それは上層の諸龕(2-6)を未完成にをはらせてゐるのである。最下の一龕(13)は、上記の諸龕と形式を異にし、やゝ豊満な體軀であるが、第六洞式の衣文である。たゞし、腰帶のたれ紐をみない形式である。しかも、太和十三年龕(本書、第十二卷, Pl. 12)の寶壇に似、四脚式の牀座でない點が、こゝの諸龕、またA洞前壁の諸龕とちがふ。

中層にある未完成龕(8)は體格もきゃしゃで、はるかにおくれたものとおもふ。それにしても、地文になった千佛小龕よりはさきであつた。たてに大きな罅裂がとほり、その左右をよけて彫つてゐることをおもふと、この罅裂の古さがわかるであらう。中層未完成龕(8)のしたに、もうひとつ彫りかけの佛龕がある。(Pl. 108-116)

〔左壁〕 左壁も、ひじやうに丈だかく、まんなかに左の脇侍菩薩がたつてゐる。後壁へは彎曲して自然に移行してゐるので、さかひはなく、かりに本尊の光背によって區別するよりしかたがない。ところどころ小佛龕があるほか、すっかり千佛小龕でうめられてゐる(Fig. 12)。そのうち上部の四龕(14, 15, 17, 18)は、未完成龕をふくむが、みな二佛並坐の龕で、形式はふるい。たぶん、前壁の諸龕に匹敵するものとおもふ。底部の四龕(19-22)は、ほゞ前壁底部の坐佛尖拱龕(13)に似てゐるが、それよりはいくらかおくれてゐるであらう。このうちにも、未完成にをはる佛龕(19)がひとつある。さらに中層にある交脚菩薩の楣拱龕(16)は纖細で、さらにおくれてゐるとおもふ。もっともちかい作は、第十八洞門口東側の佛龕(本書、第十二卷, Pl. 12)である。

なほ、おくの方には大きな穴(Pl. 37)があつて、第十九洞の本洞につらなつてゐる。さらに、そのおく、すでに後壁の部分になるとおもふが、本尊の光背のしたにあたり、二つの佛龕(23, 24)がある。ともに楣拱龕で、うへは交脚菩薩、したはめづらしく坐佛である。坐佛はきゃしゃな體軀に



第十二圖 第十九B洞 後壁左壁および前壁 佛龕配置圖

Fig. 12. Distribution of Niches on Back, Left and Front Walls, Cave XIXB.

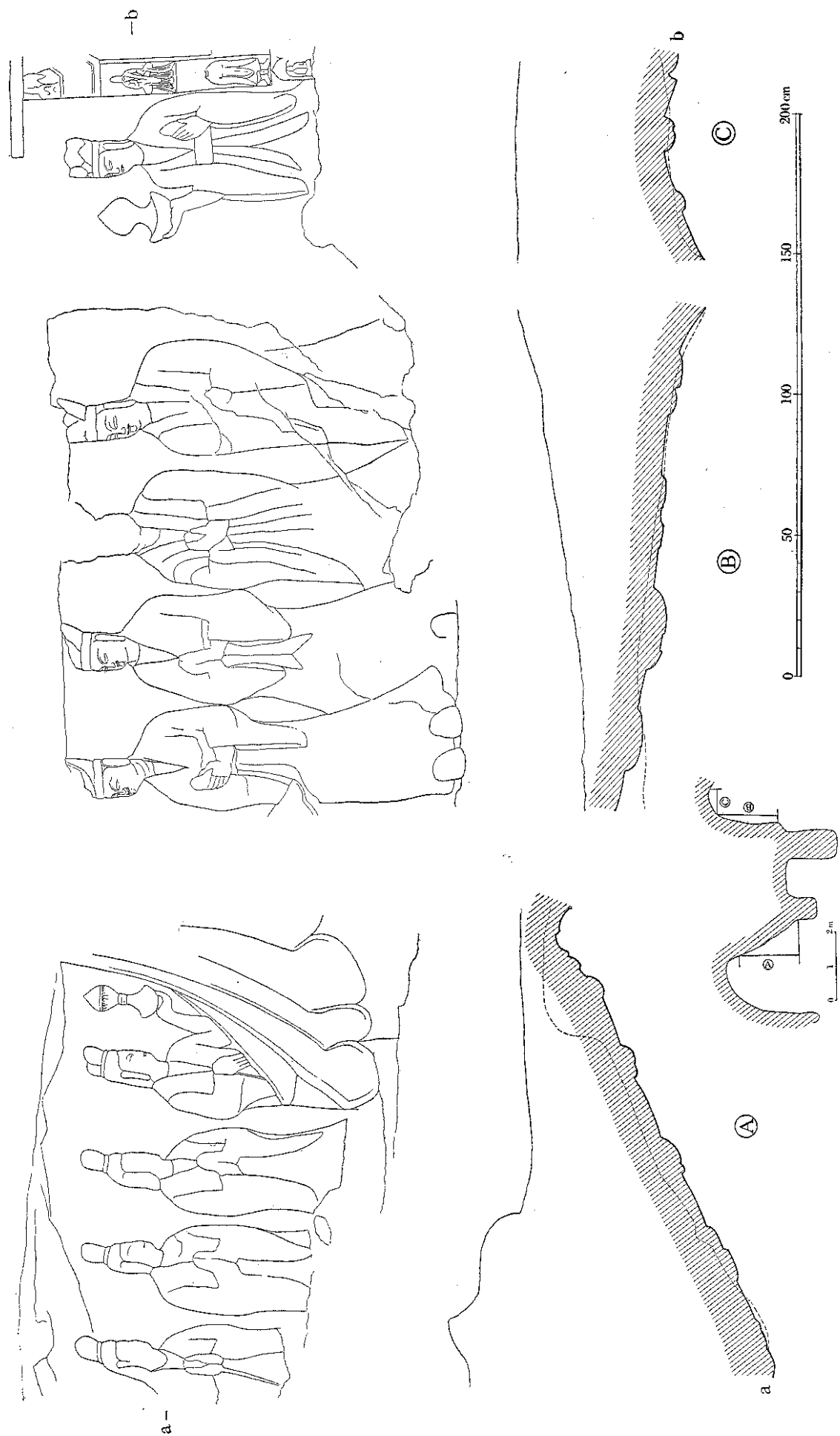
通肩の衣があり、もかけ座のこまかいひだが左右にひるがへつてゐる。また左右に維摩居士とVimalakirti 文殊菩薩の像があり、アショカ王因縁佛と布髮因縁の定光佛とおもはれる二つの佛立像があり、Mañjuśrī Aśoka また騎馬と騎象の像があつて、第五洞外の小窟(本書、第二卷, Pl. 65, 66)によく似てゐる。しかも、これには延昌四年(A.D. 515)の造像記があつて、そのつくられた時代を知るのであるが、要するに、どの佛龕よりもあたらしい形式をもつてゐる。したがつて、ほかの佛龕が、けつして延昌四年(A.D. 515)までくだりえないことを、うらがきしてゐるとおもふ。といふより、その他の佛龕を、この佛龕としさいに比較すると、かなりのちがひがあり、延昌四年(A.D. 515)より、かなり以前にその他の佛龕の完成してゐることが察せられる。この佛龕のしたにある一列の千佛小龕は、この佛龕よりものに彫られたと察せられるが、その形式は、その他の小千佛龕より、はるかにはやいものである。

さういふ壁面の沿革にかゝはらず、まんなかの脇侍菩薩は、本尊佛倚像とおなじころつくられたのであらう、よく似てゐる。肉つきはゆたかであるが、體軀の表現はやゝ扁平である。大きな扁平のひだで、下裳は左右にひるがへり、X字形にまじはる天衣も肩ではねあがつてゐる。全體のつくりが、第六洞方柱上層の脇侍像(本書、第三卷, Pl. 125, 140, 163, 164, 188)によく似てゐる。足もとは破損し、臺座が完成してゐたかどうか知りがたい。寶冠も破損してゐる。寶珠形の光背は二重になり、外縁はゆらゆらとあがる、ほそい火焰よりなり、内區はC字形半パルメットであり、中心部はくづれた蓮華文である。(Pl. 117-126)

〔後壁〕 後壁の本尊は佛の倚坐像である(Fig. 12)。顔はまるく、身體はたくましく、たゞ、全身をおほふ衣裳は、第六洞式のひらたい階段狀のひだで、その間隔はおほまかである。すその衣端は臺座にかゝり、やゝ左右にはねてゐる。足さきは破損し、足の座はつくられなかつたらしい。右手は胸にあげ、掌をしめし、左手はふせて膝がしらにのせてゐる。顔面はかなりいたんでゐる。鼻がなく、した顎がなく、兩眼もかけてゐる。しかし、目、口が大きく、彎曲があり、A洞本尊ほどの靜寂さはない。耳がながく大きいことは、もとより似てゐるが、この耳のしたぼそりになつてゐるのは、A洞本尊その他、ふるい佛像にみないことである。この兩眼の陶器はよくのこつてゐるが、ごく近世のものとおもはれる。

光背も、すっかりA洞本尊のものとのちがふ。纖細緻密であつて、坐佛や供養者の像も、みなきやしゃである。その點からすると、この本尊とともに、これに對應するA洞本尊より、はるかにおくられてつくられたものであらう。外縁の火焰は、岩のやうなかたまりから、ほそい三つの焰がたちのぼる式で、纖細であり、鮮鋭である。兩肩にも、おなじやうな火焰がある。これに應ずる内區は合掌跪坐の供養者である。頭光はさらに内區に坐佛の列像があり、中心には蓮華文があつて、よくとのつてゐる。要するに、全體として第六洞式である。

臺座はひくい。その側面に浮彫で供養者の列像を彫つてゐる(Fig. 13)。左がはは冠弁をつけた



第十三圖 第十九B洞 臺座 供養者列像測圖 Fig. 13. Cave XIX B, Pedestal, Worshippers.

男子の列、右がはは高髻の女子の列、みな手をあはせてゐるが、先頭の女子だけは博山爐をさゝげてゐる。それから、右がはは臺座だけでなく、後壁のすそ、さらに右壁のすそにわたって列像がつゞいてゐる。(Pl. 127-137)

〔右壁〕 右壁は、たゞ腰壁の一部がのこつてゐるのみであるが、そこには本尊の臺座にある女子供養者列像のつゞきがあらはされてゐる。(Pl. 137B)

〔天井〕 天井は、大ざっぱにいふと、ほゞ三角形になつてゐる。さうして、その底邊が前壁がはにあり、頂點が本尊頭部のうしろにある。こゝから光背が天井にのび、するどくとがつてゐるが、その他はたゞあらけづりのまゝである。天井は、ほとんどひらたく、側壁とのさかひは、わりにきはだつてゐるやうである。(Pl. 138)

第二十洞

第三章 第二十洞

1. 外壁と前庭

〔外壁〕 第二十洞は曇曜五窟の西端にある。その東隣に第十九西脇洞Bがあり、西隣に小さい第二十一洞がある (Plan I)。中古におこった大崩落のために、外壁はなくなり、本尊坐佛は露出し、1940年の發掘までは膝までうまってゐた。この發掘で、本尊は全貌があきらかになり、左右脇佛のすそが明白になった。そのうへ、いままでまったく知られなかった外壁の一部がたしかめられた (Fig. 14, 15)。それで、もとの平面がわかったが、東半はあきらかでない。たゞ西半は門口のあたりまでわかり、門口西側の痕迹が知られる。崩落は、あるひは中層をはしる粗惡なもろい層に起因するのかも知れない。ほかの曇曜窟からすると門口の幅は4.00mくらゐのものであらう。外壁は、もちろん、小さい千佛龕でおほはれてゐた。それは西部の残壁によってあきらかであるとともに、發掘中に出土した斷片によつてもたしかめられる。千佛小龕の形式は、他の曇曜窟のものとおなじで、雲岡後期のものである。

外壁は崩落後、數次の修築をへたやうである。修築には塼をもつてし、うへまでつみあげてゐるが、いまはそれも崩落して、ねもとの一部がのこるのみである。したがつて、外壁の原狀は、他の曇曜五窟によつて察するほかはない。(Pl. 1)

〔前庭〕 前庭は、1940年の秋發掘され、たくさんの斷石が發見された。この斷石を包含した層のしたに、なほ一層あり、かつて外壁にさしかけてあつた木造建築の瓦が、多量に包含されてゐた。その瓦は完全に北魏のものであるから、その建築物は當初からあつたものにちがひないし、その層が比較的純一であるのは、その崩落の時期がはやかつたことをしめしてゐる (Fig. 16)。さうして、それによつて前壁も崩落したらしい。その斷石 (Pl. 50-57) のあひだに、べつ時代の建築物に屬する遺物はない。

西方の丘の東部は、曇曜五窟のために共通の外壁がとゞのへられてゐる。洞前に切りとゞのへた石の前庭 (Plan I) がとほつてゐる。これは一齊にとゞのへられたのであつて、雲岡石窟最初の着手であつたとおもはれる。これから西にゆくと、もとの岩山のまゝで斜面になつてゐる。したがつて、第二十一洞以下の岩壁はひくゞ、足もとの床ははるかにたかくなつてゐる。したがつて、石窟

は小さく、不規則である。(Pl. 2-4)

2. 北 壁

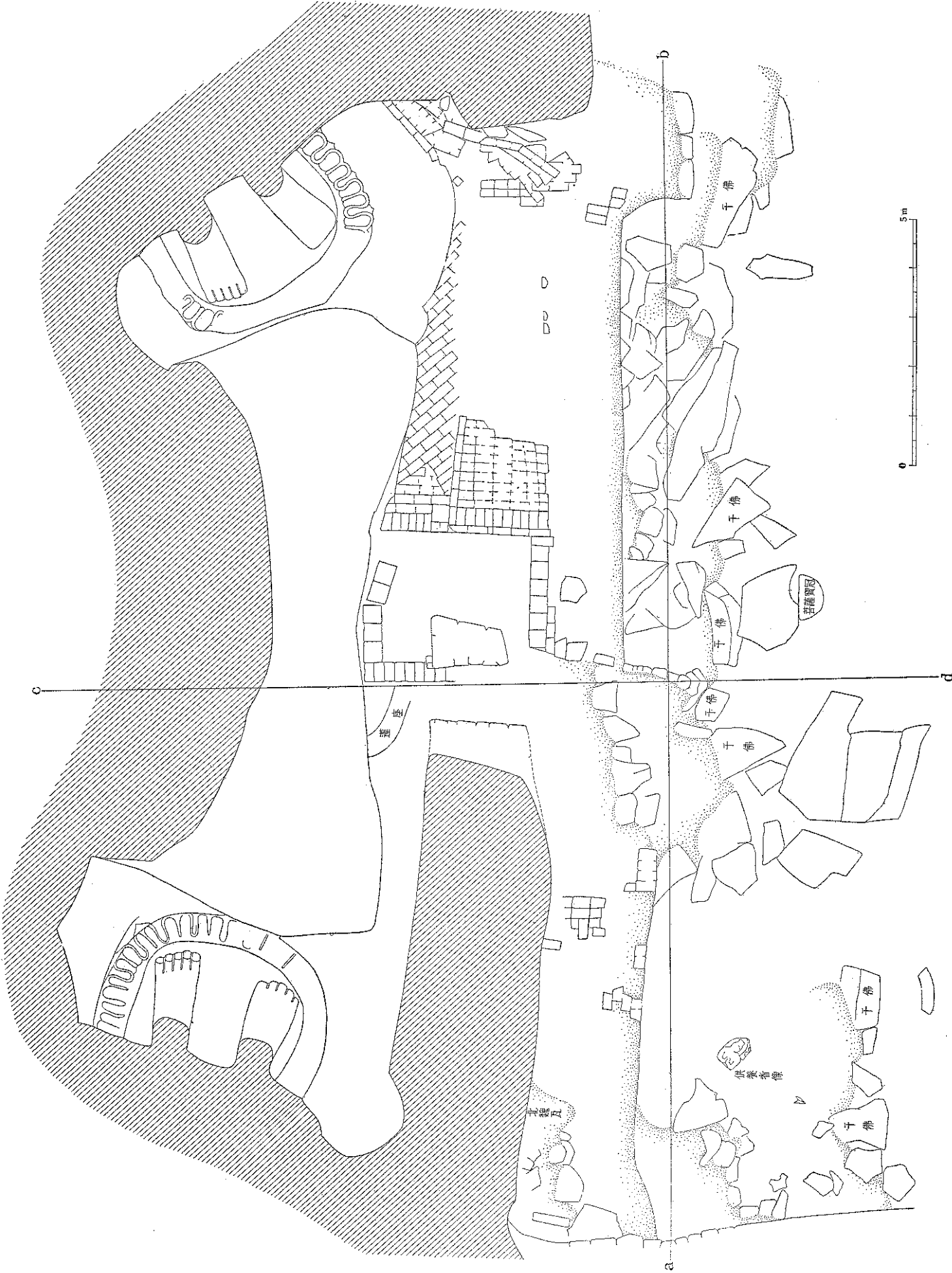
〔石窟構造〕 本尊坐佛は北壁のまへにすわり、左右の脇侍佛は、それぞれ東西壁のまへにたつてゐる。本尊と脇侍佛とのあひだに、せまい壁面があつて、こゝにごくあさい浮彫の脇侍菩薩が彫つてある。石窟内部はごくせまく、本尊のひざと南壁とのあひだは約0.80mにすぎず、脇侍佛とのあひだも約13.0m以下である。左右脇侍佛の蓮座は本尊の膝に密接してゐる。石窟の平面はほぼ梯形といへるが、どこもみな曲線的で不規則といふほかはない(Plan VI)。北壁と東西壁はひとつきで、くぎりがないが、本尊光背のあるところを北壁とし、それ以外を西壁、東壁として説明しよう。東壁は左脇侍佛とその上部の諸龕からなり、西壁は右脇侍佛とその上部の諸龕からなるが、南壁についてはまったく知ることができない。

現在は床に塼をしきつめてゐる。このため本尊の膝は、まだすこしうまつてゐるかも知れない。これは第十九洞の敷塼とともにやゝ古い、たぶん遼ごろのものである。また、一時南壁を構成した塼づみの一部ものこつてゐる。門口の東部であるが、これは塼も粗末で、はるかに近代のものである。だから、塼築の修理も遼のときと、その後と、すくなくも二回はみとめられるやうにおもふ。いま臺上にのこる塼築の一部(Pl. 4)が、そのどちらのものに属するかは、明瞭でない。

〔本尊坐佛〕 本尊坐佛は總高13.44mで、足をくみ、兩手をまへてあはせ、いはゆる^{dhyāna}禪定のかたちである。顔はまるく、頸はふとい。それに肩はゞはひろくて壯重な風貌を呈する。身體に密着した僧衣は左肩をつゝみ、その衣端はかるく右肩にかゝる式、いはゞ偏袒右肩である。衣文は、よくのこつてゐる上體の方でいふと、もりあげられた線と、ほりこんだ刻線とを交互におくといふやり方である。右肩と胸にあらはれた衣のはしは、折りかへしたやうにジグザグの文様になつてゐる。胸から右わきにかけてあらはれてゐる內衣は、もりあがつたひだがなく、刻線のみででき、ゑりのふちには二條の文様帯がある。一は連珠文、他は連環狀の唐草文で、第十九洞本尊のそれに似ながら小異がある。(Plan VII)

肩からうへは保存がよいが、腰、兩手、兩膝はひどくいたんでゐる。右足の左足にのつてゐるやうすはわかるが、衣文はすっかりだめである。これは南壁の崩壊により膝がうまり、兩手のなかまで土足でふみこまれてゐた1940年以前の情況に、その説明がもとめられるであらう。膝のしたには、中央西よりに蓮座の殘存とみとめられるものがある。これを復原すると東西長5.60mになり、本尊の兩膝のはゞ12.80mにくらべると、はるかにみじかい。膝の中央部に小さくあらはされた、めづらしい形式である。(Pl. 5-14)

〔左右脇侍菩薩〕 本尊の左右に、あさい浮彫の脇侍菩薩がある。右脇侍菩薩は、まるい光背を



第十四圖 第二十洞 發掘圖 Fig. 14. Excavation of Cave XX.

おひ、あさい蓮座のうへにたつてゐる (Plan XIII A)。たかさは 6.60m である。頭部はこはれてゐるが、寶冠の輪廓だけはみとめられる。頭髮の一部が、肩にたれさがつてをり、頸飾と腕輪がのこつてゐる。頸飾のひとつは薄板状のもので、したがとがり、また鈴をさげてゐる。他の一種は珠玉をつらねたもの、最後の一種は玦状で、その端に虎頭をつくつたものである。両手と腹部はすっかり消滅するが、足はのこつてゐて、大きく W 状になったすそに特色がある。足のあひだには衣端がたまつて、するどくとがりながら垂下してゐる。蓮座はあさく、足はひらいて、すっかりよこむきにあらはゐる。頭光にはなにもかざりがない。光背から肩にかけて、大きな方孔(約 3.20m に約 1.20m)があされてゐる。これをはいると、本尊のうしろをとほつて、東がはの脇侍菩薩のところにでゝくる。繞道 ^{pradaksina} のための隧道をあけるつもりかとおもつたが、それにしては既存の脇侍菩薩をとりこぼつてゐるのが解しがたい。よくみると、この一層がもっとも岩質のわるいところである。たぶん、その関係でこゝにかういふ空洞ができたのであらう。近世には、農民が利用するために、多少擴大したかも知れない。この菩薩の足もとに二三の佛龕があるが、それは中國式の服裝をした後期のものである。

左脇侍菩薩もかなりいたんでゐる。頭も冠もすっかりなくなつて、たゞ寶珠形の光背がのこつてゐるだけである。左肩にかゝつた天衣が、平行線のひだをつくつて、右にながれてゐるのがみえる。頸飾はたゞ板状のかざりがみえるのみ、そのしたばには鈴がならんでゐる。こゝにも下腹のあたりに約 1.90m に約 1.20m の方孔があつて、像を上下にたちきつてゐる。足はまた右脇侍菩薩のやうにつよくひらいてゐるが、足下の蓮座はすっきりない。1940年の發掘中、前庭から發掘された大きな寶冠は、この脇侍菩薩のものかとおもはれる。(Pl. 18, 19)

〔本尊光背〕 北壁全面をおほふ本尊光背はよくのこつてゐる。外縁の火焰帶は脇侍佛の頭光に一部かさなつてゐる。火焰帶について禪定坐佛帶がある。坐佛はみな偏袒右肩の式で、めづらしく右肩を完全にあらはしたものもある。くんだ手は拇指と他の四指とをはなし、二つの拇指が相合して、山形をしてゐるのが特色である。つぎは跪坐供養者帶であるが、右がはの供養者が合掌してゐるのに、左がはの供養者はみな蓮華の花を奉じてゐるらしい。つぎの肩上の三角區に火焰をうめてゐるのは、^{Kizil} キジールにもみられ、^{Gandhāra} ガンダラ²の肩光に關係あるものとおもはれる。さて頭光の方も、まづ火焰の外縁ではじまり、禪定の坐佛帶になり、中央の蓮華文になる。蓮華文が耳の上部からはじまつて頭上におよんでゐるのは、したからみる効果をかながへたのかも知れない。火焰はそとのとちがひ、ほそく、ねもとで弧狀につらなり、ゆれながらたちのぼつてゐる。光背は本尊の頭上で急激にまへにまがる。それは、このあたりからやうやく天井がはじまるからであらう。

光背の左右に二つづゝ方孔がある。0.15m から 0.20m 角で、したからは 12.00m のところにある。それから 14.00m 高のところ、やゝ小さいかも知れぬが、相似た方孔が七つならんでゐる。これらは、たぶん大崩壞よりのちにつくられたもので、前壁の塼づみを支持するための施設であつたとおもはれる。(Pl. 20-34)



第十五圖 第二十洞 縱斷面圖 Fig. 15. Vertical Section of Cave XX. 1:120

3. 東 西 壁

〔東壁左脇侍佛〕 東西壁も南壁に接するところはなく、たゞ北壁につらなるところがのこっている (Plan VII)。左脇侍佛はたかさ 9.60m, 足下にたかさ 0.60m, 直径 4.50m の蓮座がある。この像は比較的によくのこっている。大衣は兩肩をおほひ、すっぽりと足にまでおよんでゐる。ひだは本尊とおなじやうに、もりあがった式で、そのあひだに刻線がある。胸には弧をえがいてさがり、兩腕にはなゝめにたれ、太腿では垂直にたれ、また弧状になる。右手はあげ、左手はさげてゐる。左手には衣端をにぎっているが、兩方から大きな袖のやうに衣文がさがり、その小口にはジグザグの折りたゝみがあらはされてゐる。身體に密着した衣文のながれはマツラ^{Mathurā}派の彫刻に似るが、もりあがったひだは、むしろバミヤ^{Bāmiyān}ンの大佛にちかい。頭光は四つの圓圈からなる。外縁が、めづらしくC字形のパルメットつなぎ、つぎは坐佛帶、そのつぎは跪坐供養者帶で、中心區は蓮華文よりなる。(Pl. 15-17, Plan VIIIb)

〔東壁上部〕 脇佛の上部には二三の佛龕がある。まづ頭光にそうて、あまった空白をうめるやうに大小不同の三龕がある。みな尖拱龕で、そのうち、うへの二龕は、たしかに二佛並坐龕である。頭光のうへは二層になってゐるらしい。下層は左端破損するも、完好な二佛並坐龕があり、水瓶をもった脇侍、蓮華をさゝげた供養者がうつくしい。上層は、左半をうしなつた坐佛龕である。手は禪定形、龕内龕外の脇侍とともに素朴で力づよい。どちらも尖拱額で、額中になにも彫っていない。このうへに、なほ龕形のない禪定坐佛一體がある。あるひは、これが天井に接する坐佛列像であらうか。この光背の頂上で急に壁がまへにでゝある。また、この坐佛像はほゞ西面するが、本尊大光背と、あきらかにその供養者とおもはれる二天のゐる壁面は南面してゐるので、そのあひだに東壁をわかつ上下の界線がある。この附近の佛龕、佛像はみな素朴でつよく、豐滿な肉體をもち、みな光背の諸像とひとしく、初期の様式に屬する。

さて本尊大光背わきの二天は、便宜上こゝで述べるが、あきらかに本尊大坐佛にむかつて供養する天人たちである。西方にも、これに照應する二天がみとめられる。うへはおしくも頭部をうしなふが、よこにとび、兩手に蓮華をもっている。したは、おしくも手を損ずるが、なにかを奉じて跪坐してゐる。(Pl. 35-41)

〔西壁右脇侍佛〕 右脇侍佛は破損がひどく、たゞ土中にうもれてゐた蓮座のみがほゞ完存する。蓮座は 4.70m の直径で、そのうへにふんばつてゐる兩足とともに、左脇侍佛のそれによく似てゐる。衣のすそも左脇侍佛とおなじである。光背も一部分がのこつてゐて、外縁の唐草文帶、つぎの坐佛帶がわかり、左脇侍佛に一致する。(Pl. 17A)

この脇侍佛の左足のわきに小佛龕が二つ (Pl. 19A) ある。うへは二佛並坐の尖拱龕、したは坐

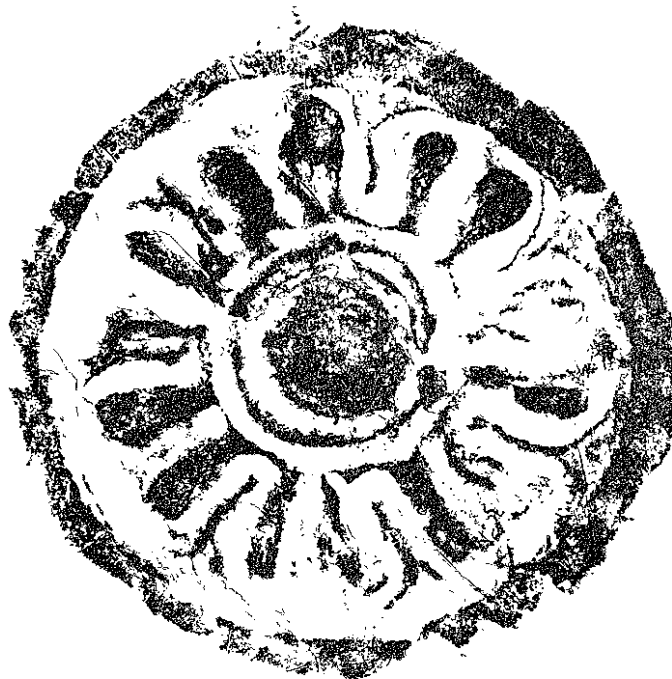
佛三尊の尖拱龕である。ともに瘦身で、雲岡末期の作。右足のわきにも同様な小龕がある。

〔西壁上部〕 右脇侍佛の上部は東壁と同様に二群にわけられるかとおもふ。一は本尊大光背に接し、大光背にむかひ、あきらかに本尊の供養者とみられる一群である。それは蓮華を手にしてよこにとんでゐる飛天以下三體である。飛天は、兩脚をしづかにそろへ、右手をうしろにひいてゐる。小さい三面寶冠に比して、面貌は大きく堂々としてゐる。いま、そのまゝい光背のわきに、なげしと帷幕のやうなものがみえてゐるのは、こゝから西壁がはじまり、またこゝで西壁の最上層がをはることをしめしてゐる。

この飛天のしたには跪坐の天人がある。蓮華を兩手に奉じ、本尊の方にむかつてゐる。顔は大きいし、また上身が下身よりもはるかに大きくつくられてゐる。この足もとで、岩が大きくわれて破損してゐる。あるひは、東部の對應像(Pl. 35)のごとく、足下に蓮座のつくりだしがあったのかも知れない。このしたに、やゝあさい彫りであるが、もう一體本尊の方にむかつて跪坐した天人がある。作ゆきは、まったくうへの二體に一致してゐる。

さて、もうひとつのグループといふのは、みな本尊の方に背をむけてゐる。それは西壁にある佛龕に供養してゐるからであらう。こゝにも、まづ二層になって佛龕のあることは、東壁に照應してゐる。上層は佛龕の左端だけがのこり、傍柱がはりにたった菩薩がみえ、侏儒をふんまへてゐる。そのわきに水瓶をもった比丘像がある。方臺と尖拱額が推察され、その尖拱額にそうて、他の小供養者たちがあらはされる。下層は、あきらかに二佛並坐の尖拱龕である。いま、その左方佛の上身だけのこつてゐるが、龕外には蓮華をさゝげた跪坐供養者三體が、大中小と大きさを異にしてあらはされてゐる。

なほこの左わきに、小さい二佛並坐龕があるが、それはあきらかに右脇侍佛の頭光の中央頂上にくひこんでゐる。どういふ意味か知りたいが、右脇侍佛の附屬であるらしい。この小龕にむかつて供養する小像が五體みえ、そのあひだに題名の刻がある。なほ、この題名のほかに、西壁上部と下部の小龕わきに、二三の造像記がみられる。前者は「興[?]法、ゝ」「尼[?]道惠洛造像二區」、後者は「尼道法□□造像一區、ゝゝ」とよまれる。(Pl. 42-49)



1:2

第十六圖 第二十洞前出土 北魏瓦當 拓本

Fig. 16. Roof-Tile of Northern Wei Period (Excavated from Front Cornt of Cave XX)

第十九洞 第二十洞の特徴

1

第十九洞の特色は、その大きさが雲岡第一だといふ點にあるが、それは本尊坐佛についてもいへるし、石窟そのものについてもいへる。しかも兩脇洞のあることが、その偉大さを決定的にしてゐる。その大きさの比較できるものは第三洞であるが、第三洞は未完成であつて、北魏の造像をもたない。その他の大石窟は、第五洞と第六洞、第七洞と第八洞、第九洞と第十洞の一對窟であるが、こゝにみるごとく三洞一組のものは雲岡石窟中どこにもない。第十九洞は、最初の着手において、この西方岩壁のいちばんよい壁面を提供されたやうである。

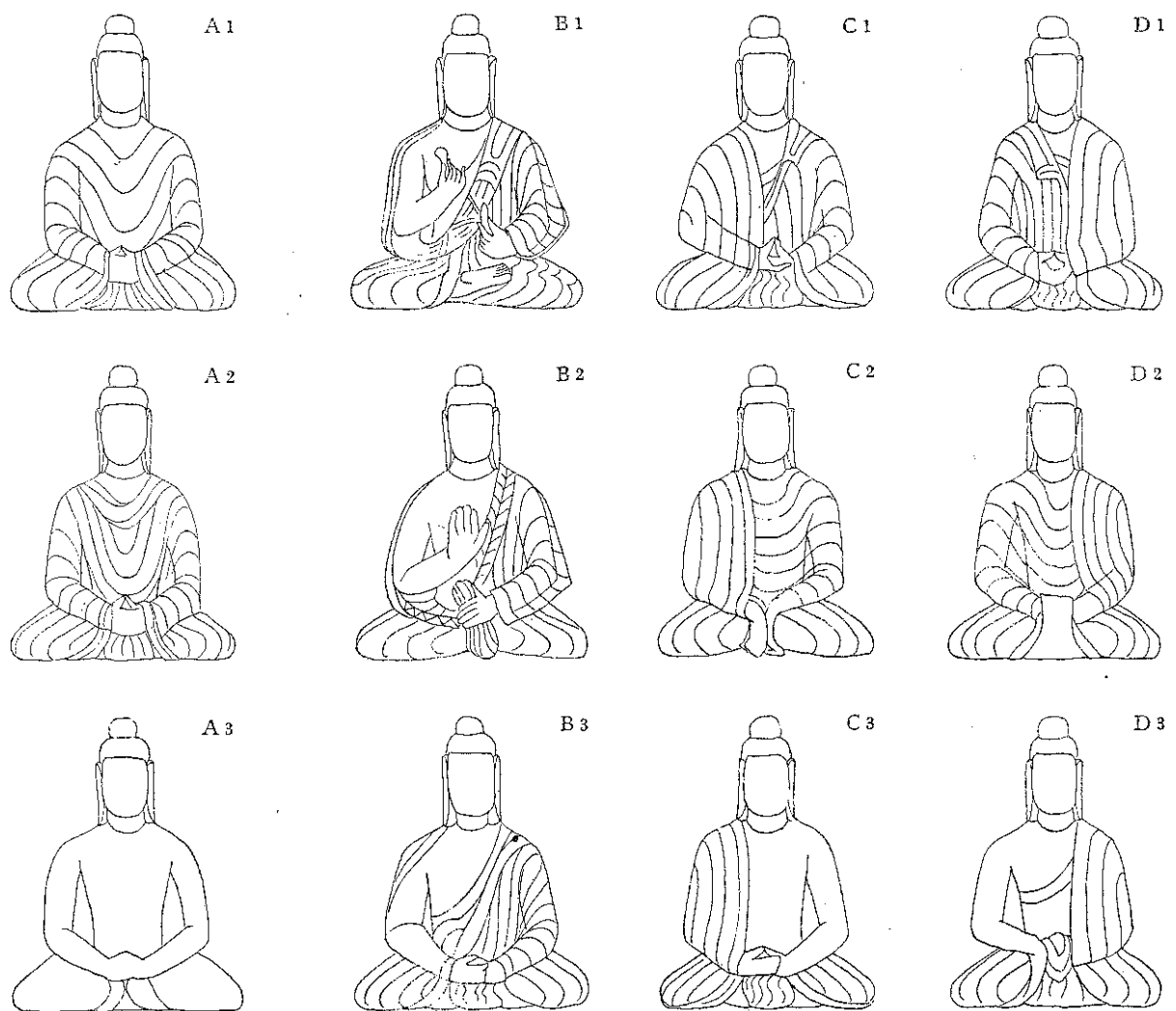
つぎは、この最大の坐佛であるが、これとおなじやうにすわつてゐるのは、西隣の第二十洞である。たゞそれとは手の位置がちがふ。第二十洞本尊の禪定形に對して、この本尊は舉手形である。左の手はふとい衣端をにぎつてゐる。あるひは意識的に二種の手相をもくろんだのかも知れない。第五洞も、坐佛の本尊であることはおなじであるが、これも第二十洞の本尊に似て禪定形である。したがつて、舉手形の坐佛を本尊にしたのは、第十九洞たゞひとつといふことになる。

Śakyamuni Buddha

坐佛本尊は、おそらく釋迦牟尼佛とおもはれる。さうして、釋迦牟尼佛の分身とおもはれる十方の諸佛で周壁をみたしてゐる。南壁東西隅の、脇侍ともみられる佛の立像は、第十八洞や第二十洞の脇侍大佛とちがふ。大きさの點で、はるかに小さいのみならず、中央佛に對し目ざはりにならないやうな前壁の隅に、おしこめられてゐる。洞内にはいった觀者は、たゞ本尊をみるのみである。

石窟の平面形は他の曇曜窟同様で、ほゞ橢圓形、それに南邊だけが直線にちかい。北壁と東西壁とのくぎりは明白でない。各壁はうへほどせまく、上部は半球形になるが、天井はほとんどたひらである。全窟を壓する本尊の大きさは、周壁にせまつてゐる。要するに、この洞窟はもつぱら本尊坐佛をほりだすため、おさめるためにつくられた空間で、たゞそれだけである。だから、なんら建築的な意匠はかへりみられてゐない。おなじことは左右の脇洞本尊のばあひにもいへる。

さて東西壁、南壁に充満する千佛であるが、ふつう千佛の衣文は二種あり、二種交互に配するのが雲岡石窟における通例である (Fig. 17)。その一種 (A) は左右相稱にすっぽり兩肩をおほふた式、他の一種 (C) はまづ左肩をおほひ、つぎに右肩から右腕をいっしょにつゝんだ式である。第十九



第十七圖 第十九洞 千佛着衣圖 Fig. 17. Drapery Types of the Thousand Buddhas in Cave XIX.

洞では、このほかにまだ二種ある。そのひとつは、左肩をおほひ、右肩に衣端をちよつとのせるか、
 全然はだか(B)であるかである。後者(C)の一步すゝんだもので、いはゞ偏袒右肩である。他は右
 肩がおほはれ、左肩があらはされるといふ異常な形式(D)である。(C)型は偏袒右肩(B)型の一變形
 であり、(D)型は(C)型の特異例で、意識的にか、無意識的にか、左肩のひだを省略したものである。

偏袒右肩は長者に對する禮で、經典中にもしばしばあらはれる。つまり右肩をぬいて、長者に
 對してつかへる意にいづるのであらう。これに對して、千佛は合手の禪定形であらはされるから、
 (A)とか(C)の型であらはされるのが自然であらう。雲岡では、これがふつうである。ところが第
 十九洞は、といふより、とくに第十九洞にかぎって、(B)とか(D)型の特異例があらはれるのである。

それから第十九洞では、この南壁の千佛龕が(A)(C)、もしくは(A)(B)、(A)(D)などの一對づゝと
 してあらはされ、その一對が、それぞれ一人の工人によってつくられたことは興味がふかい。

この第十九洞は、おどろくべきほど構成の意圖が單純で、初期の様式に統一されてゐる。それ
 だけに着手から完成までの時期も、みじかかったとおもはれる。明窓の千佛小龕は、いままで述べ

てきたごとく、たしかに時期においておくれてゐる。けれども、曇曜五窟に通じたものであり、とくに第十九洞三洞の明窓には共通するし、第十八洞の明窓にも多い。してみると、時期は若干ずれてゐるとしても、また全體計畫中の一要素とみることができる。あとからの追加佛龕としては、周壁の下部と門口のものがあげられる。

2

第十九東脇洞Aについては、本尊と脇菩薩が雲岡初期の様式であり、また周壁の千佛、天井、天盖がざりが初期の様式で、これまでが一貫した設計であり、施行であることがあきらかである。これに對して前壁の諸龕はやゝ不秩序で、全體の構想をはなれて追刻されたとみられるが、それでもふるく、雲岡初期の様式である。第十九洞門口最上層の佛龕にちかい。明窓と門口とは最初は彫刻がなかったとおもふ。現在の佛龕なり、千佛龕なりは、第二次、第三次としてくはへられたのであらう。

第十九西脇洞Bは東脇洞Aといっしょに計畫された。しかし、本尊も脇菩薩も、たしかに雲岡後期の様式である。前壁と左壁の上部にある佛龕は、うたがひもなく初期の様式に屬する。第十九洞門口上龕とおなじころといへよう。しかし、その他周壁の佛龕は、もっとおくれてつくられ、また千佛小龕は、それについて追加されたものとおもふ。かうして、西脇洞Bは東脇洞Aとまったく對立する様式をとる。たゞさうなつた理由については、いまのところわからない。

これについては、第十六洞が参考になるかも知れない。それは本尊大佛だけがあたらしく、周壁は大部分初期の佛龕でうまってゐる。だから、おなじやうな事情が第十六洞の本尊を、また第十九西脇洞Bを、のちの様式でつくらせたのであらう。たゞ、このばあひは初期の佛龕は、ひじやうにすくなく、石窟の空間はいたってせまい。第十六洞本尊のやうに、ある程度できあがつてゐたものを、ふたゝび加工したといふふうには、かんがへられない。理由はわからない、しかし、なにかの事情で完成をみずに放任されてゐたこの洞が、第五、第六洞開鑿の時代になって、ふたゝびとりあげられ、今日みるごときかたちにしたのだとおもふ。

3

第二十洞の大崩落は、石窟の全構造を知るうへに、大きな困難をもたらしてゐる。しかし、橢圓形の平面で、北壁本尊が窟内の大部分を占據して、第十九洞に似た構造であつたことは察せられる。だから、第十九洞について、つくられたとおもふが、衣文のひだはちがひ、手相もちがふ。面貌は柔和になつてゐる。手相のちがひは、わざと一對にするためかとおもふが、衣文のひだがおとな

しい階段状とちがひ、もりあがった密着式であるのは、そのもとづくところのちがひかとおもはれる。第二十洞の脇佛も、おなじく、もりあがったひだをつけてゐる。膝は、第十九洞に比して第二十洞の方が角ばつてゐて、かたいやうにみえる。要するに、立體性とか、力づよさといふ點において、第十九洞の方がすぐれてゐる。しかし、上半身の保存のよいことは第二十洞本尊の方がまさり、白い緻密な石の肌は、實にみごとである。

ことに北壁の光背がよくのこつてゐることは雲岡第一で、その規模の廣大と諸像の純朴さは、まことにわすれがたい。本尊坐佛の左右に、脇佛と脇侍菩薩を均等に配し、また脇佛のうへには、どちらにも平等に二層の佛龕を配置した。そのうへは、東西兩壁を綜合してかんがへると、坐佛列像の一帯をおき、つぎに天蓋かぎりの一帯をおいて、天井に達したやうである。大光背の左右に對應する供養者たちが、光背中の諸像に一致するのはもとよりであるが、各佛龕もそれらとほとんど時をおなじうしてできたらしく、諸像の作ゆきは完全に一致する。

光背の諸像は、また特色がある。その特色のひとつは、上臉のうつくしいふくらみである。脣はわりに小さく、うすい。肩、腕、腰もまるくやはらかで、これもこの光背の特色である。南壁は、崩壊のため、まったくわからない。たゞ出土の諸像によって、いくらかその缺陷をおぎなふことができる。第二十洞の崩落の時期は、遼の塼が床にしいてあるので、それ以前だということがいへる。それから前庭の最下の包含層をみると、これには北魏の瓦 (Fig.16) しかふくんでゐない。それで、北魏の建物の崩壊と、石窟の崩落とのあひだには、多少の時間的へだまりのあつたことがわかる。そのうへの包含層は、石窟の斷石のみをふくみ、瓦はない。だから遼より以前であることは、かさねて指摘することができる。

4

第十九洞は、その東西脇洞 A, B と一組の石窟である。しかし、第二十洞とは別の石窟である。たゞ十六洞、第十七洞、第十八洞をひきくるめてかんがへるとき、これらの五洞は一組の石窟だといひうる。それは、この五窟が『魏書』卷一一四釋老志にいふ沙門統曇曜奏請の最初の五窟に、もつとも似つかはしいからである。規模の大きいこと、どの窟にも一體づゝの大像をおさめてゐること、しかも、さういふ五大窟が一行にならんでゐることは、雲岡のどこにもみられない。これが、この五窟をさして曇曜五窟とよぶゆゑである。

もし、この推定がたゞしいとすると、『魏書』にいふごとく石窟の開始は和平元年 (A.D. 460) であるから、曇曜五窟の着手は和平元年だといつて誤りないであらう。けれども、この五窟が同時に着手されたであらうか。もちろん、岩山の岩壁をとゝのへるといふやうなことは同時におこなはれたであらう。ざつといて、いまみえる前庭の岩のはしと、岩壁のうはばとをむすぶ線が、その

むかし人工をくはへるまでの、この丘の傾斜である。それは傾斜しただけでなく、風化をしてゐたから、この自然の傾斜を切りとゞのへて、垂直のあたらしい岩壁をつくることが、まづ最初の仕事であった。つまり外壁の整頓である。

さて、そのつぎにきたるべき石窟の開鑿といふ段階になると、はたして五窟併行にほりすゝんだであらうか、それとも、はやいおそいがあつたのであらうか。これは問題である。しかも、これについての文獻的資料、また刻銘の資料はまったくみられない。五窟の現状から推論するほかはない。だから、もし着手に前後があるとすれば、規模が最大で、丘の中央にちかく位置し、しかも、もつともふかく岩壁をほりすゝんだ第十九洞は、最初に着手されたものとかんがえられる。しかし、五窟の中央にある第十八洞も、けっしてわるい条件だったといふわけにはゆかない。また第二十洞も、第十九洞東西脇洞とのおなじたかさといふことから、案外はやい着手がかんがえられるかも知れない。丘の中心といふ點からいふと、この方が中心といへないこともない。けれども、その中層にあらはれた岩質のわるい層は、なんといつても、これより西への開鑿をおもひとゞまらしめたにちがひない。さうして、大窟は、これからもつぱら東にのみひてゐるのである。第二十一洞以下の西端窟が、みなあのたかさに位置してゐるのは、第二十洞の西壁(Pl. 10)でわかるやうに、このわるい岩質の層によることはいふまでもない。

かういふふうで考察してゆくと、第十八洞、第十九洞、第二十洞の先後をつけることは、むづかしいやうにおもはれる。これに反して、第十七洞、第十六洞になると、けっして以上の三窟よりはやく着手されたといふことは、いひにくいであらう。たぶん三窟について、工事がすゝんだものとおもふ。第十七洞が、西の三窟よりいくらかあとだとおもはせるものは、その本尊が菩薩であることも一理由になるかも知れない。床が西の三窟よりさがつてゐることもまた、一理由になるであらう。すくなくとも、後者は工事のおくれてゐたことをしめすであらう。もし西の三窟よりおくれてゐなければ、洞内の床まで前庭をほりさげることも可能であつたらう。なほ第十六洞にいたつては、その丘の末端にある位置より、また本尊の工事のおくれてゐたらしい事實(本書、第十一卷、p. 44)より、曇曜の窟中ではもつともあと、第十七洞よりもおくれてゐたことはあらそはれない。つまり、着手も工事の進行も、もつともおそかつたものとみられる。

だから、第十九洞が第一、これにほとんど併行して第十八洞、第二十洞がつくられ、やゝおくれて第十七洞、ついで第十六洞が着手され、また工事も、これに準じてすゝんだと、いちおうかんがえられる。しかし、さうはいつても、この五つの石窟のあひだに、様式上から前後の區別をすることはむづかしい。それぞれのあひだに、かなりのちがひはあるけれども、それが様式の前後といへるものかどうかはうたがはしい。それよりも、各洞の個性といったやうなものがある。しかも、その大きな個性のちがひをこえて、雲岡初期の様式といふ點では、たがひに共通してゐるのである。

たゞこゝに問題になるのは、この初期の様式でつらぬかれ完成をみたものと、まだ未完成にと

まわってあるものと、それから雲岡後期の様式でしあげられてあるものとが、存在することである。初期の様式で完成してあるものは、第十九本洞と第十八洞と第二十洞である。これは、いちおう早期の完成がかんがへられる。まだ未完成にとまわってあるものは、第十九東脇洞Aの足下の蓮座であり、第十七洞足部である。これらは、なんらかの理由で、後期様式の流行するまへにやめられたのである。後期の様式でしあげられたものは、第十六洞の本尊と第十九西脇洞Bの本尊脇侍等の主要部分である。この二窟も、けっして後期様式のおこなはれるやうになってから、はじめられたものではない。着手はあきらかにふるく、その一部に初期様式の造営をみるのみでなく、全體の結構は曇曜五窟の一部として、けっして不都合なところはない。したがって、それが後期様式によってしあげられたことは、工事とちゅうにおける變更である。この變更は第十七洞、第十九東脇洞Aの中止と関係があるとおもふ。つまり、これらの四窟は、同時に中止されたのである。さうして、若干の中断ののち、第十六洞本尊と第十九西脇洞Bの、あたらしい様式による工事がはじまったのである。けれども、第十七洞と第十九東脇洞Aとは、そのまゝ放擲された。さうして、それが今日にみる状態になったのであらう。もちろん、第十六洞、第十九西脇洞Bの繼續工事は、第五洞、第六洞の着工以後である。

第十九洞の東西脇洞A, Bは、本洞よりはやいとはいへない。以上の結果からしても、おくれてゐたことは事實であらう。けれども、その差はすくなかつたであらう。また、そのとなりの第二十洞や第十八洞よりも、おくれてゐたとしなければならぬ理由も、どこにもない。といふより、むしろ、ほとんど併行してつくられたとおもはれる。第二十洞と床のたかさが一致することも、いかやうにも解釋できようが、やはり開鑿の同時に進行したゝめとすることが、もつともふさはしいとおもふ。東脇洞Aが第十八洞と平面においてかさなること(Plan I)も、やはりおくれてゐたとする理由にはならない。東西脇洞A, Bは、一部本洞にかさなつてゐる(Plan I)ので、これ以上床をほりさげられぬ状態になつてゐる。けれども、そのために第十九洞よりあとからできたといふ理由にはならない。むしろ、開鑿は同時にすゝんで、これら諸洞のかねあひのうへに、今日にみる現狀がうまれたと解すべきやうにおもふ。

なほ、曇曜五窟については、いくたの疑問がのこるであらう。けれども、曇曜五窟が雲岡初期の様式に屬すること、したがって和平元年(A.D. 460)から、第五、第六洞の着手される太和(A.D. 476)以前にできあがり、第十六洞の本尊と第十九洞西脇洞Bが雲岡後期の様式に屬し、第五、第六洞の着手された太和初年(A.D. 477)以後にできたらうとすることは、ほゞあきらかであらうとおもふ。

圖 版 解 説 (1)

第十三卷 第十九洞

Pl. 1. 第十九洞, 第十九 A, B 洞 外壁

中央に、第十九洞の明窓と門口がある。明窓は幅ひろく、アアチ形をしてゐる。明窓の兩わきにきりこみがあり、明窓の枠どりのやうにみえる。明窓をとほして本尊大坐佛の頭部がぼんやりとみえてゐる。門口もアアチ形である。外壁には、もともにかい千佛が一やうに彫られてゐたらしい。いまは明窓の兩わきから門口の上部にわたつてのこつてゐる。西がはが東がはよりよくのこつてゐる。明窓のうへは平らである。崖の最上部に中央から左右に傾斜した合掌ふうの切りこみがある。また頂上には棟木をうけたやうな方孔がひとつある。その點第七、第八洞外壁と同様で、かつて破風づくりの屋根を架けたことがわかる。崖の頂には積石がみられ、雨水の流下をふせいでゐる。

左右の兩脇洞は、斜むきにひらいてゐる。そのため、外壁は南面した中央の面と、ななめにきりたつた兩側の面からなりたつてゐる。三面とも頂上には積石がある。この三面からなる外壁をはなれると、外壁は折れまがり、ふたたび南面となり、東がはでは第十八洞外壁につゞき、西がはでは第二十洞外壁につゞく。しかし、第二十洞外壁は、ふるく崩壊したので、圖版左端でみるやうに、外壁がない。また、右脇の第十九B洞の外壁も大破して、本尊倚坐佛が露出してゐる。第十九B洞の明窓と門口とは、なくなつてゐるが、明窓の左側壁と門口の左側壁とはのこつてゐる。左右の脇洞はたがひに照應し、門口はかなり高いところにひらかれてゐる。しかし、それに達するための造構は、なにもつくつてゐない。左脇の第十九A洞は明窓も門口ものこつてゐる。明窓はやゝ大きく門口は小さく、ともにアアチ形である。東よりの外壁も、かなり崩落して、孔が二個所にあいてゐて、洞内に通じてゐる。(明窓高6.45m)

Pl. 2. 第十九洞 門口 東側

外側と上部とは破損してゐる。だいたい三段の造龕であるが、上段の二龕(1, 2)は様式的にふるい。そのうちがはの佛龕(1)は交脚の彌勒三尊で、楣拱龕、そとがはの佛龕(2)は二佛並坐で、尖拱龕である。ゆたかな身體つきで、右肩に衣

端がかいてゐる。顔や手に破損はあるが、あきらかに第一期の製作である。拱額には九體の小坐佛をほる。この二龕は、たしかに一組である。天蓋は共通であり、寶壇も連續してゐる。寶壇にはなんの彫刻もなく、石の素地のまゝになつてゐる。

中段は中央に坐佛の尖拱龕(3)をほり、左右龕傍に小千佛龕をつくる。この小千佛龕は、うへの二三段は、この龕に固有のものであるが、したの二三段は外部に連續し、まはりの小千佛龕とさのかひがない。かうした小千佛龕の交錯は、このわきにある龜裂などとともに、造龕の順序を考察してゆく手がかりかとおもふが、そのことは Pl. 5 でとかう。この佛龕は上龕よりもおそく、雲岡末期の形式である。

下段の佛は不規則にならんでゐる。おくには小さい坐佛龕(4)、つぎは二佛並坐の尖拱龕(5)、それから坐佛の尖拱龕(6)、そのしたに小さい坐佛龕(10)、それからやゝ大きな交脚菩薩楣拱龕(7)、さうしておくの最下、わづかにのこつてゐるところに、小坐佛龕(8)(9)が一二ある。交脚菩薩龕(7)は、繊細きゃしゃな點において、うへよりは一段とすゝんでゐる。兩脚左右の衣端もつよく左右にはねてゐる。あきらかに中段の佛龕(3)よりも、一步おくれた造刻である。つまり、上段、中段、下段といふふうに、三期にわかれて追刻していったあとが明瞭である。(門口高約5.80m)

Pl. 3. 第十九洞 門口 西側

東側壁より一層破損がはなはだしい。上段は初期様式の六つの龕(1—4)(Pl. 7)、二つづゝ上下にたゞしくならんでゐる。そのしたに空白の壁がのこるのは寶壇の意であらう。中段、下段の區別をしがたいが、小千佛龕が一面にあるなかに、上中下三龕(5—7)が、不そろひにほられてゐる。いづれも尖拱形で上龕(5)と下龕(7)は坐佛、中龕(6)は二佛並坐である。頭部はこはれてゐるが、なで肩で、中國式の服制をしめし、千佛とともに末期様式である。うちがはの壁は、大破してゐる。

門口の天井は、もともと空白であつたことがよくわかる。側壁の上部と中部にある方孔は、中古に、木造の戸口のあつ

雲岡石窟第十九洞

たあとである。これに對應する東側にもみられる。とにかく、側壁上部の、兩がはがともにひどくくすぶってゐるのは、こゝに民家のあったせゐであらう。(門口高5.80m)

Pl. 4. 第十九洞 門口 東側 交脚菩薩龕(1)

龕の上部は、なかば破損があるが、楣拱額には童子形の飛天をならべ、そのしたに三角垂飾と、せまい帳幕をはる。本尊交脚菩薩は、ゆたかな身體つきで、まるい顔のうへに寶冠をいたゞいてゐる。寶冠正面は蓮華と新月形である。右手はかけてゐるが、胸にあてた痕跡がのこつてゐる。天衣が左肩からなくめにかゝり、兩肩のうしろに大きな弧をゑがいてゐる。ひくい方座にどしりと腰をかけ、くんだ足はいきいきしてゐる。あきらかに初期の形式である。方座の兩側に頭のまるい小さな比丘が合掌してすわつてゐる。左右廂には脇侍菩薩が兩足をひらいてたつてゐる。腰のはった豐滿な像である。楣拱額のうへには高髻の合掌天人の立像がならび、そのうへに帳幕がある。この帳幕は、南隣の二佛並坐龕(2)と共通で、めづらしいことには、その一々に飛翔する童子形天人をほつてゐる。(龕高約1.50m)

Pl. 5. 第十九洞 門口 東側 坐佛龕(3)

尖拱形の龕に坐佛三尊をほる。坐佛は脣と顎とを損じてゐるほかよくのこつてゐる。やゝおもながで、目がほそく、上脣がおもい。なで肩で第六洞式服制があつく身體をおほふ。胸まへには內衣のたれ紐がみえてゐる。膝においた左手の、きゃしゃな表現が目をはひく。第十五洞東壁の佛像にちかく、末期の形式である。光背はしめされてゐない。彩畫であつたのであらう。左右脇侍は龕内に相對して合掌し、わりにあさく彫つてある。

拱額には九體の坐佛がある。通肩式と右肩をあとでおほふ式と交互にあらはしてゐる。拱端は、獨角の獸、たぶん龍であらう。齒なみがすごくあらはされてゐる。拱額の上端は帳幕があり、そのしたに、高髻形の合掌供養者がゐる。いづれも纖細優雅な表現である。龕の左右は小千佛龕を四段ならべ、寶壇にはさらに一段あらはしてゐる。ところが、小千佛龕のうち、うへ三段——右がははたゞ二段であるが——は、眉、目、鼻、脣の表現がこまかく、通肩の衣文も垂下する拋物線狀で、あまつさへ龕拱もするどくとがり、尖拱と尖拱とのあひだに比丘の上身があらはされてゐる。その他の小龕は、むしろ龕外をとりまく小千佛龕とおなじで、佛像は簡略にされ、拱額は圓頂になつてゐる。どうしてかういふことになつたか確言はしがたいが、あるひは、つぎのごとき事

情かと想像される。この坐佛龕は、一區劃を設定し、周圍の小千佛龕より、さきにつくられたとおもはれるが、實際は周圍の小千佛龕の造刻と、大した時間のへだたりはなく、たがひに平行してつくられたため、まはりの小千佛龕と連續して、かういふ結果になつたのかとおもふ。龕傍の小千佛龕は佛龕を上下にかさねてゐるが、そとのそれは、ちどりにかさねてゐる。その結果として、第四段目の、いちばんなかの小龕が、半ぶんしか、あらはされないことになつたのである。(龕高約1.80)

Pl. 6. 第十九洞 門口 東側 諸龕(4-6, 8-10)

東側壁のうちはの諸龕(4-6, 8-10)がみられる。いづれも尖拱形の龕で、坐佛はおもなが、なで肩で、第六洞式の服制である。末期形式であることはあきらかである。最北の佛龕(4)は、千佛龕と同大で禪定佛であるが、寶壇があり、その中央銘區をはさんで供養者立像がしめされてゐる。尖拱の形式は小千佛龕よりもするどい。佛龕(5)は二佛並坐で、その南の佛龕(6)とおなじく尖拱額に七佛坐像、寶壇に銘區と供養者をほつてゐる。たゞし、いづれにも、刻文はない。佛龕(10)は、佛龕(4)とほゞ同大同形式で、禪定佛をおさめてゐるが、尖拱額のうへに四體の供養天人がゐる。下部北側の佛龕(8)も、同大同形の禪定佛だが破損してゐる。佛龕(9)はやゝ大きく、舉手形の坐佛で、破損がはなはだしい。このあたりの坐佛は、中國式の服裝であるが、みな內衣のたれ紐をみない、やゝ古い形式であり、また寶座の供養者も、ふるい形式である北方服をつけてゐるのは、注意される。(第5龕高約0.75m)

Pl. 7. 第十九洞 門口 西側諸龕(1-4)

壁を上下二段、左右三列にくぎつて六龕をおく。中央上龕(3a)は楣拱形で、交脚菩薩を本尊とする。拱額と本尊の頭部とを損するが、菩薩の身體はゆたかで、ひくい方座にすわり、兩わきに獅子をはべらせてゐる。初期形式の彫刻である。光背は彩畫であつたらしい。左右の廂には合掌の脇侍がたち、そのうへに、一體づゝの高髻供養天人がゐる。北龕(4a)は中央龕(3)よりほゞひろくとり、本尊交脚菩薩は完好である。左右の廂は、柱によつて中央の間からはっきり區別し、合掌した脇侍立像をおさめてゐる。兩龕とも拱額は空白で、上下に帳幕がある。くらべてみると、中央龕の方が粗略で、省略されてゐる點が多い。下龕(3b, 4b)は中央、北いづれも二佛並坐である。大きな肉髻がめだつが、顔容は至極入念に眉目、鼻、脣をあらはしてゐる。やゝなで肩で、服

制は右肩に衣端のかゝる式である。光背はこれも彩描である。拱額には、過去七佛をほるが、拱端は単純な鉤形にをはってゐる。

南龕も、やはり上下二龕(1,2)であるが、すこし様子がちがひ、上下とも、二佛並坐の尖拱龕である。こゝでは上龕のしたに、空白の寶壇があるので、下龕がそれだけひくゝなっている。造像は初期形式であるが、この六龕は、總體にみて粗略な製作で、東側上龕には、はるかにおよばない。(第36龕高約1.00m)

Pl. 8. 第十九洞 明窓 東側

Pl. 9. 第十九洞 明窓 西側

明窓の側壁には東西とも千佛の小龕が整然とならんでゐる。そとがはと上部は破損がひどいが、上下二十三、四段、一段十六の小龕からなり、ちどりにくんでゐる。したがって、隔段ごとに兩端の佛龕は身體を半分しかあらはしてゐない。明窓は、左右に袖のやうになったきりこみがあるが、そこにもまた、この小千佛龕をならべ、外壁の小千佛龕につづいてゐる。外壁の小千佛龕が、曇曜五窟の全體にわたつてゐたことは、すでにこれまでの圖版(Pl. 1, 第十二卷 Pl. 2, 3)によつてあきらかである。みな末期のほそい形式で、衣文も機械的に簡略化され、ほとんど通肩の一式になつてゐる。本來なれば、通肩式と右肩をあとからおほふ式とが、交互にあらはさるべきであるが、こゝでは、もはや右肩をあとからおほふ式は、ごくまれにしかみられない。

側壁のほぼ中央、上下にわたつて三つの矩形の孔がある。これは近世のもので、石窟を風雨からふせぐ明障子の框ぐみである。床上の圓孔も、これと関係のあるものかも知れない。天井の破損(Pl. 63)もこゝからうかがへるが、もともと、なにも彫つてゐなかつたのであらう。(側壁高4.80m)

Pl. 10A, B. 第十九洞 明窓 西側 中央部 小千佛龕

小千佛龕はアチ形である。いちおう圓拱のやうにみえるが、このやうに線刻の尖拱形がつくられてることがあり、尖拱形を意圖したことがわかる。坐佛はまへで手をあはせた禪定形である。こゝのところは、みな通肩の式で、衣文はゑりくびの二本の弧線と胸の二本の垂線とよりなる。きはめて簡略化されたもので、門口側のごとき平行弧線の衣文をふくまない。頭部も小さく、目鼻たちをみないのは略されたのか、風化の結果かわからない。なで肩であるが、胴や腕はわりにゆたかである(Fig. 18)。(龕高約0.20m)

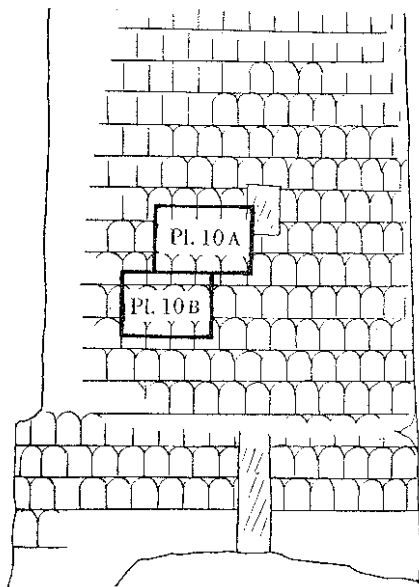


Fig. 18

Pl. 11. 第十九洞 南壁と西壁

南壁は、明窓のしたから西がはにかけて大破してゐるが、西壁とともに千佛龕によつてすきまなく、おほはれてゐる。千佛龕の層序は、兩壁に共通で、二十四段ある。南壁から西壁にうつる隅に、明窓とおなじたかさで佛の立像が、ほとんど丸彫のごとく彫つてある。これは東がはにもある。これらの像は小千佛龕でいふと、八段分のたかさを占めてゐる。西壁の下部、北よりに、浮彫の重層塔がみえる。上部北よりには本尊の光背がまへにのしでゐる。天井に接して三角垂飾があり、弧状になった帷幕がある。さうして、そのしたに、坐佛の列像がある。これは、したの千佛龕よりやゝ大きい。ひらたい天井がみえ、その北部に、光背の火焰がみえてゐる。圖版の右端に、北壁の本尊大佛が、すこしみえてゐる。(洞高17.14m)

Pl. 12. 第十九洞 南壁 上部 東半

圖版右端に明窓がみえ、明窓は、わづかにカアヴしてアチ形をつくつてゐる。南壁東部はせまく、東端に丸彫にちかい佛の立像がある。全面に、千佛の龕があるが、南壁は碁盤目につくり、東壁ではちどりにつんでゐる。天井に接して三角垂飾があり、弧状の帷幕がある。帷幕のしたは、一列だけ坐佛の列像である。南壁中央がふくれてゐるが、それでもほぼ平面であるといへる。これに對し、東壁は北壁とともに、ドゥム状にまへにのめり、したがつて南壁ではうへぼそりになる。明確な界線は、みとめがたいが、だいたい佛の立像がさかひである。千佛の層序はだいたい兩壁とも共通であるが、佛立像の左右では東壁の九層に對し、南壁は八層しかない。東壁は風化がひどく、佛立像の頭上まで、およ

雲岡石窟第十九洞

んでゐる。南壁はほぼ完好で、整然たる佛龕の配列は、うつくしい。(明窓高6.45m)

Pl. 13. 第十九洞 南壁 上部 西半

南壁東半に照應する構成である、明窓の床からいふと、うへに九段の千佛があり、第一段の第七龕目に、佛の立像がある。天井に接して三角垂飾がみえ、弧状の帷幕が、こゝでは明瞭である。帷幕のあひだには風鐸かとおもはれる装飾がたれさがつてゐる。そのしたに、坐佛の列像があり、線刻の重光がある。さうふかい彫りでないが、面貌はたくましく、変化がある。佛立像は板状半圓形の臺座にたち、そのしたの千佛龕は、それだけ突起してゐる。これに對して、光背のうへでは壁が曲面になり、西壁に移行してゐる。

Pl. 14. 第十九洞 南壁 東部 上層 左脇佛立像

頭部が風化して、顔容がみとめがたくなつてゐるのはおしいが、均整のとれた堂々たる立像である。通肩の衣文が、身體にぴったりと密着し、兩腕を胸からはなしてゐるさま、兩足をひらいたさまが明瞭である。衣文は、あさい階段状をなし、胸から股間へ、平行の弧線がかさなつてゐる。兩足では、大腿部あたりまで平行して垂下し、膝からしたはまた弧状の平行になつてゐる。すそは三重になつて左右にゆるい波状をつくつてゐる。たれた左手は、指が風化してゐるが、衣のはしをかるくもつてゐる。右手は胸にあて掌をふせて、拇指と中指でなにかつまんでゐる。まげた右手からたれた衣端は、したになると、あたかも縫ひあはせた袖のやうに密着してゐる。その衣端のふちには、衣のをりかへしをしめす一種のジクザグ文様をほつてゐる。兩手からたれた、この袖状の衣端は、あたかも風をふくんだやうに、左右にふくらんで、はなはだ特徴的である。顔面は、わづかに右の眼だけのこつてゐる。圓光は風化してゐるが、無文で、あさく、外縁に一本の刻線をみるのみである。臺座は特別にないが、足の左右の壁面を、すこしくぼめてゐるので、半圓形の臺上にたつやうに見える。そのため、このしたの千佛龕は、かなり不規則になつてゐることが、圖版左端にみえてゐる。(像高3.60m)

Pl. 15. 第十九洞 南壁 東部 上層 千佛龕

圖版(Fig. 19)左端に、南壁東隅の佛立像がみえ、そのすそに小型の佛立像が、二體上下に彫られてゐる。いづれも、壁面を舟形にくぼめたなかに、おさめられてゐる。うへの立像は、左手をたれ、わきにすわつた合掌童子の頭をなでゐる。

る。南壁西隅にある佛(Pl. 30)の型である。小さいながらも、よくとつた身體つきである。したの立像はやゝ風化がひどい。たれた左手は、衣端をとるのみで、隣接する大立像の型である。そのよこは千佛龕である。幅のせまい尖拱額で、頂上は、いちじるしくとがつてゐる。龕傍には柱をあらはし、柱頭も簡單ながらしめされてゐる。龕内の坐佛はひとしく禪定形、衣は通肩式と右肩をあとから衣端でおほふ式との二つで、通例どほり交互に按配されてゐる。刻線の衣文はいたつて粗朴であるが、顔容は一つづゝ威嚴をたへてゐる。(平均龕高0.60m)

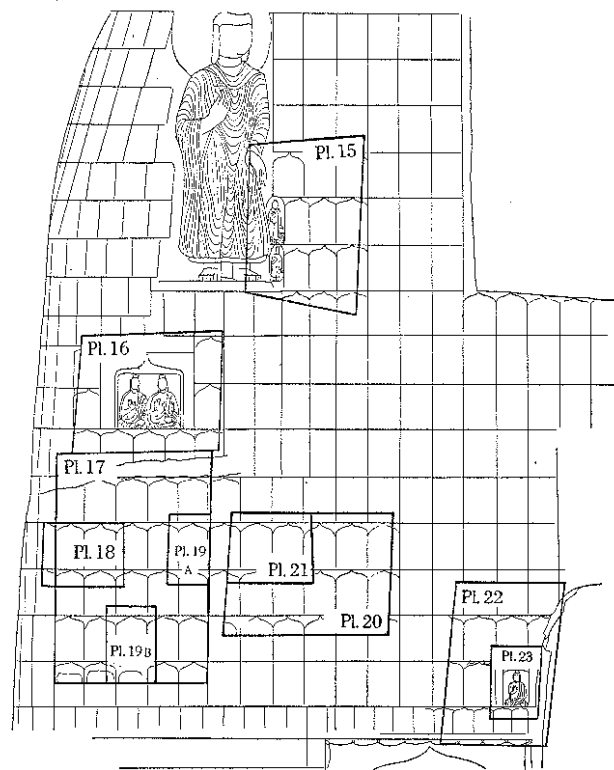


Fig. 19

Pl. 16. 第十九洞 南壁 東部 中層 二佛並坐龕

東南隅佛立像の下方、千佛龕にまじつて、二佛並坐の尖拱龕がある(Fig. 19)。尖拱額は、ほとんど水平で、龕形は隅まるの矩形にちかい。拱端は單純な鉤形で、そのしたに、簾座の柱頭がほつてある。二佛は、いづれも正面にむき、肩を接し膝を接し、龕いっぱいすわつてゐる。角ばつた頭だが、顔容はするどい。視線をしたにむけてゐる。服制は右肩に衣端のかゝつた式で初期形式である。左手は衣端をとり、一つは膝におき、一つは腰にあてゐる。胸においた右手は掌をみせ、ふとい指さきは素朴で、いきいきとしてゐる。龕をめぐつて、素朴なほりの合掌天人があるが、左右均齊ではない。左右下部には腰衣だけで、骨のあらはな高髻像が、一體づゝあらはされてゐる。あきらかにバラモンであつて、右の像は、さしだした手に、まるいものをさゝげてゐる。左の

像は、手さきをうしなっていてわからないが、第九洞前室の諸像(第六卷, Pl. 9), 第十二洞前室の諸像(第九卷, Pl. 40)をみると、一方は鬘髻、一方は鳥であったことがあきらかである。これとおなじ像は東脇A洞前壁(第十三卷, Pl. 74)にもみとめられ、もっともよく似てゐる。(龕高約1.00m)

Pl. 17. 第十九洞 南壁 中層と下層 千佛龕

南壁東部 Pl. 16 のしたにつづく千佛龕である(Fig. 19)。約0.60m大の佛龕で、整然とつんである。尖拱額は、わりあひに扁平で、頂上はするどくがつてゐる。龕内はわりにあさく、佛像もふかくない。顔は大きく、きりっとしまり、體格はゆたかである。衣文は刻線式。通肩の式と一方の肩を衣端でおほふた式と交互におくが、それだけでなく、衣文の變化はきはまりなく、ほとんど同一のものはない。また、よくみると、身體のかつかう、顔つきも、それぞれにちがつてゐる。いまかりに、圖版にあらわれた千佛龕の層を、上からa, b, c, d, 列を左から 1 2 3 4 と名づけることにする。

a ₁	a ₂	a ₃	a ₄	a ₅
b ₁	b ₂	b ₃	b ₄	b ₅
c ₁	c ₂	c ₃	c ₄	c ₅
d ₁	d ₂	d ₃	d ₄	d ₅

そのうちb層4と5はひじょうによく似てゐる。まづ頬のあたりのつよい顔貌が似、衣文のふかい彫りが似、それからくんだ手の大きなのが似る。いまこれをb層2や3にくらべてもちがひ、c層4や5にくらべてもちがひ、a層4や5にくらべても、ちがいけれどもやはりちがつてゐる。してみると、この二龕は、おなじ作者によってつくられたと結論してもよさそうである。ついで、そのしたのc層4と5は、また同一作者である。それは面貌の類似だけでなく、合手の手が同層2や3とちがひ、b層4や5とちがひ、d層4や5ともちがつてゐる。さういふふうにして合手の手だけでみてゆくと、a層4と5が一致し、c層2と3が一致し、しかも、そのそれぞれに膝の衣文の一致が顯著であつて、そのうへ隣接の諸像と明白にちがつてゐる。そこで、これらの一對は、それぞれ同一の作者だとみてよいであらう。さらにa層2と3, d層2と3, 乃至d層4と5も、それぞれに同一作者の手になる一對龕とおもはれる。そして、となりあはせの二體は一方が通肩であれば、他方は衣端を一方の肩にかけた衣文で、たがひに相おきながら一對になる。さうして、

その一對の横はゞは約0.80mで、ちょうど人一人が坐してしごとをするのに、つがうのよい程度である。一對づゝうけもつた工人が、ながく横列をくみながら、工事をすゝめておつた壯觀を、想像することができる。それでは、このおなじ作者が、さらにその下層とか上層とかでは、どうあらはれるかといふ問題がある。そのことは、こゝでは、はっきりとした關係をみとめがたいが、あるばしょ(Pl. 43)ではたしかにみとめられる。(平均龕高0.60m)

Pl. 18. 第十九洞 南壁 中層 千佛龕

この二龕はPl. 17のd層1と2にあたる(Fig. 19)。ひじょうによく似てゐるけれども、前圖の解説の推論によれば、たしかに別人の作である。しかし、どちらもつよい眉目、ひきしまつた口もとで威嚴があり、胸はゞがあり、膝がで、實に粗朴なうちに堂々たる迫力をそなへてゐる。かんたんな刻線の衣文が實に自由で、のびのびしてゐる。

たゞ奇異なことは、この衣端を肩にかけた像であるが、その肩は、ふつうみるごとく右肩でなく、左肩であることである。これはまさに特例で、その他の諸洞にみるものとちがふ。ところが、この一區劃はみなさうであつて、そのふうはなほ若干下方(Pl. 20, 22)にまで、およんでゐるらしい。

Pl. 19A. 第十九洞 南壁 東部 中層 千佛龕

B. 第十九洞 南壁 東部 下層 千佛龕

A. さきの圖版Pl. 17のb層5の佛龕である(Fig. 19)。面貌ひきしまつて威嚴があり、體軀もゆたかで堂々としてゐる。合手の手は大きく、特色がある。衣はまづ右肩をおほひ、ついで他の衣端で左肩をつゝんだ式で、さらにその衣端で左腕をくるんでゐる。衣文は、單純であるが、すこぶるのびのある刻線である。

B. この圖版はPl. 17のd層3である(Fig. 19)。前者よりもあさい。面貌も扁平で、髮際はまるくあがつてゐる。合手の手は、とくに拇指が顯著で輪形をつくつてゐる。衣はやはり左肩を衣端でおほふ式である。右したはやゝ風化がみられる。

Pl. 20. 第十九洞 南壁 東部 中層 千佛龕

さきのPl. 17のしたにつづく千佛龕である(Fig. 19)。よくみると、こゝにも二龕づゝのコンビがみとめられる。圖版のうへからa層b層、左から1-5列とかぞへて、各千佛龕をしめすことにする。まづa層1と2とが、拱梁をあらはしてない點および、すわつた腰のやゝたかい點で一致し、衣文の

	a ₁	a ₂	a ₃	a ₄	a ₅
	b ₁	b ₂	b ₃	b ₄	b ₅

大きな相違にかゝらず、幅ひろい肩も共通してゐる。それからb層3と4は面貌、頭形が一致してゐるうへに、膝のひくい點が共通である。これも一對であらう。したがってまた、a層3と4と、b層1と2とがそれぞれに一致し、一對であることがみとめられる。こゝでも、一般に衣端で左肩をおほふ異例である。(平均龕高0.60m)

Pl. 21. 第十九洞 南壁 東部 中層 千佛龕

Pl. 20のa層1と2の一對龕である(Fig. 19)。かうしてみると、以上にあげた一致點のほか、面貌の近似してゐることが指摘できる。口もと、鼻から頬のあたりが、よく似てゐる。それにしても、この2の龕の衣文を、全然彫つてゐないのはどうしたわけであらうか。どちらも、とゞのつた壮重な顔つきで、體軀もゆたかで、迫力をもつてゐる。

Pl. 22. 第十九洞 南壁 東部 下層 千佛龕

門口の東にそうた南壁の千佛龕である(Fig. 19)。けれども、それはたゞうへの二段だけである。こゝでも、さきの觀察はあてはまるやうであつて、上段も、下段も中央二龕が、それぞれに一對をなす。ところが、この上段の一體は、いままでの一對龕のやうに衣端で左肩、左腕をつゝんでゐるが、下段の一體は、一般通例にみるやうに、右肩と右腕とをあとから衣端でつゝんでゐる。

このしたの二龕は、舉手形の坐佛で、あきらかに千佛龕とちがつてゐる。わきに、小さい坐佛と供養者の浮彫があり、うへに弧狀の帷幕がある。尖拱額にも、刻線を輪廓にそうてはしらせてゐる。面貌はするどく、うへの千佛龕にちかひ、また體軀はよくとゞのつてゐる。なほ、このしたにやゝ小さい千佛龕が一行みえるが、これは、これより下部にひろくほどこされてゐる千佛龕である。(平均龕高0.60m)

Pl. 23. 第十九洞 南壁 東部 下層 千佛龕

さきの圖版Pl. 22にみた佛龕のうちで、門口にちかひ龕である(Fig. 19)。拱端の鉤形や簡單な籐座、また帷幕のしたの蓮華が注意をひく。そのしたは三段になり、うへは禪定形坐佛、なかは跪坐の高髻天人、したは合掌する高髻天人の立像である。兩足をそろへてたつた右がはの立像は、そ

の異常にほそい兩足が目だつてゐる。坐佛は舉手形、衣制は偏袒右肩の式で、素朴な力づよさがあり、うへの千佛龕よりは、よくとゞのつてゐる。

Pl. 24, 25. 第十九洞 南壁 東部 下層 坐佛龕

方形の區劃をなし、上縁にあさい帳幕がある。尖拱額は、よくとゞのつた形で、拱端は獸頭形、それをうけて籐座がある。本尊坐佛は完好で、やゝおもなが、頸がほそく、なで肩である。右肩に衣端のかゝつた衣制だが、階段狀の衣文は形式化し、末期の形式に屬する。門口東側壁の佛龕(3)(Pl. 5)にちかく、それよりも一步すゝんでゐる。舉身光をあさく彫り、そのうへにアチ形のおほひがつき、めづらしくも龕のふちにそうて弧狀の帷幕がある。左右の脇侍は龕内に相對してゐるが、小形であり、頭部をうしなつてゐる。拱額には小さい九體の坐佛をほる。龕傍左には比丘の立像があるが、右の像はえぐりとられてゐる。比丘のうへは、高髻形の合掌天人がかさなり、うへへゆくほど小さくなつてゐる。西側の諸像の方が大きく、彫刻も精妙である。本尊のすそに接して、ひくい寶壇があり、こゝに供養者の列像をごくあさく彫つてゐる。香爐を中心にした供養者たちで、先頭二人は比丘、その他は北方服の男女である。北方服ではあるけれども、その纖細な表現は、この佛龕の比較的にあたらしく、底部の諸佛龕にちかひことを暗示するとおもふ。

この佛龕のうへには、もろい岩層があり、そこに千佛龕が一段あらはされてゐる。これは上層の千佛より小形であるが、あきらかに初期形式の造像である。この大龕の東がはにそうて、なほ三段の列龕がみえる。

底部(Pl. 24)はひどくいたんでゐるが、それでも門口のちかくには、中等の諸龕のあつたあとをとゞめてゐる。しかし、いづれも纖細で、のちの形式である。だいたい門口東側最下の諸龕に、平行する時期のものであらう。(龕高約2.50m)

Pl. 26. 第十九洞 南壁 東部 下層 坐佛龕 左脇比丘

尖拱龕の龕傍左にたつ比丘である。ふくよかなまる顔で、ながいうつくしい眉と、ほそい微妙な目、ちひさく愛らしい口もとが、まことに纖細である。鼻がわづかにかけてゐるのはおしい。

衣を通肩にまとふが、衣文は、應揚な曲線をそがいてながれてゐる。右肘をまげ、蓮華をもつた右手を、胸にあてゝゐる。左手はかるくまげて指さきで水瓶をとつてゐる。腰をすこし右にひねつてゐるので、右手首からたれたながい袖に腰のふくらみがよくあらはれてゐる。まへにたれた衣

端の線は、大きな波状をえがいて特徴的である。すその線は、左右に形式的にひらき、大きな足さきのひらいた形に應じてゐる。きはめて洗練された彫刻で、雲岡のおほらかさがたまたれつゝ發達した形式である。

Pl. 27 A. 第十九洞 南壁 東部 下層 坐佛龕 左拱端

B. 第十九洞 南壁 東部 下層 坐佛龕

合掌供養天

A. 拱端は虎形といへようか、角がない。大きな目と鼻、口と耳が簡潔にあらはされてゐる。足をちぢめて簾座をふんでゐる。こゝに拱額末端の小坐佛がみられる。線刻の圓光、舉身光があり、半圓形の蓮座にはながい莖がついてゐる。龕傍比丘のうへには、二體の高髻形の合掌天人がたつ。ともに通肩の衣である。造像は、みな保存がよく、うつくしい。

B. 比丘の圓光に接して高髻の天人がある。高髻は矛さきのやうにつよくとがってゐる。顔はおもながで、めづらしく、切れながの大きな目をしてゐて、やさしい。口もとに微笑をたいへ、簡素なうつくしい彫刻である。

Pl. 28. 第十九洞 南壁 西部 最上層 坐佛列像

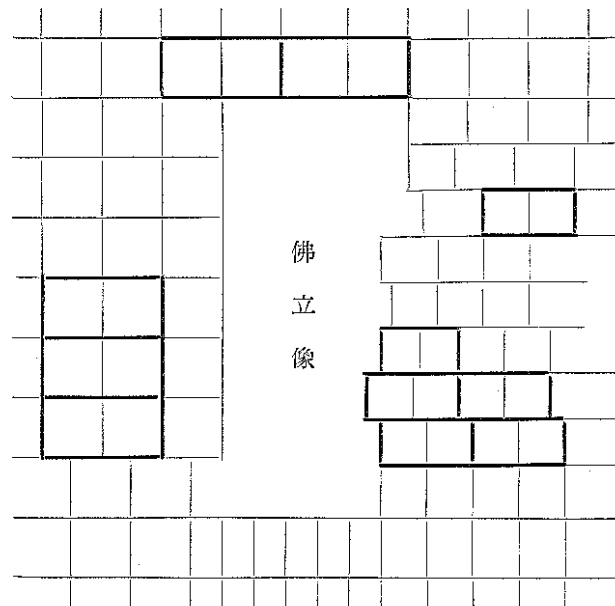
うへに、弧形にしぼった帳幕がみえ、坐佛列像がある (Fig. 20)。黒くなつてゐるのは、窟内で炊事の煙をたてたからであらう。坐佛は禪定形で、通肩と右肩に衣端のかゝる形式との二種を交互におく。頭部はおもながであるが、量感にみちてゐる。身體もやゝほそいが、ゆたかで、初期の作たるにはじない。この列像のしたに、千佛龕が展開するが、こゝには、たゞうへ的一段だけがみえてゐる。こゝでも、うへの觀察が役だち、むかつて右の二龕は、共通のつよいしもぶくれの顔から、一對であることがわかり、左の二龕も全體的に一對としての資格をそなへてゐることに氣づくであらう。それにしても、この西部の千佛龕は、龕のうへに童子形の供養者を、一對づゝあらはしてゐるのが、東部とちがふところで、あとから衣端を肩にかけた佛は、一般通例のごとく右肩にかけ、これも東部の下方とちがってゐる。

Pl. 29. 第十九洞 南壁 西部 上層 右脇佛立像

むかつて左には、南壁の千佛龕、右には西壁の千佛龕がみえ、中央に兩壁のあひだにたつ佛の立像がある。この佛立像は南壁東隅の佛立像と照應して、ともに龕形をとらない。南壁の千佛龕は、佛立像のおくまった背面につづくため、こゝですこし彎曲してゐるし、西壁の千佛龕は、この佛立像の

かたちに、照應するため、不規則にをはつてゐる。佛立像の臺座は半圓形の板状をなし、そのしたの千佛龕は、自然に弧状をなして突出してゐる。

こゝでも、南壁の千佛龕は碁盤目にかさなつてゐるが、西壁ではちどりに配置されてゐる。また、南壁と西壁とで、千佛龕の層序は相通じてゐるが、たゞ佛立像の左右では、一段の差ができ、西壁の方が多くなつてゐる。さらに、さきの觀點によつて、一人の工匠による一對龕をひろつてみると、したの圖表のごとくになるとおもふ。(像高3.60m)



Pl. 30. 第十九洞 南壁 西部 上層 右脇佛立像

この立佛像は右手を胸にあげ、左手はたれて、その手で跪坐する童子の頭をなでゝゐる。これは釋迦とその子ラフラ Rāhula (羅睺羅) とである。曇曜譯の『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p.497) 卷十の羅睺羅因縁によれば、ラフラは釋尊出家のその夜胎内にいり、六年苦行ののちに出生した。それから、釋尊はさらに六年の教化ののち、はじめてカピラ (迦毘羅) 城 Kapila-vastu にかへつてきた。もとの妃、ヤショダラ Yaśodhara (耶輸陀羅) は、ラフラになんじの父のまへにゆけといったが、釋尊は、おのれをめぐる千二百五十人の比丘をみな佛身のごとく變じた。しかし、ラフラはまどふことなく正眞の釋尊の左足のあたりにたつた。そこで佛は無量劫中におさめた功德相輪の手をもつて、その頭上を撫したといふ。この佛の立像は、まさに、その光景をあらはすものである。西晋の竺法護譯になる『普曜經』(大正大藏經, 第三卷, p.596) 卷八によると、羅睺羅でなく羅云とかき、印信環を釋迦にさゝげたことになつてゐる。この彫刻では別になにもさゝげたふうなく、たゞ佛手のしたにあつて合掌するのみである。

雲岡石窟第十九洞

佛立像はきはめて優秀な製作である。通肩の衣はきはめてうすく、胸、腹、手足の立體がよくわかる。中國で曹衣出水と評される形式で、あたかも、水中よりあらはれたやうに衣文が身體に密着してゐる。衣文は、ひくい階段式で、胸から腹、股間にかけて規則たゞしい弧線をならべ、また膝からしたに弧線をかさねてゐる。肩から腕にかけては平行線のひだとなり、左手にはしっかりとまとひついてゐる。右手の衣文は、肘のあたりからながい袖状にしづかにたれてゐる。その袖のふちには通例のごとくジグザグの文様がついてゐる。すその部分は壁があられてゐるが、ひらいた兩足はやゝ粗雑なほりである。この佛立像には中インド様式、とくに、グプタふうの影響がつよくはたらいてゐるとおもはれる。

左肩のわき、千佛のはしに小形の二體の佛立像 (Pl. 34A) がみえる。羅睺羅因縁にいふ千二百五十の比丘にあたるものであらうか。さらに反對がは、右足のわきには、千佛にならんで龕形のない坐佛が小さくほつてゐる。そのなゝめうへ、千佛列龕中に二佛並坐龕 (Pl. 34B) があるのはめづらしい。

Pl. 31. 第十九洞 南壁 西部 上層 右脇佛立像 上身

まるい頭部にはながい眉、威嚴にみちた目、ひいでた鼻、纖細な口があらはされてゐる。この顔容は西方のものではなく、雲岡初期の特色があり、他の追従をゆるさない。ほとんど丸彫にちかく量感にみちてゐる。この頭部に對し堂々たる身體がよく調和してゐる。肩から腕にかけての肉づけは、人體をよくみてをり、形式化してゐない。衣文がきはめてうすいこと、しかも、インドふうの官能的な印象のないことが注意される。右手は、腕が破損してゐておしいが、かるくまげた四本の指と、掌の表情はいきいきしてをり、甘美でさへある。大きな圓光背は無文であり、簡潔でうつくしい。

Pl. 32, 33A, B. 第十九洞 南壁 西部 上層 右脇佛立像 ラフラ

立像の掌のしたに小さな童子、ラフラ (羅睺羅) がひざまづいてゐる。まるい頭は、髪のはえぎはだけを、一線でしめし、頭髪はない。頬がゆたかで、口もとに微笑をたゞへてゐる。ひいでた鼻、ながい眉、そして目は慧智にかゞやいてゐる。目のかたすみに、微笑のかげをあらはしてゐるのも、非凡な彫刻である。なで肩で、子供らしい身體つきをして、兩手は胸まへに合掌する。衣文をまったくあらはしてゐないやうであるが、ごくうすいものをつけてゐることは、左腋と肘をみればあきらかである。素朴な純眞さがみちあふれ、

身體も表情にも形式化のあとがなく、緊張した堅さがなく、子供の像としてまことにすぐれてゐる。(像高0.90 m)

Pl. 34A. 第十九洞 南壁 西部 上層 佛立像

B. 第十九洞 南壁 西部 上層 二佛並坐龕

A. 西壁千佛小龕のはし、佛立像の圓光のよこに、の二體小さな佛立像がある (Fig. 20)。うちがはの一體はいっそう小さいが、身體の均齊がよい。二體とも、右肩に衣端のかゝる

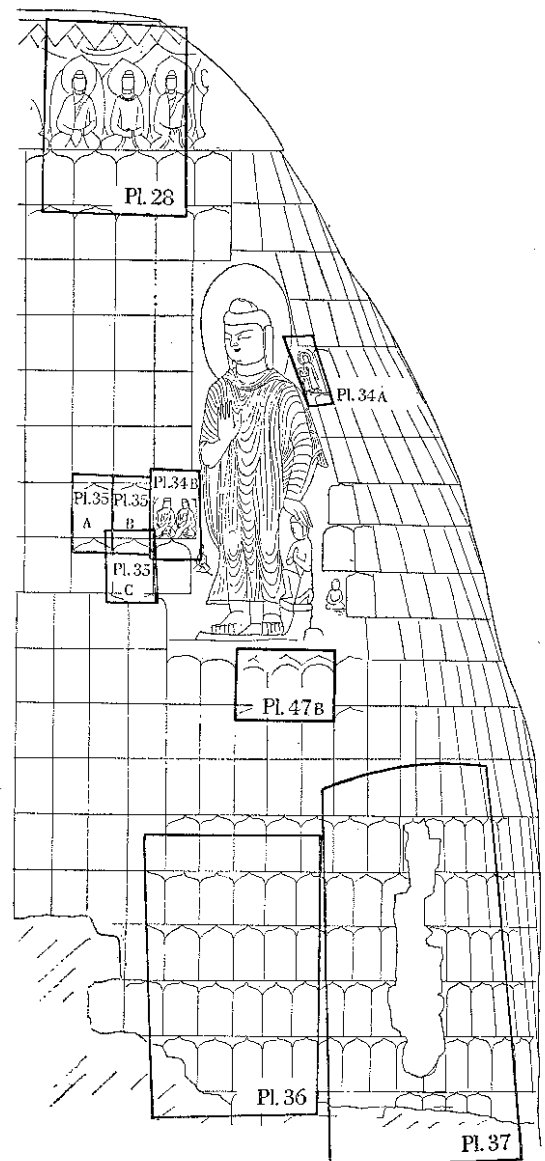


Fig. 20

衣制で、右の佛大像の通肩とはことなる。舉身光と圓光とは二重になり、さがとがたつてゐる。どちらも、さげた左手に衣端をもち、小像の方は手の甲をみせ、大像の方は手のひらをみせてゐる。顔をみてゐると、どちらも同一人の手になったことがあきらかである。どういふ意味で、こゝに佛の立像が二體までつくられたかはあきらかでないが、東の大像のわきにも三體ばかりの立像 (Pl. 14) がみられる。

B. 佛龕は、千佛龕中の一つであるが、異例にも並坐の二佛があらはされてゐる。右手をあげ、左手は膝におき、まったく相おなじであるが、左手は一方が甲をみせ、他は掌をしめしてゐる。衣制は偏袒右肩の式で、内衣のはしがなゝめにみえてゐる。(Fig. 20)

Pl. 35A,B,C. 第十九洞 南壁 西部 上層 千佛龕

(A)と(B)の佛龕では、龕上に高髻の供養者をあらはしてゐる。たゞ(C)の龕のやうな供養者のみないのも、佛立像のわきの諸龕には多い。坐佛は、もとよりみな禪定形で、衣制には変化がある。(A)は右肩に衣端をかけ、右腕をくるんだ式であるが、どうしたことか、左半には衣文がない。はだかでない證據には、左腕の手くびに、衣端がかゝってゐる。衣文は略されたか、わすれられたかであらう。(B)は偏袒右肩の式で、わづかに衣端が右肩にかゝってゐる。(C)はまづ左肩をおほひ、ついで右肩にかゝり、右腕をすっきりつゝんだ形式で、この洞に多い形式である。こゝには、偶然であるが、通肩でないものが三つならんだわけで、このうち(A)は特異の例、(B)と(C)とはふつうにみるところである。ところが、(B)はふつうの偏袒右肩式で、一般に通肩に對立するものである。(C)は、また通肩に對立するものだが、雲岡石窟に多く、その他ではあまりみない。獨立した一形式であるよりは、(B)の一變種である。ところが、この一變種にすぎない(C)の形式が、雲岡石窟では壓倒的に優勢であつて、しばしば通肩と相對してあらはれ、この第十九洞西壁(Pl. 29, 42-44)では、奇妙にも(B)の偏袒右肩と相對して、あらはされたりするのである。(Fig. 20)

Pl. 36. 第十九洞 南壁 西部 中層と下層 千佛龕

これは西半下部の千佛龕である。こゝはどれも龕上に供養者をほつてゐない。通肩の佛にならんで、右肩右腕、もしくは左肩左腕をつゝんだ佛をおくが、まちがったのか、通肩の佛が二つならんだところもある。それに、めづらしいの

	a ₁	a ₂	a ₃	a ₄	a ₅
	b ₁	b ₂	b ₃	b ₄	b ₅
	c ₁	c ₂	c ₃	c ₄	c ₅
	d ₁	d ₂	d ₃	d ₄	d ₅
	e ₁	e ₂	e ₃	e ₄	e ₅

は、あとからかけた一方の肩の衣はふつうだが、そのしたにある衣の糸りをなゝめにせず、通肩のごときひだにしたものがある。さういふのが五、六體も、こゝにあるのはふしぎである。衣文が充分に理解されてゐないのである。それにしても、こゝは保存がよいから、同一人の作による一對龕を容易にみわけることができる。便宜上、上から a, b, c, d, e の各層、左から 1, 2, 3, 4, 5 の各列をかぞへることとする。面貌の、それぞれ似てゐるものはもとよりであるが、そのほかに、b 層 1 と 2 は兩足中央の垂衣のふくらみにおいて、3 と 4 とはその扁平さにおいて、d 層 2 と 3 とはその垂衣の特異さにおいて、まったく共通したものがみられる。(Fig. 20)

Pl. 37. 第十九洞 南壁西部 中層と下層 千佛龕

南壁兩隅、佛立像の下方は、ひきつゞき千佛龕がほられてゐる。圖版中央の孔をとほして右脇B 洞倚坐大佛の左手衣文と、そのしたの供養者列像がみえる。千佛龕は、前例のごとく、尖拱龕の禪定佛であるが、した四段は高さがすこしひくくなり、さらにしたの一段は隅に數龕があるだけで、全壁には、まはつてゐないらしい。破壊孔の最上部には、べつの一龕があり、その帳幕と、かたはらの合掌供養者と、四脚の寶壇がみえる。(Fig. 20)

	a ₁	a ₂	a ₃		a ₅	a ₆	c ₇
	b ₁	b ₂	b ₃		b ₅	b ₆	b ₇ b ₈
	c ₁	c ₂	c ₃		c ₅	c ₆	c ₇ c ₈
	d ₁	d ₂	d ₃		d ₅	d ₆	d ₇ d ₈
	e ₁	e ₂	e ₃		e ₅	e ₆	e ₇ e ₈
	f ₁	f ₂	f ₃	f ₄	f ₅	f ₆	f ₇ f ₈

こゝにも、さきのやうな二龕一組の作者がみつめられる。上から a, b, c, d, e, f 層、左から 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 列とかぞへると、比較的確實なものは、b 層の 2 と 3, b 層の 5 と 6, e 層の 2 と 3 とおもはれ、その他もだいたい圖表のごとくなるであらう。(平均龕高 0.60m)

Pl. 38. 第十九洞 東壁

圖版左に、北壁本尊がみえ、右に垂直にたつた南壁がみえる。本尊大佛の膝と、南壁との距離が、きはめてせまいことが、よくわかるであらう。東壁は風化がおほいが、南壁の千佛龕のつゞきであり、二十四段からなる。床にちかづくと、風化がはなはだしく、はっきりしない。天井に接して、三角

雲岡石窟第十九洞

垂飾と帳幕があったはずであるが、破損してゐる。そのしたに、坐佛列像がある。北壁本尊の大光背がなまめにのび、天井までのびてゐるのが、おぼろげながらみえる。圖版右がはには門口東側があり、門口天井の破壊がよくわかる。

Pl. 39. 第十九洞 東壁 下部

南壁下層のかたむきがみとめられる。これは北壁本尊の膝がまへにつきでゐるので、底部をけづりとして餘裕をもたせたのであらう。もろい岩層が水平に二條とほつてゐて、その部分の破損はとくにひどい。また、東壁の床に接する部分も、破損がはなはだしい。東南隅に孔があつて、光のもれてゐるのは東脇の第十九A洞からである。

北壁大佛の、腹から膝にかけてのカヅ、左右の手のかたむきが目をひく。(洞高 17.14m)

Pl. 40. 第十九洞 西壁 上半

西壁は東壁とまったく照應してゐる。天井につゞく三角垂飾、坐佛列像、さらに千佛は南壁からのびてゐる。東壁よりいくらか保存がよいが、最上層や下層は、やはり風化がひどい。北壁大光背がなまめにはしり、天井までのび、外縁の火焰帯はほど追究することができる。

Pl. 41. 第十九洞 西壁 下半

西壁にももろい岩層がいくつか水平にはしてゐる。西南隅、佛立像のしたの岩層がそのひとつで、千佛龕のなかには別石で佛の像をおぎなつたものがある。西壁の床にちかく三つの重層塔が高浮彫であらはされてゐる。一つは南壁にちかく、一つは西壁のほど中央、他はおくにある。

北壁大佛の大きな膝のなめらかなカヅがよくわかる。膝は、まだ一部が土にうもれてゐる。(右手支柱高 1.90m)

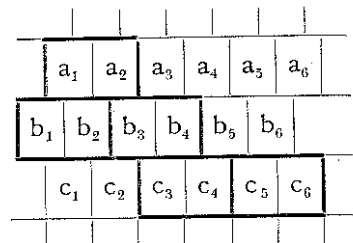
Pl. 42. 第十九洞 西壁 上層 千佛龕

西壁、うへから第四段以下の千佛龕である(Fig. 21)。龜裂の北は急に風化がひどくなつてゐる。衣制は三通りからなる。(A)通肩式、(B)偏袒右肩、すなはち左肩をおほひ、そのあとで衣端を右肩にかける式、(C)右肩右腕をつゝみ、左肩をあらはす式である。C型はさきの Pl. 35A とおなじであるが、左肩は單に衣文をわすれたのでなく、あきらかに意識して省略してゐる(Fig. 17)。これは異例である。こゝではB型とC型とを一組とし、對比させてゐるが、C型はがんらい左肩をつゝみ、あとで右肩右腕をつゝむB型の異例である。これは西壁のみにみられる形式である。こゝでは面貌その

他破損が多いので、同一作者の一對龕をさだめることは、困難であるが、南壁の千佛龕にくらべると、よくとゞのつてゐる。時期はあるひは多少おくれるかもしれない。龕上に高髻供養者をあらはすことは、南壁におなじであるが、ところどころに火焰を彫つた拱額がみられる。(平均龕高 0.50m)

Pl. 43. 第十九洞 西壁 上層 千佛龕

第八段以下の千佛龕である(Fig. 21)。南端の千佛龕と南壁右脇佛立像の童子像とがむかつて左端にみえてゐる。保存は比較的よい。こゝでは、偏袒右肩のB型に對して、右肩と右腕をつゝんだC型をくみあはせて一對にしてゐる。右肩と右腕をつゝんだ式のうちには左肩に衣文を彫らない



C型が多い(Fig. 17)。こゝでは比較的明瞭に同一作者による一對龕を指摘しうる。その結果は上の圖をみよ。むかつて左から二つづゝが一組である。通肩は二例だけ、偏袒右肩のかはりに、あらはされてゐる。これは一般通例には反してゐる。またa層1と2の作者が、そのしたのb層1と2の作者らしく、b層3と4の作者がc層3と4の作者らしいのが興味をひく。(平均龕高 0.50m)

Pl. 44. 第十九洞 西壁 上層 千佛龕

Pl. 43 にしめした上段の三龕である(Fig. 21)。衣制が三つともちがつてゐる。中央とむかつて右の坐佛は頭部が大きく、合手の手も大きく、よく似て一對である。偏袒右肩のB型と右肩をおほひ左肩をあらはにしたC型とである。たゞなかの坐佛は兩足が、ひじょうにちひさいのが妙である。これに對して、左の坐佛C型は膝がとくに大きい。したがつて腰の位置がたかい。膝の衣文もちがつてゐる。別の工人がつくつたとするにふさはしい。しかし、このあたりの佛像は、素朴で自由な表現をとり、威嚴にみちてゐる。

Pl. 45. 第十九洞 西壁 上層 千佛龕

Pl. 43 の、うへから二段目、むかつて左から二つ目の坐佛である(Fig. 21)。右肩にかゝつた衣文は、あつくぼるが、左肩の衣文はたゞ線刻だけである。尖拱形は、裂罅をよけたためか、ねじれてゐる。いかにも粗野な表現だが、目、鼻、口はきりつとしまつて、力にあふれてゐる。龕背に、あらぼりの

痕跡がまだのこっている。(平均龕高 0.50m)

Pl. 46. 第十九洞 西壁 中層 千佛龕

Pl. 47A. 第十九洞 西壁 中層 千佛龕

B. 第十九洞 南壁 中層 千佛龕

まんなかに、水平にはしったもろい岩層がある。だから、この部分だけは、当初から、べつに良質の石をおぎなつて坐佛をつくつてゐる。あるひは頭部のみ、あるひは上半身といふやうに補填してゐる。その補填はもとより雲岡初期のもので、そのうち、若干はいまうしなはれてゐる。こゝでは偏袒右肩と通肩の佛が、不規則にあらはれ、右肩と右腕をつゝんだ式をその相手として一対になつてゐる。右肩と右腕をつゝんだものうちには、まだ一二左肩をあらはにするものがまじつてゐる。破損は、はなはだしいけれども、下段

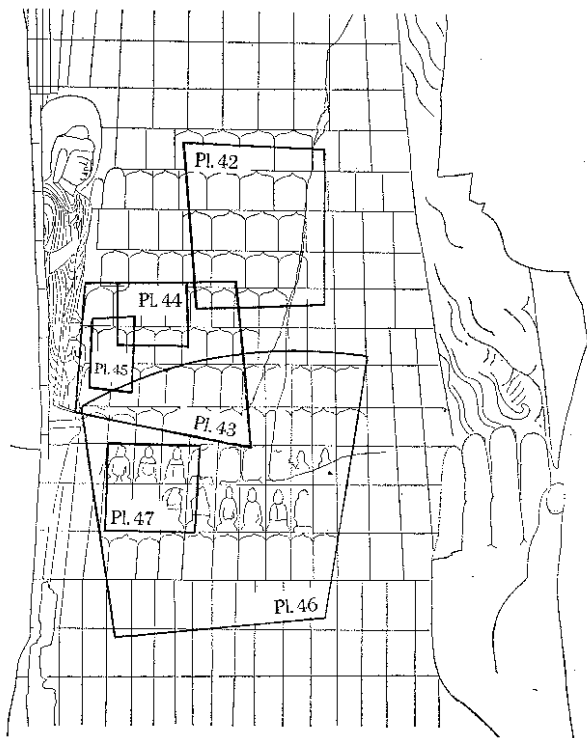


Fig. 21

むかつて左から二つ目と三つ目は、あきらかな一対であつて、これから類推して、だいたいの見當をつけることができる。(Fig. 20, 21) (平均龕高 0.60m)

Pl. 48A. 第十九洞 西壁 下層 浮彫七層塔(1)

B. 第十九洞 西壁 下層 浮彫七層塔(2)

A. 南がはの重層塔である。ひどく風化してゐる。床に接して大きな方座があり、そのうへに七層の屋形塔がたつ。たるき、斗拱もそなはり、隅柱がたつてゐる。第六層には三つのしきりがあり、四體の坐佛が安置されてゐる。第七層も四間らしく、四體の禪定佛のひざがみえる。塔頂方臺の

うへにはうけばな、覆鉢の痕跡があり、三本の刹柱がたつてゐる。この重層塔の左右は、千佛龕を配したが、床にちかづくと、その他の小龕がほられてゐるらしい。

B. 同様の重層塔で、西壁の中央部にある。三本の刹柱、屋形の構造、四間に四佛など、前者とおなじである。ただし、これは第四層もいくらかわかり、倚坐佛を中心にして左右に二體づゝの坐佛のあつたことがわかる。方座の中央には坐佛龕があるが、後期の作とおもはれる。(高 4.60m)

Pl. 49. 第十九洞 北壁 本尊佛坐像

北壁本尊は大佛坐像である。これは門口からみたところである。大佛は、洞内いっばいにほられてをり、膝から門口までは、わづかに 0.80 m の距離しかない。そのため正面ではみあげるばかりで、身體のたゞしいプロポーションはえられない。まる顔で、肩幅ひろく、堂々たる巨像である。大きさにおいては隣接する第二十洞本尊坐佛をはるかにひきはなし、雲岡石窟中最大の佛像である。右手をあげて、胸まへにおき、左手は膝にし掌をうへにむけて衣端をとつてゐる。右手は肘からさきが破損し、いまは腕も、五指も後世修補の泥造である。この腕のさゝへには、てまへに泥壁があり、おくに石彫がみえるが、前者は近世の洞房で、民家の物置であらう。本尊の腹部には水平に、もろい岩層がはしり、大いに損じてゐる。衣制は右肩に衣端がわづかにかゝる偏袒右肩の式で、ごくうすい衣をまとつてゐることがわかる。胸や肩に、點々として小孔があいてゐるのは、後世の修理をものがたるものである。(洞高 7.14m)

Pl. 50. 第十九洞 北壁 本尊佛坐像 上身(東より)

洞内東南隅からみた大佛である。頭部と身體の比例はよくとゞつてゐる。頭も肩も北壁からかなり突出してゐて、まったく丸彫である。顔は正面の幅よりおくゆきが大である。丸顔といつても、おくのふかい造形で、大きな耳はさらにおくまつてほられて、身體もおくゆきがふかい。肩のあつみ、胸、腕のあつみに注意されたい。腋のしたのふかい彫りこみも特色がある。衣文はあさい階段式で、整然たる平行線であらはされてゐる。くはしくみると左肩の一條がもつともたかく、これから左右に、一段づゝさがるやうにひだをつくり、そのひだのまんなかには、一本の刻線をきざんでゐる。左肩のつけねから上衣のゑりがをれかへつてなゝめにさがり、腹のまんなかをとほつてゐる。これには、をりかへつたひだが、ジグザグをゑがいて、おほらかなリズムをかなでゐる。さらにそのうらがはに內衣のゑりがなゝめに

雲岡石窟第十九洞

みえ、うつくしい唐草文の縁飾(Rub. IC)となる。

圓光背は風化してみえず、外縁火焰帯の一部が、天井にみられる。そのうちがはの供養天人帯、坐佛帯は Pl. 61 におぼろげながらみえる。(右手支柱高 1.90m)

Pl. 51. 第十九洞 北壁 本尊佛坐像 上身(西より)

洞内西南隅からみた大佛である。胸から腹にかけての曲線はなだらかで應揚である。右わきは岩がかなりあれてゐるし、右手も指さきは泥造である。右肩にかゝった衣端は、胸まへの衣端のつゞきであり、おなじをりひだのジグザグ文様がみられる。

東壁下層のおくに大破した壁面がみられる。

Pl. 52, 53 第十九洞 北壁 本尊佛坐像 頭部

ちかづくと、大佛の頭部がよくわかる。まる顔で、もとは白色が一面にぬってあったものである。眉梁はきはめてながく、ひいでた鼻は、ほとんど垂直にほつてある。目はみひらき、黒眼は上瞼をこえてきこまれるが、いまはうしなはれてゐる。顎が損じてゐるのはおしい。かつて修理したらしい痕跡がある。しかし、それが體上の小孔とおなじなのは、中古の修理をしめすもので、最初は完全であつたとみとめられる。破損は鼻、額、頬、頭髮部にもみられ、鼻にはかすがひをうってとめてある。このかすがひによる接合は、おそらく、當初のものだとおもふ。偉大な顔であり、目鼻に崇高さとやさしさが、充分にあらはされてゐる。雲岡第一の偉觀であらう。

東壁にのびた本尊光背は、外縁に火焰帯、つゞいて跪坐の供養天人帯と坐佛帯がかすかにみえる。そのうちがはに一帯があるが、坐佛帯か、あるひは頭光の火焰帯か、わかりにくい。西がはよりも、東がはがひろいから、坐佛帯を一帯くはへたのかもしれない。(頭高 4.86m)

Pl. 54. 第十九洞 北壁 本尊佛坐像 顔

ちかくでみあげると、眼がきはめて柔和になる。脣は上脣を波状にやはらかく、しかもやゝ大きくつくり、下脣は單純なひらたい弧状にしてゐる。簡素だが、まったくうつくしい。鼻端と口とのあひだの凹凸は、こまかな變化をすて、おほまかである。めづらしく、鼻孔までつくつてある。顔面にぬった白堊がよくわかる。

Pl. 55, 56. 第十九洞 北壁 本尊佛坐像 胸部

唐草文衣襟

大佛の內衣のあり、こゝには三條の文様帯(Rub. IC)がはしり、そのしたには數條のひだが見える。縁かぎりの第一は連珠文帯である。珠文は中心にまるいものがある。つぎは七葉のパルメットをかさねたものである。七葉のうち左右の第一葉がのびて、それぞれ半パルメットになり、それが抱合して圓圈をつり、その合した先端がつぎの七葉パルメットのもとになるのである。一種の輪つなぎ唐草文である。第三も環つなぎ唐草文である。しかし、これは蔓の輪である。さうして蔓の合したところから半パルメットが二本で、それが輪をつくり、そのなかを三つ葉のパルメットでうつくしく充填してゐる。第二十洞大佛の內衣より、これの方が繊細である。(文様帯總幅 0.45m)

Pl. 57. 第十九洞 北壁 本尊佛坐像 左手

Pl. 58. 第十九洞 北壁 本尊佛坐像 右膝

Pl. 59A, B. 第十九洞 北壁 本尊佛坐像 左手左足

階段狀平行線の衣文が、腹から腿、膝へと、すこしもよどみなくながれる。この大きな膝にあらはれた整然たる衣文は、みるものに壓倒的な印象をあたへる。膝頭のやはらかく、まるい曲面は、第二十洞大佛にみることのできない洗練された表現である。結跏趺坐した右足は、ゆび、その他に損傷はあるが、正確に彫られてゐる。足首に接して、衣のすそが、べつの衣文であらはされてゐるのも、みのがせない。膝においた左手は、第二指と第五指をのばし、掌のうへに衣端を帶狀によこたへ、拇指でおさへてゐる。第三指と第四指は、をれてゐるのでわからないが、うへにあげて多少うかしてゐたものかとおもふ。手首まですっかりかゝつてゐる衣は、やはり階段狀の平行線のひだをくりかへし、腕の立體をいきいきとさせてゐる。

Pl. 60A, B. 第十九洞 北壁 本尊佛坐像 支柱

A. 北壁本尊の右手は、破損してゐるので、右肘したに支柱をおいてゐる。やゝ扁平の柱で、二面に彫刻がある。西面(Rub. IA)には上中下三龕がならび、うへとしたとは坐佛三尊の尖拱龕であり、なかは交脚菩薩三尊の楣拱龕である。上龕は拱額部が破損し、また裂罅がある。坐佛はもかけ座の形式である。したの寶壇には銘匾をはさんで三體づゝの供養者がゐる。中龕はうへに天蓋形と帳幕がある。楣拱額は、ちょうど第十五A洞北壁下層龕にみたごとく、をりたゝんだ間どりをしめし、七佛がある。交脚菩薩の足下に地神があり蓮華から上身をあらはし、菩薩の足をさゝへてゐる。下龕の尖拱形は、半パルメットC字形つなぎで、中央に五瓣

のパルメットをほる。寶壇は破損するが、右端に獅子がある。中龕と下龕は、もとより、一組の佛龕である。三龕いづれも北魏末期の様式で、そのころ本尊右手の支柱にしたものとおもはれる。

B. 支柱の南面(Rub. IB)である。上中下三龕からなるが西面とは間のとりかたがちがふ。上龕は楣拱形交脚菩薩三尊である。中龕は尖拱形坐佛三尊で、一組になる。下龕は天盖形坐佛三尊である。いづれも未完成で、したにむかふほど未完成の程度が大きい。したがって、この三龕が、たとへ二組三龕であるにしても、一氣につくられつゝあったことをしめしてゐる。上龕は拱額のみほられず、中龕は拱額と寶座、および寶壇供養者が輪廓しかほられず、下龕は全部が輪廓にとどまってゐる。いづれにせよ、北魏末期の様式であることは西面とおなじである。(支柱高 1.90m)

Pl. 61. 第十九洞 西壁 本尊佛坐像 光背 西部

むかつて右端に北壁本尊の右肩がみえる。そのうへに本尊の光背がある。まづ外縁の火焰がまっすぐにうへにあがつてゐる。つぎに、高髻供養者の跪坐すがたがみえ、坐佛の列像がある。これらは舉身光の一部であらう。頭光の部分はほとんどあきらかにしがたい。光背の西は西壁の千佛龕

である。北壁にうつるほど、風化のはなはだしいのは、石窟の通例である。

Pl. 62. 第十九洞 北壁 西下部

北壁大佛の右肘の補修のもやうがよくわかる。肘のしたの支柱と肘のおくとのあひだに泥壁がぬつてゐる。そのしたに、方臺がある。これは右膝の、まるい部分につづいたもので、なにを意味するか不明である。この方臺に坐佛小龕が二つほつてゐる。北壁の西部、床に接して三つの佛龕がならぶ。東龕は坐佛龕だが、ほとんど全壊してをり、中龕は坐佛の三尊で、左右の廂には、べつに佛の立像がある。西龕は二佛並坐の像で、拱額はきえてゐるが、尖拱形は察せられる。第六洞式の衣文である。顔は摩滅し、寶壇にあさい供養者の像がならんでゐる。(右手支柱高 1.90m)

Pl. 63. 第十九洞 天井

天井は、橢圓形で平面にちかい。南がはに明窓がみえ、北がはに大佛の頭部がみえる。本尊の光背の火焰帯が天井のなかばまでのびてゐるのがわかる。そのほかの部分はまったく剥落して、いまなんの彫刻もみとめられない。(東西長約 10.70m)

第十九 A 洞

Pl. 64. 第十九A洞 外壁

洞外には瓦礫の堆積がある。この堆積よりもうへの方に門口をひらいてゐる。それは南面しないで、西南面にむかつてゐる。アアチ形であるが、拱額のやうなものはない。外壁は、たゞ一様に千佛小龕ばかりである。明窓は門口より大きく、アアチ形である。窓のまはりは、おなじ幅でふちとりがしてあり、こゝにも、一面に小千佛龕をほどこしてゐる。その他は風化と崩壊がはなはだしい。梁穴もみえず柱穴もない。たゞ三角形の、棟とおぼしきあたりに、傾斜したみぞをみるのみである。丘上の石づみも、この外壁が、西南面してゐるだけに突出し、自然石づみのしただが、傾斜してあらはれることになり、いくらか脆弱でもあったのか、かなりにいたんでゐる。(明窓高 3.45m)

Pl. 65A. 第十九A洞 門口 左側

B. 第十九A洞 門口 右側

小さい洞口で、天井には、なにも彫つてゐない。左側に相

似た大小二つの佛龕、右側に一つの佛龕があり、その他は小千佛龕でうめられる。なにもかはったところはないが、これらの佛龕は、たがひによく似てゐること、しかも複雑にして緊密な、マンダラ mandala 的構成をもつことが注意される。第十八洞門口東側の佛龕(本書、第十二卷、Pl. 77)とおなじ形式である。大龜裂はあるが、表面は風化がすくない。

左右側上部に、長方形のうけ穴の見えるのは、たぶん楣をいれ、扉をつくつたためであらう。おそらく、これも中古の加工とおもふ。(門口高 3.20m)

Pl. 66. 第十九A洞 門口 左側 諸龕 (1, 2)

大きい方の龕(1)は、左端がかけてゐるが、シムメトリックな構成ゆゑ、全體のもやう(Rub. IIA)は容易に察せられる。うへに天盖があり、七佛列龕があり、したに銘匾と供養者像をもつた基壇がある。なかは上下二龕にわかれ、うへは楣拱龕で交脚菩薩、左右の廂には半跏思惟像があり、そのまたそとには佛の倚坐像がある。たゞかはつてゐるのは楣

雲岡石窟第十九洞

拱に瓔珞のかざりのあること、交脚菩薩の左右に獅子がゐらず、胡跪合掌の供養者がゐることである。楣拱のうへ左右には、すらりとした合掌供養者がゐる。僧形と天人形であり、線刻のまるい頭光が目だつ。したは尖拱龕の坐佛で、左右龕外に丈たかい合掌供養者がゐる。臺座は五成の須彌座で、しかも左右に獅子がゐる。なほ左右兩端にほそながい區劃があつて上下にわかれ、うへに坐佛、したに立佛をいれてゐる。よくみると、右がは下方の立佛は足下に頭髮をしいた儒童 māṇava があり、定光佛 Dīpaṃkara であることがわかる。定光佛は、こまかいひだをもった僧衣が大きく、刻線の二重光がふっくらして、かへって堂々たるおもむきをそなへてゐる。基壇の供養者たち、右の四人と左の一人がのこつてゐるが、みな僧形であるらしい。すらりとたく、頭は小さく、胴以下がながい。しかし、刻線の衣文は簡明で、きびきびしてゐるし、ま正面むきの兩足に對し、中央にむかふ頭部は生き生きとしたうごきを感じしめる。みな長身瘦軀の式で、第五洞外小窟の造像を想起せしめる。

小さい方の龕(2)は、尊像の顔をのぞけば、ともかく完存してゐる。天蓋と七佛の列龕、銘匾と供養者像の基壇、それに、交脚楣拱龕と坐佛尖拱龕のくみあはせは、まったく前者におなじである。たゞ、この方がせまいため、兩端の倚坐、趺坐、佇立の三佛がゐない。そのうへ下龕に七佛列龕の一层をくはへてゐる。交脚の左右廂が半跏像でなく、立像であること、足下の供養者が胡跪でなく、長跪の姿勢をとること、楣拱が瓔珞でかざらず、飛天をいれた框であること、かぞへたてると、いくらもちがひはあるが、様式のちがひもみのがせない。だいたいが、相似た龕であることは、もとよりであるが、諸像をくらべると、この方がよりほそいし、衣文をくらべると、この方がより繊細、より複雑である。この佛龕の方が、あとから彫られたことはうたがひをいれない。基壇の供養者たちは胡服のすがたで、右は女性四體、左は男性三體に、少年一體である。彫りはあさく、扁平の畫像である。このうへの合掌供養の脇侍は高髻、頭光をもった天人形であるが、おなじく合掌の童形をともなつてゐるのが、注意をひく。(第1龕高1.53m、第2龕高1.20m)

Pl. 67. 第十九A洞 門口 右側 佛龕(3)

この佛龕の構成は、完全に左側の佛龕(1)とおなじである(Rub. II B)。たゞ、様式はより繊細で、その點は佛龕(2)にちかいといふより、一步すゝんでゐる。もって、つくられた時期を察すべきであらう。そのためか、基壇の供養者列像も、北方服でなく、中國ふうの衣冠である。男女の區別がよ

くわからない。みな、男子なのであらうか。銘匾なく、博山爐をなかにして、まんなかの二人は僧形である。この方が、すこし幅のひろいためか、左右中段の坐佛には、胡跪の供養者がそへてゐる。うちがは、したの立佛は、同様に定光佛 Dīpaṃkara Buddha だが、そとがは、したの立佛もすこしのこり、童子のむらがるアśoka 王因縁だといふことがわかる。これも第五洞外小窟にみるところである。左側の破壊とことかはり、この上龕の三尊と下龕の脇侍が、その優美な顔貌をほどとどめてゐることはよろこばしい。(龕高1.96m)

Pl. 68A. 第十九A洞 明窓 左側

B. 第十九A洞 明窓 右側

明窓は、門口より大きいけれども、まはりにきりこみがあるので、側壁の幅はせまくなつてゐる。左右側壁は、そのまはりのきりこみから、外壁にかけて、すっかり小千佛龕でおほはれてゐる。天井には、なにも彫らなかつたらしい。平面にとゞのへた鑿あとがのこつてゐる。いま全面にわたり、かなりの破損があり、右壁上下三カ所に、横木をはめた矩形の穴がある。中古以來、明障子をはめたなごりであらう。(明窓高3.45m)

Pl. 69. 第十九A洞 前壁 上半

Pl. 70. 第十九A洞 前壁 下半

この二枚の寫眞によって、ほゞ南壁の大綱がわかるであらう。門口上にも大破損があり、天井にも大龜裂があつて、なかなかあぶなげなやうすである。佛龕の配置はいたつて不規則であり、本尊は、かやうに前壁にせまつてゐるのを注意されたい。(明窓高3.45m、門口高3.20m)

Pl. 71A. 第十九A洞 前壁 上部 左半

B. 第十九A洞 前壁 上部 右半

Pl. 72A. 第十九A洞 前壁 下部 左半

B. 第十九A洞 前壁 下部 右半

これで門口上をのぞいて、いちおう全壁の配置がわかる。まづ最上は、第七、第八洞のごとく(本書、【第四卷、Pl. 91、第五卷、Pl. 84】)なげしにあたる框ぐみがあり、それから三角垂飾があり、また弧狀にたぐつた帷幕がある。つまり、天蓋にあたるものである。それから三層の坐佛列像があつて、これは左右壁にまはつてゐる。それは合手形の坐佛、すなはち禪定佛 dhyāna Buddha で、おなじく千佛をあらはしてゐるとおもふが、こゝには龕がない。わりに大きく0.40mから0.45

m, 大小まちまちである。あさい彫りであるが、顔は大きく、體軀もむっくりして、粗雑なやうで、力にあふれてゐる。

左方は、これより以下佛龕がならぶが、右方は、この種の千佛が、なほ四段ばかりある。最下の一體は、そのまはりを、すっかり外壁とおなじ小千佛龕でかこまれてゐる。これは、まづ無龕の千佛があり、あとから小千佛龕の彫られていった経路をしめすものである。これとおなじやうな無龕の坐佛は、なほこの下方に、二體(18, 28)ばかりみられるが、さうかといつて、この千佛列像が、南壁全面をおほふてゐたともおもへない。たとへば右したの尖拱坐佛龕(14)のしたはかなり空所があるが、けつして、さういふ千佛の彫られてゐたといふ形跡はない。また右うへの佛龕(5, 6)わきの千佛も、やはりこれらの佛龕がつくられてのち、この空所のひろさをにらんで、彫りたしたものやうである。

とにかく、この壁面には、大小二十六の佛龕が彫られてゐるが、その間になんの秩序もみとめられない。様式からいへば、みな初期の佛龕で、そのなかには未完成のものも、かなりある。たとへば門口のうへ(9)とか、最底部(20, 21, 29)とかである。また、これらの佛龕のあひだには、小千佛龕をうめてゐるが、なほ若干のこつたところがある。それは一部分、岩の脆弱なためでもあらうが、か、ならずしも、そのみではないらしい。岩質もよくて、小千佛龕の彫られてゐないばしょもかなりある。(明窓高 3.45m, 門口高 3.20m)

Pl. 73. 第十九A洞 前壁 中央部

こゝには明窓と門口とのあひだがしめされてゐる。それは、雲岡石窟の通例で、やゝふくれてゐる。あらけづりの壁面を一部にのこしながら、三つの佛龕が彫られ、また小千佛龕が彫られてゐる。そのうち、むかつて左の大龕(9)は二佛並坐の龕。これは未完成で、本尊二體はあらぼりのまゝ。龕形も右端の獸頭はみえるが、あまり完備してゐなかつたらしい。いま、このうへに彫られてゐる小千佛龕のすきまをみても、壁面は粗雑で、なにもみえない。それにしても、このあらけづりの二佛は、がっちりとした體格をして、堂々としてゐる。初期の作であることはあきらかであるが、なぜに未完成にすてられたかは判明しない。

つぎの中央には、坐佛の佛龕(10)があるが、これも未完成である。かすかに尖拱龕かと推察されるが、これも完成してゐないのであらう。

右方は二佛並坐の龕(11)である。これは、いちおう、完成したものとおもはれるが、石の面は、わりに粗雑である。せまい尖拱額があり、あさい浮彫の合掌供養者があり、まはり

をとりまいてゐるらしい。いまは、上下とも小千佛龕の追刻で破壊されてゐる。その彫像の様式は右方中層の佛龕(12)に似るが、本尊はやゝまるみがすくない。初期は初期であるが、佛龕(12)よりも、あとのものとおもふ。

この佛龕(11)のしたに、彫りかけの小千佛龕がある。むかつて右端一は龕形をつくり、坐佛の輪廓を線彫りしてゐる。つぎは、たゞ龕形だけ線刻し、あとの四個は、拱額の弧線だけを連續して彫つてゐる。これも彫刻のプロセスを知るうへに參考になる。この部分の中央に、いま大きな缺損がある。

Pl. 74. 第十九A洞 前壁 左中部 二佛並坐龕(7)

二佛並坐の龕である。尖拱額は坐佛列もなく、飛天列もない(Rub. III B)。たゞ素地である。外廓にそうて刻線が一本あり、拱梁はほそい。拱端は反轉した虎頭で、簾几のやうな柱頭にのつてゐる。四脚の牀座があり、そのしたげには波頭狀の彫りがみえる。さうして、そのなかに供養者たちの浮彫(Pl. 75)がみえる。

傍柱のそとの、ごくせまい區間には、あさい供養者たちを彫り、拱額のうへにおよんでゐる。最下は、簾几に腰をおろした合掌の比丘である。左方のは、不幸にも、のちの小千佛龕が侵入してきて、けづりとられてゐる。そのうへは、高髻瘦身のバラモン brāhmaṇa (婆羅門)である。それぞれ、なにかを手にしてさしだしてゐる。たぶん第九洞明窓(本書、第六卷, Pl. 46), 第十二洞前室上部(本書、第十一卷, Pl. 40)の例のごとく、右は鳥、左は鬬饅であらう。右の方はやゝ鳥らしくみえてゐる。それからうへは、みな、高髻の跪坐供養者である。たゞ、まんなかの一對だけは、剃髮の僧形である。これら供養者たちのうへは、弧狀にしばった帷幕である。むすび目にさがつてゐるのは鈴であらうか。そのうへに、さらにせまい一帯があつて、左右から飛天がとんでゐる。身體をくの字にそらせ、兩手になにか奉じてゐる。

本尊は、ひじゃうにまるい顔である。第十九東脇洞特有の顔である。ひたひが大きく、頬と頤が大きい。眉、目、口、鼻は、やゝ中央にあつまる。いづれも明晰な稜線でふちどられてゐる。頭は髮容をしめさず、耳は長大である。一面に白色をぬつたらしく、腫はいま墨を點じてゐる。左手は足のうへにおいて衣端をとり、右手は胸にあげてゐる。大衣は左肩から右脇をとほり、右肩におよんでゐる。そして胸には、左肩からさがる內衣のゑりがみえてゐる。衣文は、階段狀のひだよりなり、衣端のふちには、をれかへりをジグザグの刻線であらはしてゐる。服裝の點は、ほゞ本尊とお

雲岡石窟第十九洞

なじである。この二佛は、やゝ胴をながくあらはしてゐるが、そのがっちりした體格とヴォリュームのある頭部とは、こまごまとした龕形を背景に、つよくうかびあがってゐる。(龕高 1.32m)

Pl. 75. 第十九A洞 前壁 左中部 二佛並坐龕(7)寶壇

いまは、追刻の小千佛龕によって、多少破壊されてゐるが、四脚式の牀座である。寶座のしたばにそうて、波頭状のかざりがあること、前述のごとくである。供養者たちは左右に六體づゝならび、博山爐を中心にして左右の四體は僧である。そのうち、むかつて右の僧侶は、手をあげて香を投じてゐるごとくである。むかつて左の僧侶二體には僧衣のうへに田相がみとめられる。博山爐のしたには、よくみるごとく、兩手でさゝげた侏儒がゐる。

僧形のあとには、むかつて右に男子の列、左に女子の列がある。いずれも、北方の服装である。窄袖の外衣。したには男子は袴子、女子は下裳をまとい、たぶん長靴をはいてゐるのであらう。頭巾は男女ともに、うしろにたれがあるが、女子の頭巾は、前後二つの山にわかれてゐる。みな一様に、手をあはせてゐるが、合掌といふより、なにかを捧じてゐるごとくである。彫刻は簡單であるが、表情があり、うごきがあり、生き生きとしてゐる。

このした一列に七佛の列龕(8)がある。うへの二佛並坐龕(7)に關係がないとすると、獨立した七佛龕であるらしい。鑿あとの歴々とみえる佛龕で、その簡明な形式は、つよい印象をあたへる。胸をはった堂々たる佛で、頭部は、いたって小さい。ほとんど、顔貌をかくが、一二の存するものについてみれば、この上下の佛龕(7, 15)よりはほそく、どちらよりも、あとからつくられたものであらう。もし、ちかいのをもとめれば、最下の諸龕(16-25)において、みいだされたとおもふ。(寶壇高 0.22m)

Pl. 76. 第十九A洞 前壁 左下部 交脚菩薩龕(15)

交脚菩薩の龕であるが、本尊に比して、拱額も牀座も粗略である(Rub. IIIA)。弧状の帷幕も、ひじゃうに略されてゐるし、楣拱框内の蓮上化生も飛天も、型ばかりである。ほそい榜柱のうへは、V字形にのびた柱頭飾があり、そのうちがはは階段状につくられ、なかに化生があらはされる。左右龕傍にたつ脇侍も、型ばかりに略されてゐるが、手に水瓶をもつてゐる。足下に侏儒をおいたのは、ほそだかい龕傍を、うめるためであらう。右方の、脇侍のしたは、まだ土の壁でおほはれてゐる。

牀座のしたは、侏儒のうけた博山爐、左右にそれぞれ三體づゝの男女像がある。これも北方の胡服であるが、腕は拱手してゐるらしい。

本尊は、實に威嚴のある顔をしてゐる。額は大きく、頬、頤が大きい。この洞特有の顔つきである。眉はながく、目はほそく、鼻と口があざやかである。頭髮を刻線であらはし、寶冠をいたゞく。三種の胸かざり、それから腕輪、手は胸でかさねてゐるのがめづらしい。第十卷 Fig. 4 (37-40)にあげた以外の形式である。膝はつよくはって、足さきをたてゝゐる。下裳は、つよい平行線のひだをつくりながら、膝をおほつてゐる。

龕内左右の脇侍は、半跏思惟像である。簾几に坐し、頬に手をあてゝゐる。わりに簡略な形像であるが、まるく立體的である。本尊とのあひだに、うづくまった獅子があるが、これも、ぜんたいの形だけで、細部の彫刻は略されてゐる。(龕高 1.13m)

Pl. 77A. 第十九A洞 前壁 左下部 諸龕(16-19)

B. 第十九A洞 前壁 左下部 諸龕(20-25)

A. こゝには四つの佛龕がみえてゐる。うへの二龕(16, 17)は、たがひによく似てゐる。ほかの坐佛は、いちおう完成したらしいが、むかつて左方(16)は、ひざのあたりの衣文がなく、やはり未完成かとおもはれる。ひくい尖拱龕、拱端の獸頭、まはりの供養者たちも、粗略な形象で未完成らしい。したには牀座があつたらしいが、いま、追刻の小千佛龕に、とつてかはられてゐる。

したの二龕(18, 19)も、ひくい尖拱額といふ點では、共通である。しかし、こゝには拱端の獸頭がない。むかつて左方(18)は、左右に脇侍をもつた三尊坐佛であるが、衣文は彫つてなく、未完成のやうである。顔面は、すこしこはれてゐるが、表情がある。右方(19)は、顔面に破損はあるが、ひじやうによくともつて、こまかい平行線の衣文がうつくしい。臺座の香爐と供養者四體が、わづかにのこつてゐるが、もとは四脚式の牀座があつたのである。

B. この二佛並坐龕(20)は未完成である。顔面だけはしあげられたかにみえるが、最後のしあげまでいつてゐるか、どうかは、あやしい。拱端の獸頭も、左だけしか用意してゐない。拱額もなく、うへに十體の坐佛がならんでゐる。それは様式的に、この佛龕の本尊とつりあはない。小千佛龕像とおなじであるから、あとからの追刻である。あるひは、はじめに七佛だけは、なにかその核がつくつてあつたかも知れない。

そのしたの佛龕(21)は、尖拱の坐佛龕で、左方の諸龕(16-19)と同類であるが、拱額の兩わきに、合掌の化生を彫っているのはめづらしい。このよこの上下の二龕(22, 23)はほぼ同形で、たゞの尖拱坐佛龕である。以上の諸龕よりは、いくらかおくれてゐるであらう。

それから最底部に小さい坐佛尖拱龕(24)がある。未完成であるが、その拱額のかたちから、この壁では最後のものとおもはれる。このよこに、めづらしく半跏思惟像の龕(25)がある。尖拱龕であるが、本尊は小さくもあり、こはれてゐるので、よくわからない。

Pl. 78. 第十九A洞 前壁 右中部 二佛並坐龕(12)

左方の二佛並坐龕(7)に對應するやうに、つくられたのかも知れない。ひじょうによく似てゐる。最上の飛天帶といひ、弧狀の帷幕といひ、まはりの浮彫合掌供養者群といひ、拱額に拱端、すべてにわたって一致してゐる(Rub. IVA)。たゞ、この方がいくらか粗略なだけである。しかし、うへの飛天と帷幕との彫法が鮮鋭で、配列のリズミカルなのは注意をひく。最下は、たった比丘形で、寶壇のないのは、のち小千佛龕のために破壊されたからであらう。

内部の二佛も、左方の佛龕(7)によく似てゐる。たゞこの方が、いくらか粗略で、量感にとぼしい。よくみると、佛龕(11)よりすこしたかいので、この方がはやくできたものとおもはれる。また、そのしたの小千佛龕の刻線が、この龕の供養者の一部にかいてゐるのをみると、その前後関係がよくわかるであらう。むかつて右下にある無龕の坐佛(13)は、未完成なのか、顔面もうらうとしてゐるが、形式からいへば、うへの坐佛列像と同類である。それがなぜこゝに彫られたか、あるひは、こゝにも坐佛列をつくるつもりであったのかかわからない。まはりの小千佛龕はもとよりのちの追刻である。そのときに、なほ、このうへに無龕の坐像があったらうかどうか。それは、たゞ、想像のほかないが、なほしたに、おなじやうな無龕の坐佛(28)が、孤立して、小千佛龕にとりまかれてゐるのをみると、すでにあった坐佛列像をこはして、小千佛龕をつくったとはおもへない。たぶん、この無龕の坐佛は、いまある程度にしか彫られなかったもの、そのうちに、他の諸龕が、しだいに壁面をおほふにいたったものと、かういふふうには解釋される。

Pl. 79. 第十九A洞 前壁 右下部 交脚菩薩龕(26)

これも左方の交脚菩薩龕(15)に對應してつくったやうに見える。大きさも、位置も、作風もかなりちがふけれども、

この石窟内における對應は、この程度のものであるらしい。楣拱額も、兩翼の彎曲した式であるが、上下に框があるのみで、たてのしきりはない。したに、ちやうど帷幕にあたる部分が彫りのこされてゐるが、弧狀のつくりだしはない。その點、この龕の未完成なのを、ものがたつてゐるやうにおもふ。寶壇は四脚の牀座式、供養者の列像が、粗略に彫つてゐる。左右龕傍の脇侍は、左方の交脚菩薩龕(15)とすっかりちがひ、鮮鋭な、あさい彫りの彫像である。その點、つぎの龕(27)と共通である。

この龕の本尊も、つぎの坐佛龕(27)によく似てゐる。まんまるい顔で、眉口がみじかい鼻のまはりに凝集し、ひろい額、大きな頬、ふかい頤をのこしてゐる。寶冠はいたつて簡素であるが、胸かざりも板狀のものだけ、左右の腕釧はない。彫りわすれたのか、未完成なのか、この點疑問である。手は胸まへでかさね、天衣はひちにかゝり、下裳はつよい曲線で兩足をおほつてゐるが、全體に鑿あとがいちじるしく、その點からも、未完成の印象をうける。左右の半跏脇侍、足下の獅子、それに龕も鑿あとをのこし、しあげがない。しかし、諸像はヴォリュームがあり、體格もゆたかで、どっしりと威嚴がある。

いま楣拱の左右、寶壇の左右には、小千佛龕がくひこんでゐる。小千佛龕も、一龕に二體おさめたものが二三あり、また數體がならんで、とくに龕形のみえぬものもある。

Pl. 80. 第十九A洞 前壁 右下部 坐佛龕(27)

この龕は、小さいが、ひじょうによくとのつてゐる。ことに本尊がさうである。すこし目のつりあがつたところに特色がある。鼻はみじかく、額が大きい。肩がはり、手も大きく、堂々たる坐像である。衣文は、あさい階段狀のひだである。完好な素文の尖拱額、牀座式の臺座に、あさく供養者たちを彫り、牀脚のしたには、侏儒と簾几を彫る。これらはみな粗略であるが、左右龕傍の脇侍は精緻である。右脇侍は、むかつて左方の交脚龕(26)の脇侍とおなじく、鮮鋭なあさい彫像であるが、左脇侍はやゝたかい浮彫で、顔もうつくしい。まるい蓮華のうへにたち、合掌してゐる。

この龕(27)の、むかつて右うへに、無龕の坐佛(28)が一體ある。これはさきにもいったごとく(Pl. 78)、坐佛列像の一體で、たゞあとの造營がつづかず、弧立したものとおもふ。

Pl. 81A. 第十九A洞 前壁 右下部 諸龕(26, 27) 脇侍

B. 第十九A洞 前壁 右下部 坐佛龕(27) 左脇侍

A. この脇侍は丈だかいところに特色がある。どちらも

雲岡石窟第十九洞

合掌して、本尊の方をむいてゐる。肩に大きな肩布をかけ、それが下裳の衣文と合一してうつくしい。

B. これは、ふっくりとした肉彫りで、合掌してゐる。顔はまるく、柔和で、しかも威厳がある。

Pl. 82. 第十九A洞 前壁 右下部 諸龕(29-32)

右方最低部である。まんなかの坐佛龕(30)がいちばんととのつてゐる。よくととのつてゐるが、うへの佛龕(27)にくらべると、はるかにきゃしゃになつてゐる。時期のおくれてゐることは、いふまでもない。おしいことに、いま顔面をうしなつてゐる。しかし形式はよく似て、ほとんど、おなじである。素文の尖拱額、拱端と柱頭も、かざりがな。たゞ左右と上部にかけて、六段の坐佛列像をならべ、最上層に弧状の帷幕をつくる。

このよこ、門口わきの佛龕(29)は、禪定の坐佛であるが、前者(30)によく似てゐる。拱額のうへにも六佛の列像がある。たゞふしぎなのは、あら彫りのまゝで未完成な點である。うへの龕(29)が、未完成であるにかゝはらず、このしたの坐佛龕(31)は、簡略ではあるが、いちおう完成してゐるらしい。形式は、まったくよく似てゐる。

以上三龕の形式的一致に對し、つぎの佛龕(32)は、まったくちがふ。ととのつた寶壇と尖拱額の佛龕で、諸像は第六洞式の服裝をする。この石窟、最末期の追刻龕であることはいふまでもないが、それでも、わきの小千佛龕をみると、この龕を考慮して彫つた形跡があり、小千佛龕より以前の作であることがわかる。むかつて右の方には、あらけづりの壁面がのこり、つゞいて右壁脇侍の臺座がみえる。

Pl. 83. 第十九A洞 左壁 上半

Pl. 84. 第十九A洞 左壁 下半

左壁には、左脇侍が大きくたつてゐる。左脇侍のうへは、五段の坐佛列像があり、わきには、四段の坐佛列像がある。それよりしたは小千佛龕で、そのあひだに、若干の佛龕がある。いったい、南壁とのさかひは、ほど直角であきらかであるが、後壁とのさかひは、まったくない。たゞ本尊の光背をもって後壁とすること、第十七、第十八、第十九洞の例のごとくである。こゝでは後壁光背のしたも左壁から連続して區別がないので、便宜上左壁として説明することにする。

坐佛列像は、最上で弧状にしぼつた帷幕に接する。そのうへは三角垂飾になり、なげしになり、その點完全に前壁におなじである。

帷幕は、平行の弧線が密にはいつてゐるので異常である。

坐佛列像は、うへ六段二十七體が、ことごとく通肩であるのがめづらしい。列像の一部は、本尊光背に接して、尖拱の三尊坐像龕が二つ(33, 34)彫つてある。佛像の様式は、完全に一致してゐるから、同時の作であることはいふまでもない。(左壁高 8.50m)

Pl. 85. 第十九A洞 左壁 左脇侍菩薩

この脇侍は、たかさ 4.52m、頭の大きい、肩のまるい、足の大きな像である。身體は扁平な、あさい彫像であるが、頭は充分に突出して、まるい。顔面はおしいことに、崩落してゐるが、斷石はいま京都の藤井有隣館(Fig. 11)にある。前面は破損してゐるが、みごとな三面寶冠(Rub. IVB)である。圓板と圓板とのあひだの唐草かざりがうつくしい。背後に三角巾がさがり、耳朶に耳かざりがつく。胸には胸かざりがつき、腕には腕釧がある。右肩から幅のひろい肩巾がさがり、右腰をつゝみ、下裳は兩脚にそうて垂下し、すそは波状に彎曲してゐる。衣文は、すその曲線に似て、重厚な彎曲をしめすが、もとより肉體に密着してゐるのである。天衣は大きく肩にまはり、腋にかゝつてゐる。そのはしはどうなつたのか、いまの壁面にはみえない。右手は胸にあげるが、扁平な彫りなので、すこしきゅうくつさうである。左手は水瓶をもたせたとおもふが、しあげられなかつたのか、あいまいなかたちである。足はぶつきらぼうに角ばり、臺座(Pl. 84)はあらぼりのまゝで、連座でもなんでもなし。光背の左に、大きな穴のあいてゐることは、前述のとほりであるが、左手のわきにも穴があいてゐる。(像高 4.52m)

Pl. 86A. 第十九A洞 左壁 左脇侍菩薩 頭部

B. 第十九A洞 左壁 左脇侍菩薩 上身

A. こゝには、ほど光背の全形がみとめられる。たゞまるい頭光に、圓拱形のおほひがある。さうして、その圓拱形のおほひのうへに、なにかとがつた尖頂をつけてゐる。光背には、なんの彫文もなく、いまは墨で火焰と雲との文様がある。火焰の方は、その時代的特徴をつかみえないが、靈芝雲の形は、ほど遼代のものとみてよいやうにおもふ。

光背のうへに、五人の合掌跪坐の供養者を彫つてゐるが、いかにもうごきのある姿態である。(頭高約 1.00m)

B. こゝには、うつくしい右手がみえ、指さきに蓮の蕾をつまんでゐる。頸かざりもあざやかで、まづ平板の頸かざり、これからはまるい鈴と小鐸とがかゝつてゐる。それから玉をつらねた頸かざりが、右の肩からさがつてゐる。左肩の肩布は、重厚なひだをつくりながら、胸から腹にさがつてゐる。

る。それに上膊の腕輪、手くびの腕輪もみえ、肩には頭髮の一部がたれさがっている。

Pl. 87. 第十九A洞 左壁 中部 諸龕(35, 36)

左脇侍の腕のわきである。うへの坐佛列像は九段で、左脇侍の肩までとしたが、最下の一行は形式もやゝちがひ、べつの二佛並坐龕かも知れない。うへの諸像とくらべると、顔がまんまるく、刻線の內衣のゑりが目だつ。たぶん、べつの工人の彫るところであつたらう。ただし、これには佛龕のかざりはない。

交脚菩薩龕(35)は未完成である。楣拱は帷幕の部分をした、上下に二本の刻線をほどこしたばかりのところ、本尊の顔は彫りあがつて完了してゐる。その顔貌は左うへの二佛によく似、同一人の手になることがあきらかである。胸以下はあらぼりのまゝで未完成。それでも脚をまじへたところ、手をかさねたところはあきらかであるが、脇侍と獅子にいたつては、まだ岩のかたまりである。そのうち右の脇侍は、からうじて半跏思惟像だといふことがわかる。龕底も、もちろん、あらぼりのまゝである。

二佛並坐の龕(36)は小千佛龕にかこまれてゐる。さうして、これよりしたは岩層のわるいためか、なにも彫ってゐない。この佛龕の本尊は前壁でいへば、坐佛尖拱龕(30)にちかい。初期の形式ではあるが、いくらか、ほっそりしてゐるのである。かんたんな四脚式の牀座、それに獸形の拱端と簾几の柱頭は、前壁二佛並坐龕(7, 12)に似るが、この獸形は前脚があらはされてゐる。うへに弧形の帷幕があり、まはりに粗略な彫刻の供養天がある。たゞ左の脇侍像はあさい彫りである。しかし鮮鋭な彫像であるところが、前壁佛龕(26, 27)に似てゐる。(第35龕高0.81m, 第36龕高0.84m)

Pl. 88. 第十九A洞 左壁 中部 千佛

これは本尊光背と左脇侍とのあひだである。うへから第八と第九の坐佛列である。本尊の佛倚像、脇侍の菩薩立像に對し、洞内上部をうめた千佛で、もとより本洞根本の諸像である。たかさ約0.40m乃至0.45mで、かなり不同がある。やゝなが手の顔と身體、それが莊重な、威嚴のある均衡をたもつてゐる。最高表面が一致するあさい彫りで、胸、肩のところがたかく、膝のたかさも、これとひとしくたかい。それに、膝のやゝたちあがつたかたちが、この八體の一般的特徴である。しかし、よくみると、むかつて左うへの三體と右うへの一體、したの一行四體とが、それぞれ一群となり、特徴を異にしてゐる。まづ、かんたんなところをいへば、左

うへは內衣のゑりが刻線であらはされ、右うへは衣文がなく、した一行は內衣のゑりだけがない。また、左うへは膝の衣文がみな釣鉤状だが、右うへは衣文なく、した一行は、むかつて右端のみ、ちょっと例外であるが、あとはU字型である。しかし、このちがひを決定的にするものは面貌である。左うへは、大小はあるが、やゝほそ手、眉目はやゝ水平、鼻梁のいたづきがせまい。右うへはほどこれに似てゐる。した一行は、やゝひらたく、とくにしもぶくれで、眉目がつりあがつてゐる。とにかく、した一行四體の面貌は特徴があり、その同一人の手になることはうたがひがたい。ちやうど一人がうけもつて、しごとのできるやうな幅であるから、こゝに一人で一行四體を彫つたといふことは興味がある。したがつて、うへ一行四體も、またちがつた別人によつてつくられたことが知られる。この二段はひじょうによく似て一群をなし、うへの千佛列像とはすっかりちがふのであるが、このまた二段が相互に相違して、別人の手になることがわかるのは興味がふかい。

いま、墨でかいた圓光があるが、これは光背の文様とおなじく、中古の補彩であらう。いま、このあたりは黒く、またいくらか朱色をおびてゐる。さうして彩色は、おそらく石の風化をふせぐには役だつてゐるものとおもふ。(左下像高0.48m)

Pl. 89. 第十九A洞 左壁 下部 諸龕(36—39)

こゝは一面に小千佛龕がある。中央に一すぢ佛龕のないのは石質がわるいからである。そのうへに小さい穴があいてゐて、第十八洞(本書、第十二卷、Pl. 110)に通じてゐる。これをみると、石窟と石窟とのあひだが、いかに接近してゐるかといふことがわかる。接近といふより、このばあひ、實はかさなつてゐるのである。たゞたかさがちがふために、かういふことも可能(Plan I)なのである。

小千佛龕のなかにある佛龕は、うへに二佛並坐の尖拱龕(36)がある。それから、むしろ後壁にまはつて、本尊光背のしたに、二つの坐佛龕(37, 38)と、一つの交脚菩薩龕(39)がある。この三龕は、たがひによく似てゐて、ほど同時期につくられたものとおもふ。(第38龕高0.98m)

Pl. 90. 第十九A洞 左壁 下部 諸龕(38, 39)

本尊光背のした、最底部である。もとより、後壁といふべきところであるが、たゞ左壁とのくぎりがないため、便宜上こゝにあげた。

むかつて左端の三層塔は、本尊臺座のすぐわきにある。

雲岡石窟第十九洞

かなり風化してゐる。つぎの坐佛尖拱龕(38)は、この洞にめづらしく拱額に七佛があり、銘區をもった方臺式の臺座である。本尊は、ややほそおもて、刻線の衣文があり、龕内左右に脇侍がたち、龕外周圍に合掌の供養者たちがゐる。最上には、ごくあさい彫りで、飛天が、およぐやうにとんでゐる。銘區の左右には、比丘と男女の供養者を、あさく彫つてゐるが、まだ北方の服裝である。

つぎは交脚菩薩の楣拱龕(39)である。様式的には、前者によく似てゐる。ほど同時の作にちがひない。前壁でいへば、坐佛龕(32)にちかいところであるが、形式は全然べつである。銘區をはさんで、左右に四體づゝの僧がゐる。そのうち、むかつて右の一體だけが、手をさしのべて博山爐をさし上げてゐる。拱額間には飛天があり、そのうへには供養者があり、龕傍には、また供養者がゐる。龕内は合掌の比丘が脇侍であり、獅子がゐる。本尊は五成の座に坐し、右手をあげ、左手を膝においてゐる。背にまはった天衣は大きい、體軀はややほっそりしてゐる。

この上部にも、やはり小千佛龕がぎっしり彫られてゐるが、どの佛龕よりも、あとから彫られたことがわかる。たとへば佛龕(37)左したの供養者像に接して、やや小さくされた小千佛龕、佛龕(38)左うへの隅と小千佛龕とのあひだにのこされた空所など、注意されたい。(第38龕高0.98m、第39龕高0.84m)

Pl. 91A. 第十九A洞 左壁 下部 坐佛龕(38) 左上部

B. 第十九A洞 左壁 下部 諸龕(38, 39)龕傍拱柱

A. 坐佛も供養者も、顔面は略されてゐるが、衣文はあらはされてゐる。粗略な彫刻であるうへに、肌がややあれてゐるが、まるみのある、可憐な像である。最上の飛天も二體みえてゐる。(楣拱中央像高0.12m)

B. 一方は跪坐合掌の像、他は立った脇侍である。これには顔面の細部をいれてゐるが、小づくりである。楣拱内の飛天も大きくとんでゐる。拱端獸頭の略されてゐるのをみよ。(跪坐像高0.20m)

Pl. 92. 第十九A洞 右壁 上半

こゝは、かなり風化がはげしく、最上層の天蓋様はみえない。千佛の列像は五段あり、そのうち、うへから第二段の最奥に、龕のなかにおさまった坐佛があり、第五段の大部分は、右脇侍光背上の供養者でしめられてゐる。なほ脇侍の左わきにそうて、六段の千佛列像がある。(明窓高3.45m)

Pl. 93. 第十九A洞 右壁 下半

右脇侍も、わりあひにあさい彫りであるが、頭部は十分にまるみがある。足はつよく左右にふんばつて、方趺のうへにたつてゐる。方趺は蓮華でも彫るつもりであつたかとおもふが、あら彫りのまゝである。最初脇侍の像に關係なく、窟のかたち、まるく彫られたらしいことは、臺座の彎曲によつてわかる。右手は胸にあげ、拂子をもち、左手はしたにたれて水瓶をもつてゐる。肩布、下裳は大きく身體をおほひ、平行の衣文はおほまかにながれてゐる。左脇侍の衣文よりも、はるかに流麗である。すそは左右にすこしあがり、まんなかに下裳のあはせめがさがつてゐる。

火焰形の頭光のうへに、圓拱形のおほひがあり、そのうへに、なにか尖頂をつくらうとしたことは、左脇侍とおなじであるが、左半分にはそれがない。だから、このうへ供養者たちのしたばは、ちぐはぐになつてゐる。光背の面には、なんの彫文もなく、中古に墨でぬがゝれた靈芝雲と、火焰とがある。なほ、天衣が大きく肩にまはることも、左脇侍におなじである。(菩薩像高4.48m)

Pl. 94. 第十九A洞 右壁 右脇侍菩薩 上身

これでみると、光背のうへの圓拱形にぬがゝいた雲形がよくわかる。左脇侍のものと同様であつて、その形式から、これら墨色の裝飾が、みな、遼代のものと判定される。この光背の一部、天衣の一部をきつて、小千佛龕を彫りこんでゐる。

なゝめに一本龜裂があるが、實にうつくしい顔である。ひじやうにふかく彫られてゐるが、正面は正面で、ひとつの平面からなり、こゝに眉、目、鼻、口がふかくあらはされる。眉はなゝめにながく、目は杏仁形にひらき、鼻すぢはとほり、鼻翼はつよく、唇はやゝ古拙笑を呈する。玉眼をはめたのは中古のしわざであるが、いまはなくなって、その空洞をのこしてゐる。三面寶冠の正面には禪定佛があり、その圓板のうへには新月形がある。雲岡の交脚菩薩には、つねに寶冠正面に禪定佛があり、彌勒菩薩のしるしと解されるが、この脇侍の禪定佛が、なにを意味するかは不明である。ことに残念なのは、これに對する左脇侍の寶冠がこはれて、わからない點である。胸には板狀の頸かざりがみえ、それに步搖か、流蘇のごときものが、さがつてゐるのをみる。

この圖版、むかつて左うへをみると、前壁との接觸がわかるが、前壁のつよい彎曲ぶりも、こゝからうかゞはれるであらう。(頭高0.98m)

Pl. 95. 第十九A洞 右壁 右脇侍菩薩 頭部

つよくまへにでい、頬の大きくひろいのが、この像の最大の特徴である。こゝからみると、とくに顎がで、口のあたりがくぼんでゐること、眉のねもとがふかくおちこんでゐることが注意される。耳も充分に大きく、頭髮が大きく、ふさふさとさがつてゐる。おくゆきのふかいせみか、三面寶冠の側面の圓板は二つあって、通例より一つ多い。まへの方はふつうの圓板で、笄をとほしたらしく、はしにふさがさがつてゐる。つぎはたゞの圓板で、二重になって旋回する放射線がきざまれてゐる。正面の圓板とのあひだにある唐草かざりもうつくしい。(頭高0.98m)

Pl. 96A. 第十九A洞 右壁 右脇侍菩薩 右手

B. 第十九A洞 右壁 右脇侍菩薩 左手

A. 胸にあげた右手である。みじかい拂子 vyajana である。柔軟な指と柔軟な拂子の彎曲とが、よく似あつてゐる。手の甲がゆたかで、肩のはりと、よくつりあつてゐる。それに肩布のひだの、大まかなながれが、堂々としてゐる。

B. たれさげた左手に水瓶をもつてゐる。中指と第四指を折りまげて、そのあひだに、水瓶をはさんでゐる。拇指はかるく中指をおさへ、第二指と子指はのびてゐる。その拇指のそりと、子指のほりがうつくしい。水瓶 kuṇḍika は、頸のながい、胴のはった、臺つきの、ふつうにみる形であるが、その立體的な彫りは、實に堂々として遺憾がない。(水瓶幅0.31m)

Pl. 97. 第十九A洞 右壁 下部

下部は、ほとんど小千佛龕におほはれ、そのあひだに三つ佛龕がある。そのうち、おくの坐佛龕(41)と交脚菩薩龕(42)とは、すっかり風化してゐるが、その様式は左壁おくの諸龕(38, 39)に一致し、その時期も、ほど推測ができる。脇侍水瓶したの二佛並坐龕(40)は、第六洞式の服装で、前壁坐佛龕(32)とまったく同様、洞内ではもっともあたらしい佛龕である。けれども、小千佛龕よりは、さきに彫られてゐることがわかる。

こゝには、自然に壁がうすく、第十九本洞にむかつて孔のあいてゐるところが三カ所ある。最下の圓形の孔からは、第十九洞にゆきゝができるやうになってゐるが、これは多少のちに、人工をくはへて大きくしたやうに見える。とにかく、こゝにみられるやうに、第十九洞とのあひだの壁はうすいのである。

Pl. 98A, B. 第十九A洞 右壁 中部 千佛

A. これは右脇侍の左わき、うへから第九段目、したから第二段目の千佛列像である。三佛あるが、まんなかの立像が異例である。顔がまるく、右がはの佛にもよく似てゐる。左手を胸に、右手をたれ、足を左右にふみひろげてゐる。衣は通肩であるが、左腕にかゝった衣が、大きく弧をゑがきながら、すそになり、またうへにあがつて、右腕にいたつてゐるやうすが特異である。右がはの佛は風化してなくなつてゐるが、左がは坐佛はよくのこり、體格も堂々としてゐる。衣は通肩、兩手をまへでくんでゐる。(立像高0.44m)

B. 最下段の千佛である。通肩、禪定の二體で、うへの佛像によく似てゐる。ことに、むかつて右がはの佛が、上段の諸佛と、同一人の手になることは、うたがひがたい。いまかなりあれてゐるが、朱色をのこしてゐる。(右像高0.43m)

Pl. 99. 第十九A洞 右壁 下部 小千佛龕

小千佛龕はたかさ約0.15mから0.20m、まったく簡素な表現である。衣文は一種類で、ゑりにまく二本の弧線と、胸にさがる二本の直線のみからなる。第十九洞明窓の諸龕(本書、第十三卷, Pl. 10)にくらべると、まったく同様であるが、第十六、第十七洞中間外壁の諸龕(本書、第十二卷, Pl. 2)にくらべると、やゝちがひがある。とにかく、身體がきしゃで、そでがとがつてゐるのは、わりにおそい製作であることを、様式のうへからものがたつてゐる。むかつて左したに一部みえてゐる二佛並坐龕(40)よりも、あとからきざまれたことは、それとのあひだに、せまい空白をのこしてゐることによつて、あきらかである。なほ、この小千佛龕は、その製作にあたり、右脇侍左手からたれた天衣を破壊してゐる。いまそのなごりが、中央部上下にわたつてみとめられる。(龕高約0.19m)

Pl. 100. 第十九A洞 後壁 本尊佛倚像 上身

大きな方形の籐几に腰をおろしてゐる。たくましい足(Pl. 84)をまへにだしてゐるが、いまはおしくも破損してゐる。まはりに蓮座を彫らうとしてか、ながい溝(Pl. 70)が兩足をとりまいてゐる。蓮座が未完成であるばかりでなく、床も凹凸があつてとゞのつてゐない。

右手は胸に、左手は膝にあてゐる。衣は左肩にかゝり、右肩には衣端がかゝるのみである。衣文はひくい階段状で、第十八洞、第十九洞の本尊(本書、第十二卷, Pl. 15, 第十三卷, Pl. 50)に似る。内衣のゑりに、唐草文の文様のあること、第十九洞本尊におなじである。たゞ、こゝでは環状つな

雲岡石窟第十九洞

ぎ文を主帯とし、そのふちに連珠文をおく。

頭部は、このやうにまるい。さうして、耳が大きい。脇侍ほどはでないが、かなりふかく彫られ、しかも顔面は大きく、ひらたい。それで自然に、睨あたりから頤にかけて角ばってくる。これは初期の雲岡像にみる一般的特徴である。それで額はひらたく、眉はながく、目はながいが、まるくふくれ、鼻すちはとほり、口がうつくしくしまつてゐる。そのたくましい體軀に、よくつりあつた堂々たる顔つきである。

この圖版には、わづかながら、本尊の光背(Rub.IV c)がみえる。舉身光のそとには、半パルメットC字形つなぎの唐草文がある。つきには頭光の火焰帯がある。つきは跪坐合掌天帶(Pl. 101), 坐佛帶で、まんなかの蓮華文になる。身光の内區は、また跪坐合掌天帶, 坐佛帶である。(頭高1.94m)

Pl. 101. 第十九A洞 後壁 本尊佛倚像 上身

こゝにはひらたい顔がみえる。あごに大きな龜裂があり、目には玉眼のあとがある。右の耳はかなり風化し、胸の部分も風化してゐる。(頭高1.94m)

Pl. 102A. 第十九A洞 後壁 本尊佛倚像 足部

B. 第十九A洞 後壁 本尊佛倚像 左手

A. ひじょうにせまい石窟で、本尊が、窟いっぱいには彫られてゐるため、全身像をみることはむづかしい。こゝには足部だけがうかがへるが、足さきは、どちらも破壊されてゐる。たゞ幸なことに、左の足さきは、こはれながらも原位置にあり、ありし日の偉容を、ものがたつてゐる。大きな足に、ながい指である。爪がうつくしく彫られてゐる。兩膝には衣がかゝり、平行線のひだをたれてゐるが、階段狀のひだである。すそが二重になってゐること、第十八洞本尊(本書、第十二卷, Pl. 115)におなじである。

B. 左手は膝において、衣端をもつてゐる。單純な、すんぐりした手で、いかにも力づよい表現である。網縵相のみづかきは、よくあらはれてゐない。

Pl. 103. 第十九A洞 天井

前壁のがはは、ほど一直線である。他の三方は、まへのりだしてゐるので、曲線になり、せまくなつてゐる。長徑約4.20m。まはりはなげしがとりまき、周壁の三角垂飾と帷幕とになる。後壁からは光背がのびて、ほど中央に達し、その尖頂に童子形がある。天井は、この尖頂を中心に、左右から三體づきの天人が、とんでゐたらしい。いまは、ほとんど崩壊して、二體の頭部だけしかのこさぬが、左手はやゝ保存よく、手足天衣がやゝのこつてゐる。

こゝからは、本尊の頭部がよくみえるが、その直方體的な容積がよくうかがへる。なほ鼻端には、まるい二つの鼻孔がつくられてゐる。(幅4.20m)

Pl. 104. 第十九A洞 天井 飛天

光背頂の童子は合掌してゐるらしい。あるひは蓮上の化生かも知れない。そのうへに一體の飛天がある。豐滿な面相で、寶冠をつけてゐる。身體を弓なりにまげ、足さきをうへの方にむけてゐる。左手はうしろにのばし、右手はまへにあげて、なにかをさゝげてゐたらしい。衣裳はあさく、浮彫だが、圓光と天衣は刻線であらはず。もう一體は、そのしたにある。頭をうしなふが、弓なりの下半身はよくのこり、それにうしろにのばした左手もみえる。足さきはうしろにむかひ、前者のごとく不自然ではない。もう一體は、そのうへにあり、下半身はなげしにかくれてゐる。あさい、ひらたい彫りで、肩には肩布をかけ、のばした左手にはなにかをにぎつてゐる。蓮の蕾であらう。

第十九B洞

Pl. 105. 第十九B洞 外部

この洞は、第十九洞の西わきにあり、すこし第十九洞の方をむいてゐるので、ほど東南に面してゐることになる。第十九洞の床よりは、はるかにたかいが、これにのぼる足がゝりはなにもない。右壁が大崩落したので、門口も、明窓もなく、内部がすっかりみえてゐる。(洞高9.45m)

Pl. 106. 第十九B洞 内部

これで内部がすっかりみえるわけである。倚坐の佛本尊、臺座の供養者列、左壁の左脇侍、それに明窓の左側、門口の左側が一樣にみえてゐる。こんなに大崩落してゐるけれども、一時は戸障子がはまつてゐたとみえ、明窓には障子の框をはめたらしい穴があり、門口には楣をはめたらしい穴がみえる。(洞高9.45m)

Pl. 107. 第十九B洞 門口 左側

上下に千佛小龕があり、中間に大きな佛龕(1)がある。これはマンダラ maṇḍala 式で、内部に八つの佛龕をふくんでゐる。最上層は天蓋かざり、つぎに七佛列龕があり、最下層は銘區を中心にした寶壇である。うへに波頭形のくりがたがあり、したに僧形、男女の供養者列がある。この、おそい形式の佛龕としては、くりがたのあることは、めづらしい。それでも時代はあらそはれぬもので、さきがとがり、輕快になり、供養者の中國式服裝に相應してゐる。ところが、供養者の足もとに、きえのこった刻文の筆劃がみえる。それを見ると、かなり大きな字で、また整然としてゐる。ありし日のすがたをおもふと、けっして、このあたりの小龕のための造像記とはおもはれない。といつてこの石窟のための造窟記とすれば、それがけづりとられるといふことも、ちよつと想像しがたいことである。

中央部は、うへに瓔珞の楣拱龕、五間にわかれ、中央は交脚菩薩像、左右は半跏思惟像、兩端は佛倚坐像、みな、ほっそりした佛像で、衣文も纖細である。半跏像のうへに、天人が輕快にとんでゐるのが、めづらしい。したは、五成の臺座のうへにある尖拱龕である。臺座の左右には獅子が前身をあらはし、龕傍には供養者がたち、拱額には七佛がならび、そのうへには合掌天がそろひ、龕内に坐佛をおさめる。なほ左右兩端は、上下の二段になり、うへに坐佛、したに立佛をおさめてゐる。第十九A洞門口の諸龕(1, 3) (Pl. 66, 67)からすれば、この立像は、儒童 Maṇava 因縁の定光佛 Dipaṃkara Buddha であり、アショカ Aśoka 王因縁の釋迦佛 Śākyamuni Buddha であることがわかる。

要するに、この一群の佛龕は、第十九A洞門口の佛龕(1, 3) (Pl. 66, 67)とまったく同様であり、また第十八洞門口の東側佛龕(4) (本書、第十二卷、Pl. 77)とも同類である。

Pl. 108. 第十九B洞 前壁 左部 上半

これによると崩壊してゐるが、大きなアアチ形の明窓があったことがわかる。上部は、天井まですっかり小千佛龕でうまつてゐる。そのなかにある二佛並坐龕二(2, 3)と坐佛龕一(5)とは未完成である。諸像のあらぼりのをはったところで、とまつてゐる。つぎの二佛並坐龕(4)も、本尊や脇侍は、いちおう完成してゐるらしいが、拱額や、うへの供養者たちはあらぼりのまゝである。やゝほっそりした作で、第十九A洞の前壁底部の諸龕(26, 27) (Pl. 79, 80)よりあと、坐佛龕(29, 30, 31) (Pl. 28)よりまへのものとおもふ。臺座にある五佛列像は、小千佛龕と同時のものであらう。こゝでも、小

千佛龕が、これらの諸龕よりおくれで彫られたことは、この龕と未完成坐佛龕(5)とのしたがつ、たかさを異にした小千佛龕で、うめられてゐることである。

このしたにも、二佛並坐龕(6)と坐佛龕(7)とがあるが、前者は右方の佛が、あらぼりのまゝである。あらぼりの拱額は、小千佛龕によって、こはされたかも知れない。

明窓のしたばかりに、脆弱な岩層があり、こゝには小千佛龕がない。こゝでは左壁との接觸關係がよくわかる。うへの方は、とくにはっきりとして、その區別があきらかである。

Pl. 109. 第十九B洞 前壁 左部 下半

こゝにも一面に小千佛龕があり、そのあひだに、いくつかの佛龕がある。そのうち、うへの坐佛龕(8)は未完成、したの二佛並坐龕(10)も、まはりの脇侍供養者を彫ってない。この二龕のあひだにも、また、ほんの輪廓だけを彫った未完成龕がある。二佛並坐龕(9, 12)と坐佛の龕(11)とは、さきの未完成二佛並坐龕(10)とともに一群をなすが、様式的にも一群に屬し、したの坐佛龕(13)よりは、すこしはやいものである。みな第十八洞の服裝で、體軀、面貌もゆたか、A洞でいへば、佛龕(26, 27)と佛龕(29—31)との中間にあるとおもふ。したがつて、この壁面は、上下ほどおなじところに、佛龕がひらかれたものとおもふ。したの坐佛龕は中國式の、しかし、たれ紐のない式で、これにならぶ左壁の諸龕にちかい作である。

Pl. 110. 第十九B洞 前壁 左中部 坐佛龕(8)

これは未完成の坐佛龕である。龕外は、どのくらゐできてゐたか知らぬが、いま寶壇の部分のをぞくほか、すっかり追刻の小千佛龕におほはれてゐる。佛龕の内部には、わりにほっそりした佛ができあがつてゐる。左肩から右わきにたれ、右肩にかゝる衣文が、すでにうかがはれる。衣文は古式であるが、第十九A洞でいへば前壁底部の諸龕(29—31)よりもおくれでゐるとおもふ。龕内にひくい蓮座をつくらうとしたことがわかる。それは、ちやうど、第十四洞前室西壁(本書、第十一卷、Pl. 10)にみるごとくである。

いま一面にくろすんでゐるのは、龜裂に泥をうめたのと同時に、かつて住居につかはれたなごりであらう。

Pl. 111. 第十九B洞 前壁 左下部 二佛並坐龕(9)

これは面貌の大きく、肩のはり、胸のはった堂々たる佛である。右手はともてうへにあげ、左手は足のうへにおくが、

雲岡石窟第十九洞

右方の佛は手くびをあげ、左方の佛はふせてゐる。衣文は簡素な刻線である。

四脚式の牀座のしたには、供養者の浮彫があり、せまい尖拱額は素文である。左右拱端には獸頭があり、簾几やうの柱頭のうへにのる。龕傍には合掌供養者がたち、そのうへに合掌跪坐像がならび、最上には弧状にひきしぼった帷幕がある。この壁面では、上方の諸龕(2-7)、したの三龕(10-12)とともにふるく、第十九A洞でいへば、前壁下部の佛龕(27)に一致し、底部の佛龕(29-31)よりは、はるか以前のものとおもへる。

Pl. 112. 第十九B洞 前壁 左下部 二佛並坐龕(9)寶壇

この寶壇は、四脚式の牀座だが、波頭のくりがたはない。しかし、せまいふちとりのやうなものが、臺牀のしたばにあり、脚のうちはにがある。こゝには、あらゐ鑿あとが歴々とのこり、手ぎはのよいところをみせてゐる。

たかい博山爐をなかにして、左右に僧侶がある。手をあげてゐるのは香を投じてゐるのであらうか。そのうしろに、右は女子、左は男子の列がある。いづれも、おきまりの北方服で、拱手してゐる。窄袖の大衣は左まへで、男は袴子、女は裳をつけ、裳にはひだがついてあるらしく、刻線がたてにはいつてゐる。帽子は、うしろにたれがあり、男の方は、うしろにたばれてとがつてゐるらしいが、女の方はまるくなって、第十九A洞前壁の佛龕(15)(Pl. 76)にみるごとく、二つの山にわかれてゐない。とにかく、簡素な彫りで、顔などはあらはしてゐないが、わりあひに、まるまるとしてゐる。

Pl. 113. 第十九B洞 前壁 左下部 二佛並坐龕(10)

まはりには、まだ完成してゐない。からうじて、合掌脇侍のあら彫りがみえるのみ。寶壇や拱額についてはわからないが、こゝには、追刻の小千佛龕がならんでゐる。龕内の二佛は、ほど完了してゐるが、頭部の岩肌や手のひらの彫りぐあひをみると、なんだか、まだ完成にいたらぬものゝやうにみえる。前者(9)に似た佛像であるが、衣文は密で、すっかりちがふ。しかし、時期はほど似たものであらう。

Pl. 114. 第十九B洞 前壁 左下部 坐佛龕(11)

これは前二龕(9, 10)に似てゐるが、後者の方(10)によりちかい。小さいが、いちおう完成してゐる。四脚式の牀座もあつたらしく、龕のふちから左右に二本の刻線がさがつてゐる。いまはたゞ、その二本の刻線と、これをむすぶ水平の刻線とが、かすかにみえるのみで、こゝには小千佛龕が彫つ

てある。この龕よりしたの小千佛龕は、シムメトリカルな衣文をもった坐佛と、右肩右腕を大きくくるんだ坐佛とかなりたつてゐる。それはこのうへの二佛並坐龕(4)(Pl. 108)附近にすこしみられるが、一般には、A洞各壁(Pl. 66, 80, 99 など)でみたやうに、衣文のシムメトリカルなもの一種のみである。

楣拱額はひくゝ、尖頂はこはれてゐる。拱端の獸頭は、簾几のうへにのり、左右にやゝ大きな脇侍がある。脇侍のうへの供養者も、みなおなじやうな調子で、合掌してゐる。あさい、繪畫的な彫像で、自由でうごきがある。最上には弧状の帷幕がある。

本尊坐佛は、わりに堂々としてゐるが、衣は前者ほど密でない。つぎの二佛(12)によく似、やゝ、大まかなゑりの衣文など、ほとんどおなじやうであるが、顔をくらべると、また別人の手になることがわかる。

Pl. 115. 第十九B洞 前壁 左下部 二佛並坐龕(12)

この龕は、尖拱がやゝ幅ひろく、拱端の獸形はほっそりして、前脚がついてゐる。となりの佛龕(11)とは、別人の作であること、あきらかである。左右の脇侍、まはりの合掌者たち、みな輕妙な彫りで、うごきがある。顔面はまるいだけで、なにも彫つてゐない。寶壇にあたるところには、小千佛龕がある。いま、拱額が一樣にきれてゐるので、この佛龕(12)の方が、あとから彫つたやうにみえるが、さうではない。これは、したの佛龕(13)とのあひだぎせまく、しかも龕の大きさをかへなかつたために、かうなつたのである。拱額の扁平で、ふくれてゐないのは、そのまへに佛龕(12)の臺座があつたからである。

本尊二佛はゆたかな、どっしりした體格で、たがひによく似てゐるが、頭部をくらべると左方がしもぶくれで、すこしちがふ。左方は、胸のまんなかがくぼみ、足さきがつよくそり、一般に抑揚がつよい。

Pl. 116. 第十九B洞 前壁 左下部 坐佛龕(13)

これは、うへの諸龕が第八洞式の服裝であつたに對し、第六洞式の中國服である。けれども、それは第十四洞西壁佛龕(本書、第十一卷、Pl. 9)、第十六洞諸龕(11, 12, 16-24)(第十一卷、Pl. 110)のごとく、內衣のたれひものみえない式である。それに、わりあひにどっしりした體格で、そのうへ臺座の供養者たちも北方服である。うへの諸龕よりはあたらしいとおもはれるけれども、左壁底部の諸龕(19-22)よりは古く、また中層の未完成龕(8)よりも古いであらう。

銘匾をはさんだ供養者たちは、左の先頭が合掌した僧侶が二人、つぎが合掌した男子二人、右は合掌した女子、それから男子、女子となつてゐる。あとの男女は、やゝ小さくあらはされ、頭巾がなく、髪容も童子らしいので、子どもたちであらう。それにしても、二人の僧侶は、一はまへに弧状の衣文をもち、左右に袖やうのとがった垂下をもつが、他は両肩から両腕をすばりとつゝみ、服装の様式がすっかりちがつてゐるのは異例である。

左右の脇侍は、右の合掌に對し、左は拂子をもつてゐるのでめづらしい。拱端はまきかへすだけで、拱額はひろく、その中央に獅子を左右にした交脚菩薩像がある。菩薩は合掌してゐるらしく、第八洞式の服装である。拱額から、拱額のしたにかけて、左右の均等を無視して、七體の坐佛をおさめてゐる。かうなれば、これはあきらかに過去の七佛であり、彌勒菩薩 Maitreya であり、龕内は釋迦牟尼佛 Śākyamuni Buddha である。

拱額のうへに四人の供養者があり、そのうへに、弧状にしばった帷幕があるが、この帷幕は、うへの小千佛龕を彫るときに、多少けづりとられた形跡がある。そのために、その小千佛龕が、これら上下の佛龕(12, 13)よりも、あとのものだと推定されるのである。

Pl. 117. 第十九B洞 左壁 上半

Pl. 118. 第十九B洞 左壁 下半

前壁とは、やゝ直角にまじはつてゐるので、そのさかひは、ほどあきらかであるが、後壁とは連続してまゐる、そのさかひめはない。いまは、たゞ便宜のため本尊光背をもつて、そのさかひとする。全面に小千佛龕があり、ところどころに諸佛龕があること、前壁におなじであるが、そのほかに脇侍の立像がある。また小千佛龕は、前壁上部とおなじく、二本の弧線と、二本の垂直線との衣文をもつた一式である。

うへの二佛並坐龕四つ(14, 15, 17, 18)はおのづから一群をなすが、楣拱交脚龕(16)は繊細なつくりで別類であり、したの四龕(19-22)はほど一群といへるが、いちばん大きな二佛並坐龕(19)は未完成である。それと注意すべきは、脇侍の周邊に、ひろくあらぼりの壁が、みられることである。それから、このおくに大きな孔があつて、第十九本洞に通じてゐる(Pl. 37)。なほ最奥本尊光背のしたに、もう二つ佛龕(23, 24)(Pl. 126)がある。

こゝからは、明窓の側壁がよくみえ、小千佛龕はシムメトリカルな衣文をもつた佛一種である。(光背幅1.32m)

Pl. 119. 第十九B洞 左壁 上部 二佛並坐龕(14)

この龕も、まだしあげがたりない。右うへの一部は、あら彫りのまゝである。本尊二體は、古式であるが、よくとゝのつて、前壁上部の諸龕(2-4)とおなじく、また下部の諸龕(9-12)にもちかい。完好な楣拱額で、ふつくらした七佛坐像を彫り、拱端の獸形をつくる。拱額を素地のまゝにのこさず、拱端に、前脚のある獸形をあらはしたのも、あるすゝんだ段階を、あらはしたものとおもふ。わきの立侍はなく、跪坐合掌の供養者たちが、龕形をとりまいてゐる。

Pl. 120. 第十九B洞 左壁 上部 二佛並坐龕(15)

この龕は、めづらしいことに、尖拱額のいたゞきに三つ葉のかざりをもつ。本尊の二佛は、ゆたかな古式の佛である。拱額も無地であり、拱端も環状の獸頭であり、うへの龕(14)よりも、むしろ古いからゐるであるが、ふしぎなことに、右うへの跪坐合掌供養者は四體とも、ほそてのつくりで、すっかりあたらしい形式である。それは、この本尊の光背に似(Pl. 131, 132)、またしたの交脚菩薩楣拱龕(16)にちかい。これに反し、左うへの供養者は豊満で、本尊にふさはしい古い形式をしてゐる。それに龕傍左右の合掌比丘像、そのうへの佛坐像も、本尊に合致する形式である。してみると、右うへの四體だけは、なにかの理由で、したの楣拱龕(16)と同時に追加完成されたのかとおもふ。倚坐の比丘を龕傍の脇侍にしたものは、A洞の前壁(Pl. 74)にあり、第十八洞内にも二三(17, 23)みられた(本書、第十二卷, Pl. 96, 97)。しかし、曇曜五窟以外では、まったくみない形式である。最上層には、刻線で弧形をならべた帷幕がある。

この龕のうへの一列小龕は、もとより、あとからの追刻である。このしたの二列も、あきらかに、あとからの追刻である。ところが、こゝに段があつて、このしたは一段と壁がおくまつてゐる。さうして、そこにつぎの二佛龕(17, 18)が彫られてゐる。

Pl. 121. 第十九B洞 左壁 上部 二佛並坐龕(17, 18)

こゝには同大の龕が二つある。ほとんど、おなじ形式で、同時の作とおもはれるが、一方(18)はあら彫りのまゝの未完成である。まはりには、たゞ後刻の小千佛龕が、一面につまつてゐるが、みなシムメトリックな衣文の坐佛一種である。

Pl. 122. 第十九B洞 左壁 上部 交脚菩薩龕(16)

めづらしくとゝのつた楣拱龕(Rub. VC)で、龕上には七佛列龕と帷幕があり、最下には供養者の列像がある。博山爐

雲岡石窟第十九洞

を中心にして、左右に僧形があり、そのまた左右に北方風の男女像がある。拱額内は天衣と下裳をはねた第六洞式の飛天があり、そのわきに、瘦身の合掌供養天がたつ。臺座は五成で、まんなかに長方形の銘区があり、その左右に側面全身をあらはした獅子がある。本尊は、ほっそりした交脚像で、衣文のはしはしがするどくとがって、左右にはねかへてゐる。脚下に、上身をあらはした地母神があり、臺座の兩わきに、跪坐合掌の供養者がある。左右の廂には、半跏思惟の瘦身の脇侍がある。

繊細な様式で、第五洞外小窟に比すべく、こゝでは洞口の佛龕(1)にちかい。この壁面では、まったく孤立した存在であるが、まはりの小千佛龕は、あきらかに、この佛龕よりあとからつくられてゐる。(龕高0.87m)

Pl. 123. 第十九B洞 左壁 左脇侍菩薩

この菩薩は、曇曜五窟の菩薩に似ないで、第六洞方柱上層の脇菩薩(本書、第三卷、Pl. 125, 140, 163, 164, 188)に似る。寶冠は破損してわからないが、うしろに三角巾がたれ、頭髮が大きなたばにととのへられてゐる。眉は弓なりにあがり、鼻梁はながく、目はほそい。中古に陶眼をはめたいが、いまはない。口は一文字に大きく、頤がやゝとがってゐる。さういふところも、第六洞に似、むしろそれより形式的にあとのやうな感じがする。肩もやゝなせ肩になり、こゝから、天衣がX字形にさがってゐる。しかも、その交叉點に環をはめてゐる。下裳は腰でしめ、こゝから、ひだが並行してながれ、すそは大きくひらいてゐる。どっしりした足はこはれ、足のしたの臺座もない。右手は胸にあげて蓮の蕾のごときものをもち、左手は腰にあて、これもなにかもってゐるらしい。

火焰光背(Rub. VB)は、ほそい火焰のふち、C字形半パルメットつなぎの内帯、中心にさびしい蓮華文がある。その構成が、いたって異例である。

右手のしたをみると、こゝに二つの佛龕(21, 22)がある。ともに第五洞外小窟式の坐佛尖拱龕である。この脇侍の衣裳にきりこんでつくってゐる。もとより、この脇侍のまはりの小千佛龕は、この脇侍よりあとからつくられたこと、その光背のまはりの、配置情況によつても察せられるが、この二佛龕(21, 22)は、小千佛龕よりもあとから彫られ、自然この脇侍の衣裳にまで、くひこむやうになったとおもはれる。左がはにも、これとおなじころの二佛龕(19, 20)がみられるが、それをおいても、この脇侍のまはりには、あら彫りの壁が、かなりにとりまいてゐる。曇曜五窟に異例な、この脇侍

菩薩の成立をとく鍵が、案外かういふところに、あるのではなからうか。(光背幅1.82m)

Pl. 124. 第十九B洞 左壁 左脇侍菩薩 側面

側面からみると、このやうに扁平である。おなじ扁平といつても、A洞の脇侍にくらべると、すっかりヴォリュームがない。鼻がするどくとがり、頤のつよくとがってゐるのが、よくわかる。耳朶もとがってゐるが、左がはは、さうでもないらしい。

左わきの二佛龕(19, 20)は、どちらも二佛並坐の尖拱龕である。したには銘区を中心にした供養者列像の寶壇があるが、うへにはない。うへは、龕形の完成してゐるのに似あはず、龕内の二佛は未完成である。しかし、いづれも繊細な末期の形式であることがわかる。小千佛龕との関係は、左うへの接續點で判斷すると、小龕より、さきにあったやうにおもへるが、たしかでない。もし、小龕よりさきに存在したとなると、このあたりの小千佛龕は、この二つの佛龕(19, 20)よりおそく、さきの二つの佛龕(21, 22)よりはやく、つくられたといはなければならない。

Pl. 125A. 第十九B洞 左壁 下部 二佛並坐龕(19)

B. 第十九B洞 左壁 下部 二佛並坐龕(20)

A. 圓滿な連瓣形の尖拱額である。九體の坐佛を配し、拱端には獸形がある。左右には脇侍、まはりには供養者がたつ。簡明な彫りで、うつくしい。みな、しあげられてゐるとはいふものゝ、衣文もなく、顔面の細部も彫られてゐない。また、弧形の帷幕も、ひだがあらはされてゐない。表面なめらかになつてゐるけれども、未完成なのであらう。

B. 二佛は第五、第六洞式の衣文であるが、たれひものあらはされない第十四、第十六洞小龕の式(本書、第十一卷、Pl. 19, 88)である。龕内に寶座をもち、まへにすそがたれひろがつてゐる。まだ裳かけ座とまでいへぬが、とにかく、そのたぐひである。尖拱形、禪定坐佛、拱端の獸は、やゝ粗略である。まはりには供養者がならび、最上に帷幕がある。寶壇は中央に銘区があり、四脚の牀座になり、なかには平面彫の供養者たちがゐる。線刻なく、未完成のやうであるが、先頭は僧、あと三人はそれぞれ男子と女子で、中國式の服裝をする。

Pl. 126A. 第十九B洞 左壁 下部 坐佛龕(23)

B. 第十九B洞 左壁 下部 坐佛龕(23) 造像記

A. こゝは左壁の、いちばんおく、後壁本尊光背のしたに

あたる。むかつて右端にみえてゐるのは、それにまで連続した小千佛龕、左端は本尊臺座の供養者像である。この中央にある佛龕は、繊細な楣拱額をもち、かけ裳の發達した坐佛をもつ。楣拱額のなかは、折り屏風式の框ぐみがあり、そのとびだしたとみられる框内に、坐佛のあさい彫りがある。それらの點は、すっかり、第五洞外の小窟式である。したの實壇には、延昌四年(A. D. 515)の造像記があり、この佛龕の製作年代が明記されてゐる。それは洛陽遷都以後二十年をへてゐるのである。すっかり繊細な龍門式になつてゐるのは當然であらう。第十七洞明窓の太和十三年龕(A. D. 489)(本書、第十二卷, Pl. 12)とくらべると、この二十五年間の變化がよくわかるであらう。

左右の間に脇侍の立像があり、とんだ天人があり、そのしたに象にのつた貴人、馬にのつた貴人がある。これだけでは、なんであるかわからぬが、第五洞外の小窟(本書、第二卷, Pl. 65, 66)を参照すると、一方は普賢菩薩 Samantabhadra、他方はシツダアルタ太子 Prince Siddhārtha の出家踰城のありさまであることがわかる。さらに兩端の間には、うへに文殊菩薩 Mañjuśrī と維摩居士 Vimalakīrti があり、したに立佛二軀がある。これも、東脇洞門口(Pl. 66)、第五洞外小窟(本書、第二卷, Pl. 75)にくらべると、やはり定光佛 Dipaṃkara Buddha とアショカ Aśoka 王因縁の釋迦牟尼佛 Śākyamuni Buddha の省略されたものであることがわかる。なほ楣拱額のうへに、供養者の列像が八體ある。

いちおう、これで完結してゐるやうであるが、なほしたに坐佛の列龕が一行あり、さらにあさい供養者の列像がある。これは完全に中國式で、大きな袖とながはすその衣裳をつけてゐる。いま右半をうしなふが、もともとなかったのであらう。左半には、先頭に中くらゐの比丘、つぎに大きな貴婦人像、あとは傘蓋をさしかけたり、合掌したりする侍女たちであらうが、身長をしだいに減じてゐる。その人物像の表現のしかたは、西方諸洞(本書、第十五卷, Pl. 74)に類似のものがある。

こゝで、いちばん参考になることは、この石窟中で、この龕がいちばん繊細で、様式的にも格段にあたらしいことである。したがって、他の諸龕は、いかにおそいものでも、これよりはるかに古いものだといふことがわかり、第五洞外小窟でも、これほどあたらしいものでないことがわかる。(龕高 0.90m)

B. 正書で、かなり大きく、ていねいに彫つてゐるが、わりあひにほそいとおもふ。

延昌四年。歲次乙

未。九月辛丑朔。十
五日乙卯。清信士
元、父母王鳳皇
、 、 、 亡、 、 、
、 造、一區。上爲
圖帝陛下。因皇太
后。下及七世父母。生
父母。託生西方。
妙樂國土。蓮花化
生。願己身、 、
、 、 、 日、 、 、

あと四五行分は、まったく判讀できない。(銘高 0.20m)

Pl. 127. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像

本尊が石窟いっぱい、ひろがつてゐることは、東脇のA洞ともおなじであるが、どうしたわけか、様式的にはすっかりちがつてゐる。前者が第八洞式であるに對し、これは第六洞式の佛である。そのうへ、この臺座にきざまれた供養者たち、光背の様式も、これに應じてゐる。

本尊は倚坐像である。上體に比して足はわりに小さい。足さきはとけてなく、蓮座は彫られてゐない。右手は胸にあげ左手は膝においてゐる。いま右手の背後に壁がぬつてゐるのは、近世に、こゝが住居につかはれたためであらう。衣文は大きなひだよりなり、ひだはひくい階段状である。胸には內衣のたれひもをみない式である。それに顔も大きく、體格もゆたかである。第六洞の様式に似、それより古いものとみてよからうか。(圓光幅 4.50m)

Pl. 128. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 頭部

本尊の頭部はまるい。A洞 本尊のやうな角ばったところがない。鼻はこはれてゐるが、眉は弓なりにつりあがり、目はほそくて、うしろにのびてゐる。目がしらのくぼみは、大きく、唇もくつきりとあつた。たゞおしいことには、鼻端はこはれてゐるし、頤はおちてゐるし、目には大きなくろい陶器のたまがはまつてゐる。そのため、いまは、異様な面貌を呈してゐる。この像の特色は、頬がわりにせまいことと、耳朵がほそく、とがり氣味になつてゐること、これは脇侍の右の耳(Pl. 124)にもみられたところである。

Pl. 129. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 手

右手はたゞひらいたまゝである。胸につくところは補強のため、石がのこつてゐる。左手は膝のうへにおき、ふつく

雲岡石窟第十九洞

らしてゐる。爪さきは忠實に彫つてゐるが、網縵相の、みづかきは見えない。この膝のするどい平鑿のあとに注意。

Pl. 130. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 光背 右内部

こゝには頭光の右がはにある中心の蓮華(Rub. VA)がみえてゐる。つぎには坐佛の一帯がある。つぎの供養者の一帯は見えない。蓮瓣はあさく、扁平である。坐佛はやゝほそく、二種の衣文を交互にあらはし、顔は本尊の方にむかつてゐる。まるい頭光と火焰形の舉身光とが、あさく彫られてゐるが、尖頂のとがりがある。臺座は蓮瓣を彫つてゐないが、皿形の蓮座である。全體に朱がぬつてあつたので、一部にそれがのこつてゐる。(坐佛高0.25m)

Pl. 131. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 光背 右下部

頭光の外部(Rub. VA)は、この合掌跪坐供養天になる。合掌跪坐供養天は、なほ舉身光の内區にもある。そして、その内部の三角區は肩光になり、外縁はするどい、とがった火焰の帯になる。この供養者のほそいタイプ、その第六洞式の天衣は、この光背が、本尊よりもおくれつてゐることを暗示する。ごつごつと角ばつた外縁の火焰も、第十三洞南壁の七佛の西端光背(本書、第十卷, Rub. IG)に似て、また、その時期にふさはしいものである。舉身光内區の供養天の頂上は三角形にとがつてゐるが、こゝにまるい蓮華があり、その一部からゆらゆらともえあがる一條の焰がある。めづらしい意匠とおもふ。(中央跪坐像高0.37m)

Pl. 132. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 光背 左内部

こゝには左がはの頭光内區と外區(Rub. VA)があらさはれてゐる。内區は坐佛列像であるが、左がはとちがつて、よりほそく、きゃしゃである。衣文も、いたつてこまかい。腕にかゝる袖も、おそろしくつよく左右にひろがつてゐる。光背も、こゝでは線刻であらはされるか、全然ぬがゝれないかである。舉身光とのあひだの三角區にも、ほそい火焰がたちのぼつてゐる。(中央坐佛高0.28)

Pl. 133. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 寶壇左側

供養者(1, 2)

寶壇のわきである。こゝにほそくて丈だかい俗形供養者の列を彫つてゐる。こゝには、先頭の二人がみえ、頭部のない三人目は一部分みえてゐる。冠をつけ、鼻高の大きな履をはき、ながい衣裳をまとつてゐる。腰はながく、袖はながくとがり、小さい可憐な顔に相應じてゐる。上身をまへに

だし、すそをすこしうしろにひいて、あたかも歩行してゐるかのやうである。先頭のひとは手になにかもつてゐるやうであるが、つぎの供養者は合掌してゐる。

Pl. 134. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 寶壇左側

供養者(3, 4)

この二像は足もとがすつかりこはれてゐる。岩の脆弱であつたためであらう。まへの像(3)は頭部をうしなつてゐる。両手でなにかもつてゐるらしい。つぎの像(4)は手の部分に破損があり、衣裳のひだなども略されてゐるが、顔はうつくしい。つぶらな、しかし一本の刻線よりなる目が、いかにもしづかで、口もとも柔和である。冠もよくのこつてゐる。

Pl. 135. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 寶壇左側

供養者(1) 上身

しあげもいゝし、保存もよい。當時のうつくしい貴族の風貌をつたへてゐる。冠の中心部はこはれてゐるが、とがった翼部がのこつてゐる。弓なりの眉、目はつぶらである。それにつよく彎曲した唇が、かすかに笑つてゐる。頬のひろい點、頤のふかいところは、なほ古式をたもつとはいへ、その纖細なからだつきは、どうしても太和年間(A. D. 477)をさかのぼらぬものであらう。

Pl. 136. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 寶壇左側

供養者(5)

最後の一人である。まさに、寶壇のはづれにあり、そのつぎに延昌四年の佛龕(23)(Pl. 126)がせまつてゐる。この供養者も、足はうしなふが、その他はよくのこり、右手に博山爐をさゝげ、左手になにか、蕾のやうなものをもつてゐる。大きな袖をつけ、幅のひろい帯をつけてゐる。いふまでもなく中國冠帶の風俗である。のちの龍門賓陽洞などにみられる服裝である。たゞ、これは簡略で、衣文の線も略されてゐるらしい。しかし、顔はひきしまり、溫雅である。眉はつよくあがり、目は杏仁形にひらき、口はつよく彎曲してゐる。耳も充分に長大である。

Pl. 137A. 第十九B洞 後壁 本尊佛倚像 寶壇

右側供養者(6-9)

B. 第十九B洞 右壁 下部 供養者(10-12)

A. 右がはの供養者は、女性をあらはしてゐるのであらう。髻がみえ、左がはの冠とすつかりちがふ。先頭の一人は髻が二つあるが、その他は、ひとつである。衣裳は左がはの

像とおなじやうに見えるが、帯はみえない。先頭の一人(6)は、左手に博山爐をさし上げてゐるが、その他(7—9)はみな合掌してゐる。足の部分は、どれもみな破損してなくなつてゐる。

B. 本尊寶壇わきの供養者列は、寶壇をはなれて後壁になり、右壁になつてもつゞいてゐるらしい。後壁の部分がひどく破壊してゐるので、その總數をかぞへることはできないが、こゝ右壁にまはつて、からうじて三體がみとめられる。合掌して、やはり女性の像であらう。上部は、いふまでもなく、すっかり崩落してゐるのである。

Pl. 138. 第十九B洞 天井

前壁がはは、ほど一直線、その他はひとつになつて彎曲してゐるが、本尊後頭部がやゝひつこんでゐるため、大ざっぱにいふと三角形になつてゐる。この部分はドウム狀に彎曲せず、たひらになつてゐる。光背は、おほかたまんなかまででゐるが、完全にのこつてゐるとはいへない。光背の前方は、あらけづりの石面がみえ、なにも彫られてゐなかつたことを暗示してゐる。もつとも、一部分は崩落してゐて、なにもわからない。周壁はうへまで小千佛龕が彫つてあつて、天井とのさかひにはなにもない。

圖 版 解 説 (2)

第 十 四 卷 第 二 十 洞

Pl. 1. 第十六洞—第二十一洞 全景

圖版左端は第二十一洞で、それに東隣する露坐大佛が第二十洞である。これは1940年發掘以前の寫眞で、大佛の兩膝は土中にうもれてゐる。第十九洞は前方の樹にかくれてゐるが東脇のA洞はみえてゐる。それに東隣する大きな明窓は第十八洞であり、つゞいて第十七、第十六洞の順序に曇曜五窟が一望される。谷のむかふの中央地區まで一直線にならんでゐるのがよくわかる。

Pl. 2. 第二十洞 外景

中央に第二十洞、右方に第十九B洞、左方に第二十一洞、それから西に西方諸洞がみえる。第二十洞の外壁はすっかり破壊して、かたちをうしなつてゐる。その原因は、粗惡な岩層が水平にはしつてゐたからであらう。くはしくみると、北壁兩わきにある大きな孔は、この岩層にあたり、これが西壁になって、さらに、もろい岩層となる。したがつて、西壁とそれにつゞく南壁が、崩壊しはじめ、外壁全部がこはれる結果となつたらしい。西壁の方が、はるかに東壁より破壊がいちじるしい。東壁には脇侍がのこるが、西壁ではわづかに佛足と蓮座しかのこつてゐない。そのうへ破壊は崖のうへまでおよび、いたましい慘狀である。西脇の第十九B洞の外壁も崩壊してゐるので、もとの外壁の情況をのこしてゐる部分はごくすくない。すなはち、崖のうへ、第十九洞につゞく部分、および第二十洞西端下部である。後者は、1940年の發掘のとき、はじめてみる事ができた。この發掘により、大佛および兩脇佛の足があらはれ、外壁の落岩が洞前に累々として發見された。いま圖版中央に點々とみえる岩石がそれである。これらには千佛の彫刻がのこつてゐる。したがつて、外壁には一面に千佛がほられ、地表ちかくまでおよんでゐたことが、あきらかである。なほ落岩の層よりしたに、もとの地表があつたわけで、洞外の地表は、大佛の足よりかなりひくかつたことがわかる。(像高13.46m)

Pl. 3, 4. 第二十洞 外景

圖版左端に外壁下部の千佛が十段ほどみえる。その上層

は岩がきはめてもろく、ほとんど崩壊してゐる。黒みがいつた岩層が水平にはしり、それが北壁西部の大きな孔になり、大佛の右手から胴部にすゝむ。胴部には大きな破損をつくり、左肘にうつり、北壁東部にもまた大きな孔ができる。この岩層は東脇佛の肩に一條、腰に二條の痕跡をつくり、圖版右端では西脇の第十九B洞にむかつてゐる。しかし、大佛の頭から肩にかけては、白い良質の岩で、うつくしい彫刻がよく保存されてゐるのは幸である。大佛の兩手と膝には、こまかい破損がたくさんある。これは落岩が災したものであらう。膝は角ばつて、第十九洞本尊のやうな、やはらかい曲面はない。結跏趺坐のかたちで、あげた右足は足くびのみを露出し、全體を衣文がつゝんでゐる。足くびはかなり破損し、足のした、中央に小さな蓮座がのこつてゐる。蓮座のたかさは0.40mある。

北壁は大佛の坐像が占め、その左右に、もとは左右脇侍菩薩の立像があつたのである。これはあさい浮彫である。西部の菩薩は圓光をせおひ、寶髻をいたゞく。この寶髻は、たゞ輪廓だけである。顔はすっかりこはれてゐる。頸かざりは纖細にほつてゐる。まづ虎頭を先端につけたバネ状のかざり、そのうへに、さきに鈴をつけた板狀の頸環がある。また腕環ものこり、肩にたれた頭髮もみとめられる。胴部は、例のもろい岩層のため、まったく消失するが、足はのこつてゐる。蓮座のうへにたち、弧狀の衣文が膝をおほひ、それにジグザグの文様がある。西部の大きな孔が菩薩の右わきをたちきつてゐる。

これに對する東部の菩薩立像は、寶珠形の頭光をせおひ、頭部は寶髻もろとも、全部こはれてゐる。兩肩はのこり、左肩から右わきへかゝる天衣の衣文がみとめられる。胴は大きな孔のためすっかりなくなるが、兩足さきはよくわかる。(膝幅12.80m)

Pl. 5, 6. 第二十洞 本尊佛坐像

1940年發掘以前の大佛である。膝の表面まで土砂をかぶつてゐるし、東脇佛の足は土砂のしたにうまつてゐる。大佛

雲岡石窟第二十洞

はまる顔で、堂々たる、ひろい肩をしてゐる。肩と光背との関係がよくわかる。肩と腕とを、誇張的にふとくしてをり、脇のしたをふかく彫りこんでゐる。したがって胸だけを見ると、不自然にせまく感じられる。本尊大光背は、佛頭の頂上から、急に水平にちかくなる。そのさきの岩は、かけてゐるが、こゝから天井となる。おそらく第十九洞のやうに、かなり平らで、楕圓形の天井であつたらう。(像高 13.46 m)

Pl. 7. 第二十洞 本尊佛坐像 上半

北壁には、光背に四つと、そのうへの損じた岩に六つの梁孔が水平にならんでゐる。これは石窟の壁と天井とが大破したのち、洞窟を保護する建築物をつくつたためであらう。本尊大光背(Rub. VIA)は、そこから火焰帯、坐佛帯、跪坐天人帯とならび、そのうちが圓形の頭光になって、ふたたび火焰帯にはじまり、坐佛帯をへて、蓮瓣帯でをはる。保存はだいたいによい。(頭高 4.10 m)

Pl. 8. 第二十洞 本尊佛坐像 下半

本尊の右肩に、衣端がかゝり、これが右肘をめぐって右手と膝とにまはつてゐる。右脇のおくに、衣文がほつてゐるのは、おもしろい。左肩はすっかり衣文がおほひ、左脇のしたにまで密着してゐる。ゑりには、衣のひだをあらはすのか、なゝめにジグザグの文様をつけてゐる。これは、かなりあつく彫つてゐる。左腕の衣文は、まづ線刻をならべ、その中間に一段と隆起したひだをつくる。この隆起した線はうへの方でとがり、したの方で二本を一本に合流させてゐる。さらに、左腕にかゝった衣文は、その末端膝に接するところに弧状をならべてゐる。要するに第十九洞大佛の階段式衣文とかなりちがつてゐる。左腕が北壁と接するところに、せまい三角形の衣がさがり、こゝにもジグザグ文様をあらはしてゐる。

この上衣に對し、左肩から右脇にはしる內衣は、あさい彫りで繊細にしめされてゐる(Pl. 14)。こゝの岩の破損がよくわかる。腹部の大破は泥でおぎなはれてゐる。両手は膝うへに水平によこたへ、手をくみあはせ、禪定形であつたにちがひない。拇指は両方からあがり、たがひにふれあつてゐたらしいが、いまはあとかたもない。腹や両手に、點々とみられる孔は、後世の補修をものがたつてゐる。(肩幅 9.00 m)

Pl. 9. 第二十洞 本尊佛坐像 上身 右側面

側面からみると、顔はきはめてするどい。額は垂直で、頭髮のはえぎはから鼻端まで、ほとんど一直線、そのながさは

1.65 m である。しかも、その突出はわずかに 0.09 m しかない。鼻のしたを水平にきりとり(0.38 m)、さらに垂直に 0.20 m で上唇にいたる。下唇はこれよりした 0.16 m しかも 0.10 m おくにある。顎には一條の曲線がほられてゐる。頬や顎のまろく、ふくよかなかたちに對し、顎はちやうどかたいカラアをはめたやうである。0.78 m の斜線をつくり、中間に一條の横道がはいる。耳はきはめて大きく、なめらかな形である。兩方とも、耳の上端を破損してゐる。これも落岩のためであらうか。肉髻、および頭髮部には、しあげ以前のあらぼりがのこつてゐる。右耳のうしろ、右肩のうへに、小龕二個がのこつてゐる。いづれも尖拱形、上龕はめづらしく、交脚の佛像で、兩わきに獅子がある。下龕は坐佛である。

圖版右端に東脇佛とそのうへの造像がみえる。したは二佛並坐龕、うへは坐佛龕で、いづれも南端を損じてゐる。なほ東壁、南壁の部分に造像がつづいてゐたことは、あきらかである。(肩幅 8.90 m)

Pl. 10. 第二十洞 本尊佛坐像 上身 左側面

東側からみた大佛側面である。耳のうしろに圓光の蓮華文がみえる。蓮瓣はわりあひにあさくほられてゐる。左肩と、耳のうしろに立佛があるが、これは Pl. 22 の説明をみられたい。左の耳も頂端が破損してゐる。肉髻および頭髮の部分には、あらぼりながら鑿あとがのこつてゐる。これで、頭部が胸よりまへに突出してゐるのがよくわかる。西壁がこはれてゐて、西方諸洞がそのむかふにみえてゐる。(頭高 4.10 m)

Pl. 11, 12. 第二十洞 本尊佛坐像 頭部

大佛の顔をすこしみあげた寫眞である。まろい顔である。髮際から頸のつけねまで、高さ 2.72 m、それに對し左右の耳をのぞいた幅が 2.56 m ある。目はみひらき、目じりはつりあがつてゐる(Rub. VIE)。腫が臉のそとにはみだしてほられてゐる。いまの腫は、のちに嵌入した黑釉陶器であり、まはりに泥をつめてゐる。眉はながく、眉間に白毫 ūṛṇa をまろくほつてゐる。鼻は額からつゞいたおなじ面の鼻梁と、左右の斜面とはつきり區別がある。鼻のさきはすこし損じてゐる。この損傷と、右の眉のきずとがあるだけで、顔面はまことに完好である。口は大きく、上唇は、實にやはらかな波状のカアヅをつくり、下唇(Rub. VIF)はうすい。口髭が、うすい彫りであらはされてゐる。肉髻の頂から、ねもとまで高さ 0.86 m、さらに 0.58 m さがつて髮際になる。髮際は中央でやゝさがつてゐる。肉髻は、もと窟の天井に接してゐた

とおもふが、いまはこの岩も破損してゐる。要するに、この大佛頭部は、第十九洞大佛にくらべらるべきもので、大きな岩塊に、これほど単純な彫刻をほどこして、微塵もすきを見せないのは、まことに驚くほかはない。(頭高 4.10m)

Pl. 13. 第二十洞 本尊佛坐像 左肩部

右肩は、頸のつけねまで上衣がおほつてゐる。まづ上衣の折りかへしであるが、肩に平滑な面をつくつて、それに堅の四條のつよい谷彫りをほどこす。なかの二條はしたでまるくつながつてゐる。折りかへしのジグザグの部分には、カエヅにそつて、なゝめにつよい谷彫りが二條あり、そのしたには、たてに四條のほりがある。いづれも、面はまるく仕上げてゐる。脇の衣文は、もりあげたひだをならべ、そのひだのうちへにも、したの谷あひにも、刻線をつくつてゐる。肩から胸まへにかけて、なゝめにしめされた內衣は、大衣にくらべると、あさい彫りである。縁かざりについては、つぎの圖版 Pl. 14 で説明する。そのしたには、こまかいひだが數條みえる。これにも浮きだしたひだが、一つおきにしめされてゐて上衣の衣文にちかい。(文様帯全幅 0.87m)

Pl. 14. 第二十洞 本尊佛坐像 右胸部 唐草文衣襟

うへにあらはな胸と右脇がみえ、したに內衣がゆるく傾斜してゐる。衣文のごくあさいことがわかる。縁かざり(Rub. VI d)は、まづそとに連珠文帯があるが、珠文のなかには線刻の環がある。つぎに唐草文があり、三葉の半パルメットを左右におき、ほそい帯でこれをしばつてゐる。三葉のうち、一番内がはの一葉をのばして、うへにつゞく半パルメットのそとがはにまはしてゐる。第十九洞大佛の唐草とは、またべつの形式である。(文様帯全幅 0.87m)

Pl. 15. 第二十洞 左脇侍佛

發掘以前の左脇侍である。頭部は、だいたい完好だが、肩と腰とに、わるい岩層が水平にあつて、いたみがひどい。通肩の衣をき、右手はあげ、左手はたれて衣端をにぎつてゐる。肩がはつてゐるが、衣文は身體にぴったりとつき、脇のしたや股間にはふかく密着してゐる。衣文は紐をおしつけたやうに凸出した條からなるが、表面はたひらになつて、刻線が一本ほつてある。つまり、本尊大佛とおなじ形式であるが、すこしこはばつてゐる。ゑりには、帯狀の衣文がまいてあること、胸中央には、獨特の平行した弧線がゑがゝれてゐること、曇曜窟の通例どほりである。外がはの壁が、すっかり崩壊してゐるが、もとは東壁があつて、南壁につゞいてゐたも

のである。北壁本尊とのあひだは、わづかししかあいてゐない。その部分に大きな孔がみえ、そのうへに、あさい彫りの脇侍菩薩の左肩と左腕(Pl. 18)とがみえる。(頭高 2.50m)

Pl. 16. 第二十洞 左脇侍佛 頭部

佛頭は、北壁本尊によく似てゐる。ほど完好であるが、正面に龜裂がとほり、左耳のさが損じてゐる。圓光(Rub. VI B)はそとがはに三葉唐草文帯、坐佛帶、跪坐天人帶があり、中央には、わづかながら蓮華文がある。本尊大光背の火焰帯は、この圓光とかさなつてゐる。(頭高 2.50m)

Pl. 17A. 第二十洞 右脇侍佛 足部

B. 第二十洞 左脇侍佛 足部

A. 右脇佛はこの足の部分しかのこつてゐない。それも右足がほとんどなくなり、左足も、膝とうちがはの足さが損じてゐる。兩足はひらいて半圓形の蓮座のうへに立つてゐる。蓮華は、たどしく彫つてあるが、これも磨滅をまぬがれてゐない。蓮座に接し本尊大佛の膝がみえる。圖版うへ、蓮座のむかふにみえる岩塊は、南壁のなごりであつて、これを延長すると、もとの南壁がほゞわかる。石窟内がいかにせまかつたかが推測されよう。(蓮座徑 4.45m)

B. 左脇佛の膝がみえ、そのしたに兩足がみえるが、ひどく破損してゐて、補修のまるい孔が點々としてみえてゐる。蓮座もかなりいたんでゐる。しかし、足と蓮座、および本尊の膝に接した位置など、右脇侍のとまったくおなじである。こゝでは南壁の遺存ははっきりしない。崩壊の程度は一層ひどいやうである。いま遼代の塼がすこしのこつてゐるのがわかる。(蓮座徑 4.50m)

Pl. 18. 第二十洞 左脇侍菩薩 上身

北壁本尊の、豪快な衣文のはしが左にみえ、左脇佛のこまかい衣文が右にみえ、その二つの谷あひに、脇侍の上半があさくのこつてゐる。頭部は痕跡もとどめてゐないし、腹部は大きな孔になつてゐる。頸には、ふちに連珠文のある、板かざり(Rub. VI c)をつける。これは中央でとがつてをり、鈴らしいものがさがつてゐる。左肩からは、なゝめに天衣がたれてゐるが、これは五條の階段狀のひだからなる。左腕には、腕環がある。これは、三條にわかれ、中央の條に連珠文がほどこされてゐるし、うへに大きなまるいかざりがつく。左肩には頭髮が波うつてゐる。

Pl. 19A. 第二十洞 左脇侍菩薩 足部

B. 第二十洞 北壁 西方下部 佛龕

A. 正面に左脇侍の兩足があさい臺のうへにみえる。左脇侍では、この部分がのこるだけで、上身はまったく消滅してゐる。兩足はひらいて、足さきをま横にしてゐるのは、第十八洞東壁の脇侍菩薩でもみたことである。裳のすそは足に密着し、そのあひだに、とがった衣端がたれ、それにジグザグの衣文がみえる。足に密着した衣文は、圖版B左端でわかるやうに、階段状をしてをり、その一段ごとに中間に線刻がある。左がはには、右脇佛の大きな足と蓮座がみえ、右まへには本尊大佛の足と、その衣文がみえる。

B. 右脇侍菩薩の左足と本尊膝とのあひだの壁面には二つの小龕がある。圖版Aの右がはである。ともに尖拱龕で二佛並坐である。西がはの龕は、うへに帳幕があり、拱額に七佛をあらはす。東がはの龕は、やゝ大きい、拱額は破損してゐる。うへにたくさんの千佛龕をきざんでゐる。西龕とともに第六洞式服制の佛で、顔はおもなが、なで肩で、衣文は繊細である。龕傍の脇侍もきしゃである。實壇には、銘匾をはさんで供養者列像がある。

Pl. 20. 第二十洞 北壁 光背 東部

本尊光背は、そとがはから火焰帶、坐佛帶、跪坐天人帶、それからふたゝび火焰帶、坐佛帶となり、中心には蓮華文がある。圖版では蓮華文はみえない。光背の上方は大破してゐるが、もとは曇曜窟の通例として、ドーム状の天井のなかばまで、のびてゐたのであらう。ほそく水平に、わるい岩層がみえ、また大佛左肩の上方に大きな龜裂がある。しかし、全體としてはめづらしく完好な光背である。光背の左翼は東にまがり、したに東脇佛の圓光が、本尊の火焰にきりこんでゐるのがみえる。光背の上方には、大きな飛天(Pl. 35)が、本尊にむかつてゐる。そのしたに、寶冠をつけた跪坐天人(Pl. 36)がある。この二體の東がはでは、壁が急に西面し、尖拱の坐佛龕がある。これはおしくも半分破損してゐる。坐佛は偏袒右肩、胸がはり、堂々としてゐるさまが、からうじてわかる。右脇侍菩薩は、龕内よこむきに立つ。小さい像だが、三面寶冠をつけ、ひきしまった、うつくしい顔容である。拱額には、なにも彫つてゐない。龕傍には、圓光をもった高髻天人が侍し、合掌してゐる。肩がいかり、頭を本尊の方にむけ、兩足を左右にふみひらいてゐる。下裳の衣文、および兩がはにたれた天衣が、こまかく彫つてある。そのうへに三面寶冠をつけた天人の上身があらはされてゐる。これらはPl. 35でみられたい。このしたには、二佛並坐龕があるが、

これは上龕と方向がちがつて、東脇佛とおなじく、ないめむきである。(光背坐佛高 約0.70m)

Pl. 21. 第二十洞 北壁 光背 東部

前圖より一層ちかづいた寫眞である。本尊の肩の衣文がよくわかる。線刻でたての條をつけ、そのあひだに、隆起の衣文を彫るが、これは尖端が劍さきのやうにとがつてゐる。圓光の火焰帶と、そのそとの跪坐天人帶とがつくる三角形のなかに、肩の火焰がつくられてゐる。これに對應する火焰は右肩(Pl. 29)にもある。この火焰はガンダラ彫刻、キジル壁畫に、すでにみられるものである。たとへば、フランス調査團がバクタヴァで發見した石彫の佛立像にもみとめられる¹⁾。

圓光の火焰と、舉身光の火焰とは、かなりちがつてゐる。圓光の方は、おだやかな流麗なカアヴで、ねもとを連弧状につらね、その弧の谷まからも焰がたちのぼつてゐる。火焰の一條づゝは、まるい浮彫にしあげられてゐる。そとがはの火焰はより複雑である。これについてはPl. 27をみられたい。(坐佛高約0.70m)

¹⁾ J. Hackin, *L'oeuvre de la délégation archéologique française en Afghanistan*, Tokyo 1933, Fig. 28.

Pl. 22. 第二十洞 北壁 光背 東部 頭光

本尊の左耳につづいて左肩がみえる(Fig. 22)。左肩のおくはあら彫りのまゝで、肩のうはばには、一列に三つの小孔がならぶ。これは後世に木造構架をほどとしたなごりであ

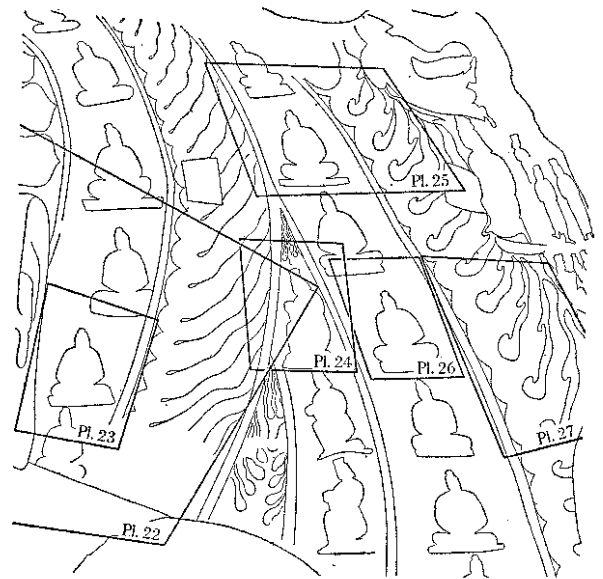


Fig. 22

らう。光背の曲面をなすさまがよくわかる。火焰帶のうちがはは坐佛帶で、一番したの坐佛と第三の坐佛は、本尊の

方に顔をむけてゐる。第二の坐佛は正面をむき、目をふせてゐる。いづれも偏袒右肩である。そのむかつて左、耳のうしろに佛の立像があり、それと坐佛とのあひだには、小さな尖拱龕があり、偏袒右肩の坐佛をほる。この小龕も、當時のものである。立佛は線刻の圓光をおひ、右手を胸にあて、左手をたれて衣端をとる。まる顔、どっしりした身體で、右肩右手をあらはにし、左肩からなゝめにかゝった衣が、身體に密着してゐる。衣文は、こまかい線刻からなり、左右にひらいた足がよくうかゞはれる。小さいがよくとゝのつた佛の立像である。(耳高 2.60m)

Pl. 23. 第二十洞 北壁 光背 東部 頭光 坐佛

蓮華文につぐ坐佛帶の、したから第二の佛である (Fig. 22)。あさい座は蓮座のつもりであらうが、彫刻はなく、したの坐佛の頭上に接してゐる。偏袒右肩の堂々たる身體、兩手は膝のうへにおく合手形である。兩方の拇指をあはせて山形をつくるのは興味ふかい。衣は身體に密接し、脇のしたをふかく彫りこみ、線刻の衣文は、階段状をしてゐる。上衣の折りがへし、そのジグザグの文様も、あざやかである。目をひくのは、內衣の縁が彫りあげられて、帶のやうにみえることである。これは光背の坐佛に共通してゐる。ゆたかな身體に對してやゝ小さい頭部も目につく。雲岡彫刻では頭部が大きすぎることが多いからである。頬と顎とが損じてゐるのはおしい。上脛を、きはだつてふくらませ、目をふせたさまを、うまく表現してゐる。大きな舉身光、頭光は素文で、周圍より、わづかだけ浮きだしてゐる。うへの坐佛の臺座がなゝめ上にみえてゐる。(像高 0.70m)

Pl. 24. 第二十洞 北壁 光背 東部 内帶 跪坐供養天

頭光の火焰が、むかつて 左にみえ、そとがはの坐佛帶とをつくる三角形に、跪坐の天人がある (Fig. 22)。この像をうへにして、したに、二體の同形の天人がある。胡跪のかたちで、そとがはの足をつき、兩手で蓮華をさゝげてゐる。手くびに腕環があり、上膊にも腕輪がある。左肩からなゝめにたれた天衣は、こまかい線刻の平行した衣文をしめし、その一端は、ながく左膝にまとひつく。これに對し裳の衣文は對照的におほまかで、足さきにおよんでゐる。女體をおもはせるやうな、柔軟な姿態は、ほかに匹敵するものがないほどの、艶麗さをしめしてゐる。このあさい身體の彫りに對して、頭部は量感がある。頬がゆたかで、顎がはる。このまる顔に、纖細な眉があり、ふくらんだ眼窠とふせた目があり、ひいでた、みじかい鼻がつく。ながい耳には大きな環が肩

までさがる。額の髪は中央から左右にわかれ、そのうへに三面寶冠をいたゞく。正面も、よこも、圓板の中心に小さい圓があり、そのあひだはパルメット飾がつく。寶冠からたれた三角巾が耳のうしろでよくわかる。頭と身體との比例もよくとゝのひ、うつくしい彫刻になつてゐる。圓光のうへには、火焰がたちのぼり、その中心には金剛杵のごときかたちの棒がある。上下に圓形をつけ、まんなかふくらんでゐる。たぶん、寶珠 cintāmaṇi であらう。

圓光の火焰は、うね彫りであり、なかに刻線をいれてゐるのがよくわかる。(像高 0.94m)

Pl. 25. 第二十洞 北壁 光背 東部 内帶 坐像

むかつて右に、そとの火焰、左に坐佛がみえる (Fig. 22)。この坐佛帶には、上下七體の坐佛がかさなつてゐるが、これはうへから第二である。通例のごとく禪定形で、偏袒右肩。たゞあらはな右肩、右腕は、岩が剝離してゐる。頭をやゝ本尊の方にむけてゐる。まる顔で、眼窠をふくらませてゐる。火焰については Pl. 27 の説明をみられたい。(像高 0.65m)

Pl. 26. 第二十洞 北壁 光背 東部 内帶 坐佛

Pl. 25 の下方、うへから第四の佛である (Fig. 22)。身體のゆたかな堂々たる禪定佛である。偏袒右肩で、衣におほはれた部分より、あらはな右肩の方のひろいのが目だつ。左腕にまとつた平行の線刻、衣文の上衣の折りがへしのジグザグ文、內衣のゑり飾、さらに兩方の拇指をあはせた山形など、前圖 Pl. 25 の坐佛におなじである。頭部は、やゝ小さいが、量感のゆたかな、ひきしまった彫りで、ふくらんだ眼窠、瞑想的な目、ひいでた鼻、するどい彫りの小さい口は、一分の隙をもしめさない。肉髻は大きく、まるいのが目をはひく。上身に對し、結跏趺坐する兩足はやゝ粗雑であり、無文の平板狀の臺座にすわつてゐる。石の狀態がよく、まことにみごとな彫刻である。(像高 0.70m)

Pl. 27. 第二十洞 北壁 光背 東部 外帶 火焰

本尊舉身光の外縁にある火焰で、したに東脇佛頭光の一部がみえる (Fig. 22)。火焰はきはめて豪快で、大佛の偉容にまことに似つかはしい。まづ、ねもとに連弧を三條つくり、その山形のあたまから、ほそい火焰がたちのぼる。つぎに連弧の谷にそつて、うちがはに C 字形をつくり、そのさきを弓形にそらせて、ふたゝび小さい C 字形にまきこむ。この部分は、焰の凝視からえられながら、中國特有な雲氣文に暗示された表現ともいへよう。なかに平行の線刻をほどこ

雲岡石窟第二十洞

すのも特異である。また彫法は、うね彫の立體性をとらず、平面であり、階段状である。したにみる東脇佛の三葉唐草の彫法とつよい対照である。また本尊圓光のうね彫とも対照的であり、変化をつけてゐるわけであらう。

Pl. 28. 第二十洞 北壁 光背 西部

Pl. 20の東部に對應した光背西部、ならびに西壁の破損したさまをしめしてゐる。光背の帶圈は、むろん、東部とおなじである。坐佛帶の坐佛は、みな本尊の方をむいてゐる。東部では、かならずしも統一されてゐなかつたのが注意される。光背のそとがはも東部と對應して、うへに飛天、つぎに跪坐天人があらはされてゐる。圖版したばに西脇佛の頭光の破損したさまがみえ、そのなゝめ上には、尖拱龕の一部がみえる。この龕は大破するが、二佛並坐とおもはれる。東部の二佛並坐龕に對應するのであらう。そのうへは壁面が消失するが、うつくしい脇侍の、からだのむきから判斷して、もとはやはり、東部とおなじ佛龕があつたものと、かんがへられる。その他の細部はPl. 42-49の説明を参照されたい。

Pl. 29. 第二十洞 北壁 光背 西部 頭光

Pl. 22に對應する西部で、本尊右耳がみえる(Fig. 23)。その尖端は、左耳とおなじく破損して、補修の泥がのこつてゐる。右肩のうへには、三つのまるい孔があること、左肩とおなじであり、おくの方の、あら彫りのぐあひもよくわかる。耳のうしろには上下に二つの小龕がかさなる。いづれも尖拱形のつもりだらうが、拱額はない。上龕は交脚佛、ゆたかな、よくまとまつた像で、もちろん當時のものである。獅子が左右に侍してゐることは、交脚菩薩像におなじである。下龕は一層小さく、うちに舉手形の坐佛がある。

本尊大佛の、右肩にあらはされた衣文の彫りかたが、よくわかる。(耳高2.46m)

Pl. 30. 第二十洞 北壁 光背 西部 頭光 坐佛

これは光背中心の蓮華文につぐ坐佛帶(Pl. 29)で、したから第二の坐佛である(Fig. 23)。まる顔で目をひらいてゐる。ゆたかな身體をもち、衣は左肩をおほひ、右肩にわづかにかゝる式である。禪定のかたちで、兩方の拇指が山形をつくつてゐる。上身の比例はよいが、くんだ兩膝は不自然に部あつた。頭光はなく、舉身光の頂上に、惡質の岩が水平にはしるのがみえる。(像高0.80m)

Pl. 31. 第二十洞 北壁 光背 西部 内帶 坐佛

内外の火焰にはさまれて坐佛帶がある(Fig. 23)。三角頂

には東部とおなじく、もえさかる火焰がある。たゞ、その中心は彫りとられて平面である。したに七體の坐佛がならぶが、こゝには、その二體がみえ、つゞきはPl. 32にしめされる。二體は、いづれも素朴な表現ながら、顔容には毅然たるものがある。(下方像高1.00m)

Pl. 32. 第二十洞 北壁 光背 西部 内帶 坐佛と 跪坐供養天

むかつて左に、坐佛三體がならぶ(Fig. 32)。おなじ形式ながら、多少作ゆきのちがひがある。ことに顔容は、それぞれちがつてゐる。しかし、いづれも眉、鼻、唇に共通した纖細さと、するどさがあらはれてゐる(Pl. 34B)。これは、となりの跪坐天人(Pl. 33, 34A)にも通じることである。(中央坐像高0.95m)

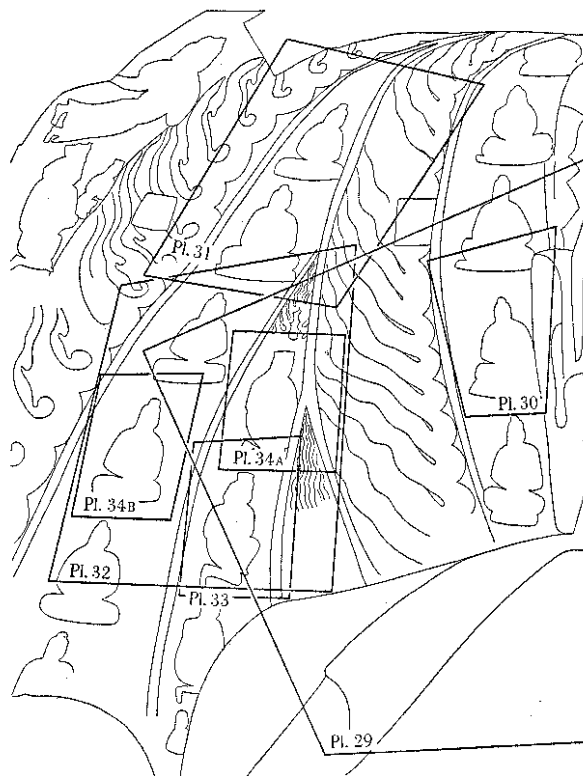


Fig. 23

Pl. 33. 第二十洞 北壁 光背 西部 内帶 跪坐供養天

Pl. 32にみたやうに、うへから第二の天人である(Fig. 23)。胡跪の兩足が、損じてゐる。顔を本尊の方にむけ、したをみてゐる。ひくい寶冠をつけ、その三角巾が、ていねいに彫つてある。額のひいでた、ふくよかな顔で、頬と顎がはつてゐる。眉目に、慧智的なかゞやきがあり、隆鼻のしたには小さく微妙な口がある。頭髮は、うね彫で明確にしめされ、ながい耳のうしろにもつゞいてゐる。頭部の立體的な彫法に比して、身體はやゝにふい。肩や胸はゆたかながら、合掌して

蓮華をもつ両手、両腕はよわい。天衣のはしが、右肘からたれて、ゆれてゐるが、それはたゞの線刻によって、あらはされてゐる。(像高 1.02m)

Pl. 34A. 第二十洞 北壁 光背 西部 内帯 跪坐供養天

B. 第二十洞 北壁 北背 西部 内帯 坐佛

A. Pl. 33 の天人のうへである (Fig. 23)。ゆたかな、まるい顔で、ひくい三面寶冠をつけてゐる。頭も身體も、おなじくあさい彫りである點が、Pl. 33 とことなつてゐる。頭髮は彫つてゐない。ふせた目も眉も、うつくしいが、小さい口もとは、實に微妙でみごとである。頸はほとんど彫らずに、すぐゆたかな肩になる。左肩をさげ、合掌する手つきは、まことにつましい。胡跪する兩足は、通例のことながら、下身がねじれてゐるかに感じさせる。この點は雲岡彫刻が最初から、素朴な型をおひ、寫實から出發したのでなかつたことをつけてゐる。(像高 1.00m)

B. Pl. 32 の坐佛である (Fig. 23)。顔を左にむけ、右肩をあげ、身體も左にむく氣持をしめしてゐる。額に、きずがあるのはおしいが、うつくしい顔容である。眼窠は、やゝふくらませ、目をふせてゐる。ひいでた鼻と、小さい口もとが、もつとも注意をひく。頭光はなく、舉身光のみが彫つてある。(像高 0.95m)

Pl. 35. 第二十洞 東壁 上部 供養天

むかつて左に、光背の火焰があり、それに接して飛天がある。これは殘存する東壁の最高所である。飛天は西部のものと對應するが、この石窟では尊像三體につぐ高浮彫で、壁からとびださんばかりに力づく彫つてある。頭部が損じたのはおしいが、寶冠をいたゞいてゐたらしく、左耳のうしろに三角巾がみえてゐる。

頭髮が左肩にそつてたれてゐる。また、圓光の一部もみられる。まるまるとした身體で、右手をまげて胸におき、掌を上にもけて花を盛つた華籠をさゝげてゐる。その五指がはっきりとあらはされてゐる。腕の上膊には、腕環があるが、これにはまんなかにまるい飾がつく。左手はそとがはにのばし、おなじやうに花を盛つた華籠を、なゝめにさゝげてゐる。この手と指はみごとである。頸には中心のとがつた板狀の頸飾をつける。腰はひねつて、兩足をひらいたまゝ、よこにたほしてゐる。上身には、左肩から右脇にかけて、天衣がなゝめにかゝるが、それにするどい線刻の條があらはされ、いかにもうすものをつけ、肉體がすいてみえる感じである。天衣の兩端は兩肘から、兩肩にそつてうしろにまはり、

一方ではねあがり、他方では波うちながら、たれてゐる。その先端は、二又になつてゐる。下裳は腰でひきしめられ、股間でかさねられて、足さきにいたる。すその簡潔な波狀と、兩足に密着した衣文のさまがよくわかる。量感にみちた飛天で、第七、第八洞のそれより、はるかにいきいきとしてゐる。(跪像高 1.40m)

Pl. 36. 第二十洞 東壁 上部 跪坐供養天

Pl. 35 の飛天の足がみえる。それに接して、胡跪の天人が蓮座にすわつてゐる。蓮座は、半圓形に浮きだし、その蓮瓣はうへにむかひ、左右にふくらみをつくつたものである。天人は寶冠をいたゞく。三面寶冠で、正面には弦月形と三重の圓板、わきには圓板のなかから繩をたらしめてゐる。左耳のうしろに三角巾がみえる。頭髮は、すこしづゝ、たばにして、中央からわけてゐる。なほ、ながい髪が左肩のはしにたれてゐる。本尊の方にむけた顔は大きく、かつまろく、頬と顎とがはつてをり、額がひいでゐる。眉と目は微妙で、口もとはひきしまつてゐる。柔和ではないが、特殊なうつくしさがある。頸はみじかく、ふとく、ゆたかな肩と胸がつゞく。兩腕は、おしくも消失してゐるが、それを胸において兩手で供物をもつてゐたのであらう。胡跪の下身は上身とよく調和してゐるが、まとつた裳と天衣とのさかひが、はっきりしない。左肩からなゝめにたれた天衣の衣文が、右足さきにまでつゞき、左足の衣文の線刻も、これに同調して身體に密着してゐる。

このむかつて右に二體の像があさく彫つてある。Pl. 35 でしられるやうに、東壁の坐佛龕に對する供養天である。立像は高髻形で、兩足をひらいて立ち、兩手を胸にあて、なにかをさゝげてゐる。よく比例のととのつた彫刻で、傷はあるが、顔容もうつくしい。左肩からたれた天衣が、右の腰から右足にまでまはり、左脚には、これと反對の傾斜をした線刻衣文がつくられてゐる。兩肘にかゝつた天衣が、兩わきから波狀になつてさがつてゐるのが、印象的である。頭には大きな圓光をおひ、そのうしろに、上身のみの供養天人がたつてゐる。これは、寶冠をいたゞき、小さいながらに正面に弦月形をつけ、右耳のうしろの三角巾もあきらかである。顔はまろく、眉目がうつくしい。兩手は胸におき、なにかをさゝげてゐるらしい。肘からたれた天衣が波うつてゐる。(像高 1.40m)

Pl. 37. 第二十洞 東壁 上部 二佛並坐龕

Pl. 36 のすぐしたの壁である。まんなかに二佛並坐龕 (Pl.

雲岡石窟第二十洞

38, 39)がある。この龕のそとがはは、岩が大破し、左の佛の腕、膝が消滅してゐる。ひらたい尖拱龕で、なかくぼみの拱額は入念にしあげられ、素文である。拱端には虎頭がつく。それをうけて、柱頭と柱がある。龕傍右翼には、上下に二體の脇侍があらはされる。したは菩薩立像、うへは胡跪の坐像(Pl. 40A, B)。ほかに、拱額のうへに二體と、跪坐像のうしろに一體とがある。以上五體は、いづれもひきしまつた顔容が共通してゐる。二佛並坐龕のしたには東脇佛の圓光の唐草がみえ、これにつづいて、そとがはに小さな尖拱龕があって、そのうへに二佛並坐龕(Pl. 38)がある。そのそとがはにも尖拱龕がなかばのこり、拱端に虎頭がみえてゐる。これも二佛並坐らしく、右の佛だけが、からうじてのこつてゐる。このあたりの岩質は良好で、彫刻はこまかい點までゆきとゞいてゐる。(龕高 1.40m)

Pl. 38. 第二十洞 東壁 上部 二佛並坐龕

左の佛は左肩、左わきが損じてゐるが、もとは二佛とも龕いっぱい彫つてあつたことがあきらかである。ともに同形式で、衣は左肩をつみ、右肩に衣端がわづかにかゝる式である。舉手形だが、衣端をとる左手は、一方が手くびをたれてゐるのに對し、一方は手くびをたてゐる。二佛が、たがひに身體をよせてゐるのは、相かたりあふがごとく、いかにも、多寶佛と釋迦佛との會合とおもはれる。拱端の虎頭は、大きな目、角、耳、ひらいた口が入念に彫つてあつて、力はないが、うつくしい裝飾である。柱頭は籐座らしいが、いまは下半分をかく。たてにうね彫をつくつてゐる。龕傍の脇侍立像は、右手を胸によこたへ圓形のものをもち、左手をたれて水瓶をもつ。三面寶冠をつけた頭も顔容もうつくしい。

龕のしたにある二佛並坐の小龕は、うへの龕の雛型ともかんがへられる。龕傍には、わりあひに大きな脇侍が、半身をあらはしてゐる。(像高 0.97m)

Pl. 39. 第二十洞 東壁 上部 二佛並坐龕 右坐佛

ゆたかな身體ながら、肩はまるくして、なゝめにさがつてゐる。そのため脇のしたも、さほど誇張して彫りこまず、おだやかな姿態になつてゐる。あげた右手は指の關節、掌のふくらみを入念にあらはす。衣文は細密な平行線で階段状となり、身體に密着する。上衣の折りかへしには、例のごとくジグザグ文がほどこされ、これは右肩からなゝめにたれて、右肘のうしろをまはり、右肩にいたる。顔はまるく、顎がとがり、眉間に白毫の彫りがある。やさしい眉目をしめし、形のよい鼻とうつくしい口もとがあらはされてゐる。

本尊光背の坐佛とは、まったく別の作風で、實に柔和である。(像高 0.97m)

Pl. 40A. 第二十洞 東壁 上部 二佛並坐龕 右脇跪坐 供養天

B. 第二十洞 東壁 上部 二佛並坐龕 右脇侍

A. 拱額のカーヴにそつて三體の供養天人が本尊の方にむかひ、供物をさゝげてゐる。胡跪の天人は、頭と身體との比例がよくできてゐて、身體をまへにかたむけ、兩手を胸におき、手さきにまるいものをさゝげてゐる。おそらく、蓮華であらう。その手ははっきりと浮きだしてゐる。三面寶冠のしたの髪かたちもとのひ、ゆたかな頬と顎のある顔容には、ひいでた鼻、ふくらんだ眼窠、愛らしい口もとがあり、ていねいな彫りがうつくしい。うしろの小さい立像は高髻形で、顔容はとのつてゐる。胸にあげた右手は、ながい唐草をさゝげてゐる。さらに、むかつて右に、高髻天人の半身がみえる。これは、胸にあげた右手に、蓮華の蕾をもつてゐる。(像高 0.68m)

B. 龕傍の右脇侍立像である。これも身體と頭との比例がよくとれてゐる。寶冠の中央に、弦月形と圓板があり、よこにも圓板があるが、その中間に、また小さい圓板がはさまつてゐる。三面寶冠の一種である。まるい顔は眉目が凛々しく、口もとはするどい。兩足を左右にひらいてゐるが、股間にするどく彫りこんだ鑿のあとがあきらかである。裳の衣文は左右の斜線からなるが、腰のあたり、裳の上縁がはっきりしない。この衣文では、裳を左右からまいて、まへではせたやうである。右手は胸におき、掌上に大きなまるいものをさゝげ、左手はたれて水瓶をさげてゐる。拱端の柱頭部、および柱がよくわかる。(像高 0.72m)

Pl. 41A. 第二十洞 東壁 上部 二佛並坐龕

B. 第二十洞 東壁 上部 佛坐像

A. 東脇佛の圓光のそとがはにある尖拱龕で、二佛並坐である。きはめて小さい像ではあるが、こまかく彫つてゐるのは興味ふかい。龕傍の脇侍は、上身だけで、かへつて大きい。頭部のほか上身ははっきりあらはしてゐない。胸にあげた右手のさきは、ねじれて、したをむいてゐる。

B. 北壁東端の、最高所の壁は、急に一轉して南にむきをかへてゐる。左に飛天の手足がみえ、それと直角になつた壁に小坐佛がみえる。龕形なく、舉身光につつまれた禪定形である。ほかの石窟では、天井に接して坐佛列があるが、これはその一つであるらしい。身體はやゝきゃしゃで、左の肩

のひくいのが目につく。衣は左肩をつゝみ右肩に衣端がかゝる式である。當初のものであることはまちがひない。寶壇があり、中央に香爐があり、左右二體づゝの供養者があさく彫つてある。むかつて右は僧、左は男子らしいが、天人形であるのはめづらしい。

Pl. 42. 第二十洞 西壁 上部

火焰光背の西がはには、壁の頂上に飛天があり、そのしたに跪坐の供養天人がある。これは東部とまったく對應的(Pl. 35)である。圖版左下隅に尖拱龕の一部が見えるが、これも東部の二佛並坐龕に對應する。このあたり立像や跪坐の供養天人像が散見するが、方向は二種からなる。火焰にちかい方は、大佛本尊の方をむき、他は反對の方をむいてゐる。西がはの壁が大破するが、もとはこれらの供養者に對する、佛龕のあったことが暗示される。(上方跪坐像 1.32m)

Pl. 43. 第二十洞 西壁 上部 供養天

飛天は、三面寶冠をつけてゐる。寶冠の正面、圓板のうへに弦月形のはつきりみえる。まる顔で、髪をすこしづゝ束にし、中央からわけてゐる。ひいでた鼻、うつくしい口もとだが、やさしい眉目の彫りは、したの供養天人たちとちがふのが目につく。左手をまげて胸におき、掌に蓮華を盛った華籠をもつてゐる。右手はよこにのばしてゐるが、おしいことに、壁の破損で手さきがかけてゐる。上身はたてゝ、胸をつきだし、下身ははらばふ姿勢で兩足をよこたへ、うしろにひく。右足をやゝ上にして、左足の踵に右足の指をあてるかたちは、微妙でおもしろい。腹からしたの岩が破損してゐるが、たかい浮彫であることがよくわかる。天衣は腕にかゝり、背後にまはること通例のごとくであるが、左肩から左腕にそつた部分には、折りかへしのジグザグ文があり目をひく。頸飾は板狀で、中央に珠が一つさがり、兩腕の上膊には腕環がある。

飛天の足のしたには、西むきの供養天人が數體みられる。一番うへの、もっとも小さい天人は、上身をなゝめにたほしてゐる。そのしたに寶珠光背をつけた天人が立つ。この二體の天人のうちがはの曲線は、尖拱形の拱額の一部であることがわかるから、この天人のグループ、すなはち圖版左下隅の二體をくはへた四體(Pl. 45)は、脇侍および供養天人であることがあきらかである。(跪坐像高 1.32m)

Pl. 44. 第二十洞 西壁 上部 跪坐供養天

飛天のしたにこの跪坐の天人がある。かなり凸出した臺

座は、下部に粗惡な岩層があり、大破してゐる。頭も身體もゆたかで、肉體のしなやかさが、岩質の良好なものと相まつて、十分に發揮されてゐる。上身にくらべて下身が不自然に小さいのは、したのわるい岩をさけて、像をしあげたからであらう。三面寶冠は入念に彫つてある。正面に、弦月形と圓板があり、圓板は外縁に線刻、中心にまるい突起がつく。頭髮はまんなかでわけられ、一つづゝが牙をならべたやうな、するどさがある。耳のはしに大きな環飾がたれてゐる。はりきつた、まる顔で、眉も鼻もつよく、眼窠をふくらませて、ほそい眼を線刻でいれてゐる。風化のすくない、みごとな製作である。頸はふとく、みじかく、よこの方は顎のしたから肩の線になつてゐる。兩手で大きな華籠をさゝげてゐるが、その指も、一々いきいきとあらはされてゐる。腕はまるまるとふとい。衣文は單純で、左肩からなゝめに、線刻の天衣がほどこされ、それが腰をおほひ、兩足をつゝんでゐる。肘に天衣がかゝつて、したにたれてゐるが、あまり目だゝない。

この像と火焰とのすきまに、小形の跪坐天人があり、やはり本尊の方をむいてゐる。手をあはせて合掌し、頭にはひくいながら冠をいたゞく。顔容の特色は、よこの天人とおなじであるのに注意されたい。たてた左膝が不自然に小さいのは、空間がないからであらう。(像高 1.32m)

Pl. 45. 第二十洞 西壁 上部 佛龕 左脇 供養者群

Pl. 43 でみたやうに、西がは佛龕の左脇侍三體である。まんなかの像はやゝ大きい。めづらしく剃髮形のまるい頭で、左手は胸にあてゝなにかをもち、右手はたれて水瓶をもつ。水瓶はゆがんでゐる。頭がやゝ大きすぎ、バランスをやぶるが、ふとつた身體はどつしりと安定がよい。圓光の頂に接して拱額の縁の一部がみえてゐる。したがつて、むかつて左は龕内にあたり、そこに左脇侍菩薩が立ち、その足下には侏儒が蹲踞してゐる。侏儒のしたには、寶壇の一部が見える。この脇侍は三面寶冠をいたゞき、華麗な頸飾をつけてゐる。胸まへに合掌し、蓮華やうのものをもつてゐる。柔和な彫刻である。(僧形高 0.95m)

Pl. 46. 第二十洞 西壁 上部 二佛並坐龕

むかつて右に、火焰帶があり、中央したに西脇侍佛の圓光がある。圓光は、一部しかのこらないが、坐佛帶のそとに三葉の半パルメット唐草帶がある。この唐草帶の中央に、尖拱形二佛並坐の小龕が、なかばのこつてゐるのは注目される。これは、あきらかに當初から、圓光の頂點に、唐草文帶をきりこんで彫られたもので、のちの追刻ではない。しか

雲岡石窟第二十洞

し、東脇侍佛の頭光にもそれよりはやく、もしくはそれと同時に、彫られたとおもはれる小佛龕(Pl.37)がある。してみると、これも偶然に、この位置に、くひこんで彫られることになったのかも知れない。この小龕の東わきには供養天人が二體ある(Pl.49A, B)。

さらに西がはには半壊の尖拱龕(Pl.48)がある。この龕の東わきには跪坐の供養天人二體(Pl.47A)が上下にある。したの天人と背中あはせに跪坐する天人は、火焰の方をむいてゐる。つまり北壁本尊に供養する(Pl.47B)のである。(内側跪坐像高1.05m)

Pl.47A. 第二十洞 西壁 上部 二佛並坐龕 跪坐供養天

B. 第二十洞 西壁 上部 跪坐供養天

A. Pl.46にみたごとく、二佛の並坐龕に對する供養天人である。一體は龕側に接し、一體はそのなゝめ上である。二體ともおなじ姿勢をしてをり、兩手を胸において、まるいものをさゝげてゐる。うへの像は頭髮をあらはすが、したの像はあらはしてゐない。(像高0.95m)

B. これはPl.46にみたごとく、北壁本尊に對する供養天人である。豐滿な身體で、兩腕はほそい。合掌形である。身體の比例はよくとゝのつてゐる。あさい寶冠のしたの頭髮はつよく彫つてある。(像高1.05m)

Pl.48. 第二十洞 西壁 上部 二佛並坐龕 左坐佛

Pl.46にみたごとく、西脇佛のうへ西にある。尖拱龕で、

いまは半ばしかのこつてゐないが、もとは二佛並坐龕にちがひない。左拱端に獸頭と、そのしたの簾座がのこるが、拱額に彫刻はない。左佛は右肩に衣端のかゝる衣制で、右手をあげてゐるのがほどわかる。まる顔に眉目、鼻、脣を明快にほり、嚴肅な表情をしてゐる。下半身はおしくも損じてゐる。二佛並坐の龕としては、東龕(Pl.38)と相照應してゐるのである。

Pl.49A. 第二十洞 西壁 上部 二佛並坐龕 左脇供養者

B. 第二十洞 西壁 上部 二佛並坐龕

A. Pl.46にみたやうに、西脇侍圓光唐草の中心部には、尖拱形二佛並坐龕があり、その東わきには、矩形の銘區があり、線刻の文字がある。

□□□及知

識造多、ゝゝ區。

B. この文字にならんで高髻形の供養天人がみえる。兩手に、大きなものをさゝげてゐる。衣端のやうにみえるが、供養の花であらうか。さらにつぎのやうな文字を三行に線刻する。

佛弟子□□。

爲七世父母。所

生父母□□。

つゞいて頭をまげた供養者が跪坐する。頭巾らしいものをいたゞき、襟をあはせた衣をまとひ、兩手で大きな果實のやうなものをさゝげてゐる。

出土斷石

1939年と1940年の整地にもなふ發掘で出土したものが大部分であるが、それまでに散亂してゐたもので、こゝにあつめたものも若干ある。それを第六洞まへの西客殿にいれてゐた。しかし、まだその斷片を精査しないうちに、調査がうちきられたから記録はまったくとゝのつてゐない。たゞ目ぼしいものゝ寫眞が、手もとにあるので、出土品の一般を知らせるため、こゝに掲載した。とくに、ことわらないものは、みな曇曜五窟の内外で出土したものである。大部分は、第二十洞まへの出土であるが、まへの堆積土をとつたとき出土したものもある。洞内に散在してゐたもの、民家の壁中にあつたものもある。發掘の詳細については最後の第十五卷に記すつもりである。

Pl.50A-I. 佛菩薩天人 頭部

Aは佛、Fも佛、その他は菩薩もしくは天人である。佛頭(F)はもつともふつうの佛で、背後の岩つきが大きくかきとられてゐる。それに対し、佛頭(A)はほとんど岩つきがなく、まったくの丸彫のやうにみえる。佛頭(F)はよくとゝのつた丸顔であるが、目は簡素で、たゞ一本の刻線である。

B, C, D, E はみな寶冠のない天人であらう。そのうち天人頭部(B, C)はあさい浮彫で、なゝめむきであるから、供養者群像の一部であらう。とくに、頭部(C)は顔が童顔で、頭髮がうねつてゐるやうすは、天童形を暗示してゐる。天人頭部(D)は眉梁の大きな、目のうつくしい、口の微笑のはつきりした、特色のある彫刻である。

G, H, I は小さい供養者たちの頭部である。寶冠のあるなしでいへば, G は菩薩, 他は天人となる。第十六洞明窓の佛龕など(本書, 第十一卷, Pl. 51, 55, 56)をみると, かういふ天人供養者のあるでしょがわかる。A から F は雲岡前期, それにくらべると, G, H, I の三つはやゝ時代のさがるものであらう。

Pl. 51A-E. 佛菩薩天人 胸部と手

B と E とはあきらかに佛, たぶん坐佛であらう。どちらも, 衣文が立體的であるのが特色で, 第二十洞の三尊(Pl. 4)にやゝちかい。そのうち前者は獨立像であるらしいのがめづらしく, 後者はかなり大きな左の手くびである。たぶん, 衣端を掌上にのせてゐるのであらう。

菩薩(A)は, あきらかに龕傍の小像であり, 天人(C)(D)は供養者群の合掌像であらう。あさい浮彫である。

Pl. 52A-C. 飛天 頭部

飛天(A)は, 髻がよこになびいてゐるので, 飛天とみとめるのであるが, 胸に琵琶をあて, 右手でこれを奏してゐる。いま, 大破した禪定佛のひざが, これの直上に接してゐるのは, この斷石の所在を, きめるかぎになるとおもふ。飛天(B)と(C)とは, たゞとんでゐるだけの天人であるが, 像が大きく, 斷石も大きいのは, 天井からの落岩でないかとおもはせるに充分である。前者は全長1.08mである。

Pl. 53A-C. 佛龕

これらは, みな第二十洞のまへから發掘されたが, A は佛龕臺座の俗人供養者であることはあきらかで, 服裝はきまつた式である。相むかつた男女の一對像であるのが, めづらしい。B はあさい合掌の供養菩薩である。そのゆたかな肉づけと, ナイヴな表情とをみれば, 第二十洞壁面の像であつたことがよくわかる(Pl. 44)。前者も, たぶん, 第二十洞の壁面にあつたのであらう。

これに反し, C の佛龕は雲岡後期の特色をもち, あきらかに第二十洞本來のものでない。そのうへ四方がきりとられ, あつさも一定して, 完結してゐる。どこかに, はめこんだやうな板である。坐佛をおさめた尖拱龕で, よくとゝのつてゐる。脇侍が左右にたち, 合掌供養者が拱上にあり, 最上層には千佛をあらはす小佛龕がある。內衣のひものたれない, かけもの發達しない第十六洞内の諸龕(本書, 第十一卷, Pl. 105)をみるやうな感じである。

Pl. 54A-F. 千佛龕と光背

みな曇曜五窟まへからでたものである。大小さまさまあつてどこのもとはいへない。たゞEの大部分は外壁の小佛龕の式である。そのうち, 無龕の千佛も左端中央にみられる。Eの左下隅は龕傍の供養者像であらう。第十八洞明窓(本書, 第十二卷, Pl. 81)などにみられる式である。

光背(F)は, やゝ青味をおびた緻密な石で, その點からも特徴ははっきりしてゐるが, その所在は不明である。外區の火焰がみえ, 内區の坐佛列がみられる。

Pl. 55 A-I. 手と蓮華

左手(A)は, かなり大きな菩薩像の, 胸にあげた手とおもはれる。右手(B)は第十八洞からでた。おそらく第十八洞内西部十大弟子上列西端の手(本書, 第十二卷, Pl. 136)であらう。胸にあげた手で衣端をもつてゐるのであらう。指はながくうつくしい。右端に田相になつた衣がのこつてゐるから, 僧像であることが, この點からもわかる。左手(C)も胸にあげ, 衣端をもつた手である。上下の位置は, 寫眞の反對とおもはれる。

蓮華の斷石はみな大きく, たぶんは, 天井の一部分とおもはれる。いづれも複瓣のみごとなものばかりである。蓮華(F-I)は第十五洞まへの民家に, ぬりこめられてゐたものである。

Pl. 56A-F. 獸形

龍頭(A)はPl. 54の蓮華(F-I)とともに第十五洞まへの民家にあつたものである。あるひは第十五洞天井(本書, 第十一卷, Pl. 38)の一部とみてもよいほどに, 作ゆきはちかい。彫りのふかさもほど似てゐる。龍頭(C)はもつと立體的で, 單純であるが, 拱梁の一部で, 第七, 第八洞明窓拱端の龍(本書, 第四卷, Pl. 90, 第五卷, Pl. 85)をおもはせる。前者よりも一段と古いであらう。拱端龍形(B)は大きな角, まがつた鼻をもち, 一種獨特の顔だちである。前脚でたち, 胴は拱梁になつてゐる。平面的な彫刻である。拱端虎頭(D)は前者よりはやゝふかい浮彫, 生き生きとし, そのうへに拱額の坐佛が一帶みえる。第十六洞あたりの佛龕拱端(本書, 第十一卷, Pl. 55)にみる形式である。もちろん獅子といつてもよい。

獅子(E)はやゝ異例である。おなじ砂岩に彫つてゐるけれども, たぶん時代のちがふ遼以後のものであらう。獅子(F)は交脚像のわきにうづくまる獅子である。ほとんど丸彫の頭で, 第十六洞にも好例(本書, 第十一卷, Pl. 73)がある。牙をだし, 目をむき, ふつうの形式であるが, とくにまんま

雲岡石窟 第二十洞

るいのが、この像の特色であらう。

Pl. 57A-D. 斷石各種

斷石(A)はあきらかに第十洞前室北壁門口わき(本書、第七卷, Pl. 25, Rub.VN)の一部である。下層と佛傳帶とをわかつ蓮瓣帶であり、そのうへに門口門簷の蓮華が、一部のこつてゐる。とともに、むかつて左端には、門口わきの唐草文帶がある。

斷石(B)は第九、第十洞の門口あたりにみる、唐草文帶と同様である。はたしてどこにあったか、いまきめがたいが、

鍛になった唐草の蔓、そのなかに童子が跳躍してゐる。

斷石(D)は葡萄唐草文帶である。これは第十五洞天井の梁(本書、第十一卷, Pl. 38)に一致する。上端にのこる渦文も龍形の一部と解釋すれば、これが第十五洞の天井であつたことは、ますますあきらかになる。

斷石(C)は佛龕の一部である。上龕は交脚菩薩。下龕も楣拱龕の頂上、三角と葱頭とのかざりらしい。様式は、やや發達した後期式で、第十七、第十八洞門口あたり(本書、第十二卷, Pl. 4, 87)にみる佛龕の形式である。